## 令和元年度 NCNP原著論文一覧表

著者、発表者等	論文名、演題名等	掲載誌、学会等	成果又は特記事項
Der Vartanian A, Qu?tin M, Michineau S, Aurad? F, Hayashi S, Dubois C, Rocancourt D, Drayton-Libotte B, Szegedi A, Buckingham M, Conway SJ, Gervais M, Relaix F	PAX3 Confers Functional Heterogeneity in Skeletal Muscle Stem Cell Responses to Environmental Stress	CELL STEM CELL	骨格筋幹細胞は生後の骨格筋における体止状態の幹細胞である。汚染などの環境ストレスが筋幹細胞に及ぼす影響は不明であることから、ダイオキシン類(TCDD)の暴露による筋幹細胞への影響を検討した。全ての筋幹細胞は転写因子PAX7を発現するが、筋幹細胞の一部のサブセットはさらにPAX3を発現しており、これらの筋幹細胞は環境ストレスに対して耐性を持っていた。PAX3を欠損した筋幹細胞はTCDDの全身独与により生存率の低下、異常な活性化や動発的な分化を引き起こし、これらのジケナルはAyi hydrocarbon Receptor を介していた。さらに筋幹細胞でPAX3の機能を阻害すると、環境ストレスに対して過敏になり、PAX3を介したこの防部機構にはmTORC1が重要であることが明らかとなった。これらのことから、筋幹細胞の環境ストレスに対する機能的不均一性はPAX3によって制御されていることが明らかとなった。
Nishikawa A, lida A, Hayashi S, Okubo M, Oya Y, Yamanaka G, Takahashi I, Nonaka I, Noguchi S, Nishino I	Three novel MTM1 pathogenic variants identified in Japanese patients with X-linked myotubular myopathy	MOLECULAR GENETICS & GENOMIC MEDICINE 7 (5) ,e621 - e621,05,2019	我々はX連續性ミオチュブラーミオパチーにおいて、4つの新規パリアントを検出した。いずれのパリアントもPTPドメインに位置しており、種の保存性、健常人データベースデータ、患者の臨床病理情報からもこれらのパリアントは疾患の原因変異であると考えられた。
Inoue M. Uchino S. lida A. Noguchi S. Hayashi S. Takahashi T. Fujii K. Komaki H. Takeshita E. Nonaka I. Okada Y. Yoshizawa T. Van Lommel L. Schuit F. Goto YI. Mimaki M. Nishino I	COX6A2 variants cause a muscle- specific cytochrome c oxidase deficiency	ANNALS OF NEUROLOGY 86 (2) ,193 - 202.08.2019	チトクロームo酸化酵素(COX)欠損症は、ミトコンドリア呼吸鎖複合体の障害であり、多くの場合、多臓器が障害される。これまでに横紋筋特異的なOX欠損症を起こす核遺伝子の報告はない。我内は臨床的に先天性セオバチーと診断された患者2人に全エクツーム解析を行い、COX6A2と配可アルル性のミスセンフを異を認めた。患者2人は共通して乳児期までに骨格筋の症状を認め、1人は心断の症状を認めた。他の臓器の症状は認めなかった。患者骨格筋ではCOX5性の低下、複合体/Vのアセンブー 帰害を認めた。Cox6a2と人べつマクネ機能でも関係の能果が得られたCOX6A2はCOXのサブユニットであり、骨格筋・心筋にのみ発現しているため、症状が骨格筋・心筋に限定されたと考えられた。我々は、これまでのCOX欠損症と異なる、横紋筋特質的な症状を来す新たなCOX欠損症の原因遺伝子を同定した。
Okubo M. Noguchi S. Hayashi S, Nakamura H, Komaki H, Matsuo M, Nishino I	Exon skipping induced by nonsense/frameshift mutations in DMD gene results in Becker muscular dystrophy	HUMAN GENETICS	ジストロフィン(DMD)遺伝子のナンセンス変異、フレームシフト変異はデュシェンヌ型筋ジストロフィー(DMD)を引き起こす。しかし、一部のナンセンス/フレームシフト変異がベッカー型筋ジストロフィー(BMD)の原因となる症例も散見される。たれば変異を有するエクソンがスキップすることに起因すると報告されている。今回我々はナンセンス/フレーンシアト変異を有するBMDを移動を見せ、更に変異ことのエクソンスキップ効率を終れした。変異の抽出にはRemudyデータペースを使用し、ナンセンス/フレームシフトを有するBMDを18例認かた。更にBMD変異と同エフソン上のDMD変異を16例思し、コントロールに用いた。これらの変異を認めたエクソンとの性別変異と18月以して変異の有無によるスプライシングが率の変化を測定した。シンを作製し、近路輸出に導入して変異の有無によるスプライシングの準の変化を測定した。以野機能に導入して変異の有無によるスプライシングが率の変化を測定した。3%であった。またBMDを引き起こす変質では、スキップ効率が高い例ほど臨床的に軽症であった。今回の結果からは、BMDとなるにはエクソンスキップ効率は高性でも5分を変更なのまた。今回がサンセンス/フレームシフト変異がBMDを引き起こすことが実験的にも証明された。昨今、遺伝子診断が主張となりつつある中では、このような症例の存在を念頭に置き、臨床像を評価することが重要であり、症例に応じて組織学的・生化学的評価を行うことも必要である。
Hara A. Amano R. Yokote H. Ijima M. Zeniva S. Uchihara T. Yada S. Masumura M. Takei H. Nishino I. Toru S	Secondary cardiac involvement in anti- SRP-antibody-positive myopathy; an 87- year-old woman with heart failure symptoms as the first clinical presentation	BMC NEUROLOGY	解景:境死性ミオバチー(Necrotizing myopathy NM)はリンパ球性の炎症細胞浸潤を欠害、前線維の壊死が筋病理学的に見られることによって定義されている。抗SPPが指揮性ミオバチーは壊死性ミオバチーと関連している。抗SPPが存職性ミオバチーと地域で大きない。抗SPPが存職性ミオバチーと他の疾患との併存はいくらかの患者で見られるが、これまでに悪性腫瘍と心臓や筋炎を併存した例の結合性が高います。 経例:87歳女性で、労作時の息切れと下肢の浮腫、高CK血症のためや不全が疑われて当院に入院した。入院時、近位前 有態の筋力低下を認めた。肺生核と血液の免疫等的検査により、抗SPPが保障性ミオバチーと診断された。大腸癌も見 つかり、外科の関係された。外科的に癌を切除し、メチルブレトニソロンで当然をしたが、筋力低下域や上尾・心臓の スクリーニングでは、不整脈と心臓液肿管にともなう拡張不全を認めた。N/G後には心臓液肿管は改善した。 お話:我々は初めて抗SPPが原理性ミオバチーに大腸色と心臓の筋炎を作りに患者を発性した。本を関は小全が假 初の臨床症状であった点が特質的である。その健康は不明であるが、臨床医は抗SPP抗体陽性ミオバチーの患者を診た ときは、嫌痛や心合併症に注意をい、さらなる評価を考慮すべきである。
Aoki R. Kokubun N. Komagamine T, Shimizu J. Nishino I. Kurasawa K. Hirata K	Needle electromyography, muscle MRI, and muscle pathology: Correlations in idlopathic inflammatory myopathies	NEUROLOGY AND CLINICAL NEUROSCIENCE	〈計量〉針紡電図において、異常な自発活動は活動性のある筋炎の氷燥とみなされる。しかしながら、針筋電図と筋病理との関係がいつも明確になるわけではない。さらに、ステロイド治療後の針板電図の変化は十分に分かっていない。くの診り特殊性筋炎患者側がにとおける原理と針筋電図、骨格筋MINFIQとの関係を範則する。く方法ン筋生検を施行されたIIMAの850患者の選末氷燥、検査結果、針筋電図、骨格筋MINFIQ、あよび病理学的氷燥をまとめ、さらにステロイド治療前後で11.0分所見の変化の特徴を育団、骨格筋MINFIQ、および病理学的兆候をまとめ、さらにステロイド治療前後で11.0分所見の変化の特徴を育団、骨格筋MINFIQ、および病理学的北保をまと、は果と思も頻度の高いIIMAは皮膚筋炎(40%)である。針桁電図では複雑自身放電(衛性放変(Fb/PSWs)は172%の患者で制整された。MI内臓学は80%の患者で刺撃された。MI内臓学は80%の患者で刺撃された。MI内臓学は80%の患者で刺撃された。MI内臓学は80%の患者で刺撃された。MI内臓が自20%と治療後の存化の20%とで違いはなかった。現理学的にも、外籍もしくは血管周囲の炎症機能を凝していても、ステロイド治療前の数129%よりも治療後の豚(0%において優位に少なかった。しかしながら、内障の改症網沿後はステロイド治療前の豚129%よりも治療後の豚(0%において優位に少なかった。しかしながら、内障の改症網沿後は30%の研究を経まえ、針筋電図での下り下9%は今格筋が旧は、IIMAの診断には速度が高く、便性的によりたいでありまり、100%の研究を経まえ、針筋電図での下り下9%は今格筋が旧は、IIMAの診断には速度が高く、便性的に大きが大きが大きが大きが大きが大きが大きが大きが大きが大きが大きが大きが大きが大
El Sherif R, Hussein RS, Nishino I	"Boule du biceps" in dysferlinopathy	NEUROLOGY	Dysferlinopathy(ジスフェルリン関連筋ジストロフィー)患者の71%(17/24)に "boule du biceps (上腕二頭筋の膨ら み)" を認めた。同所見を有する例のMR画像では上腺二頭筋の近位端が保たれ、遠位端のみが変線していた。近位端も 変線した進行例では同所見はあられなかった。また、同所見を認めなかった7例は全砂が行不能であり、同所見を有する 例よりMRCスコアが低かった。以上より、"boule du biceps" は上腕二頭筋の遠位端のみが萎縮したときに表れる所 見であり、disferlinopathyの早期診断に役立つと考えられた。
Okano S, Shimada S, Tanaka R, Okayama A, Kajihama A, Suzuki N, Nakau K, Takahashi S, Matsumoto N, Saitsu H, Tanboon J, Nishino I, Azuma H	Life-threatening muscle complications of COL4A1-ralated disorder	BRAIN AND DEVELOPMENT	COL4A1関連疾患は、基底膜の安定性のため必要不可欠であるIV型コラーゲンα1鎖をコードするCOL4A1遺伝子によってコードされるため、全身性疾患として認識されている。しかしながら、本疾患の筋の兆候は報告が稀である。今 回、孔脳症の2歳男児においてCOL4A1遺伝子にc.1853GAIGIが618GIJの新規変異を持ち、アイルスもしくは細菌 感染時に構故筋酸解症を反射したケースを報告する。その例では、さらに外科的介入が必要反関室性肥大型心筋症を発症 した。骨格筋生検では、紡績能不均等症を呈した。骨格筋における酸増構造の解析では過去に報告されたCOL4A1遺伝 子変異のマウスと同様に、毛縛血管内皮健砂や紡績能の基底膜で電子で置の減少を認めた。毛縛血管内皮健固における弦 ほした小胞体も記録された。本報告により、孔脳症、肥大型心筋症、横紋筋融解症、筋線維不均等症を含んだCOL4A1 遺伝子のもう一つの疾患スペクトラムが追加される。
Minamiyama S, Ueda S, Nakashima R, Yamakado H, Sakato Y, Yamashita H, Sawamoto N, Fujimoto R, Nishino I, Urushitani M, Mimori T, Takahashi R	Thigh muscle MRI findings in myopathy associated with anti-mitochondrial antibody	MUSCLE AND NERVE	抗ミトコンドリア抗体陽性筋炎6例の大腿MPI画像を解析した。STIP指影法では特に内転筋が高信号であり、病勢を反映 した("cuneiform sign")。また内転筋および半膜横断で脂肪化が顕著であった。これらは他の炎症性筋疾患とは異なる特異的な所見であり、筋MPIにおける炎症性変化の局在バターンが抗ミトコンドリア抗体陽性筋炎の診断に有用であると考えた。
Mori-Yoshimura M, Mizuno Y, Yoshida S, Ishihara N, Minami N, Morimoto E, Maruo K, Nonaka I, Komaki H, Nishino I, Sekiguchi M, Sato N, Takeda S, Takahashi Y	Psychiatric and neurodevelopmental aspects of Becker muscular dystrophy	NEUROMUSCULA R DISORDERS	Remudvに登録しているBecker型防シストロフィー患者105名を対象に精神的問題に関するアンケート調査を行った。 76名(73%)から回答があった。発達障害、いじめ体験、自殺や最力等の問題行動、精神疾患があると回答した人はそれ それら、33、11、16名と高かった。心理検査ではうつ病スコアや不安スコアが高く、嫉惡MAN能行例では脳萎縮を認め た。いしめや発達障害は早期診断や介入で患者に与える影響を軽減できる可能性があり、親、教師、周囲の人々の理解が 重要である。
Nomura E, Ohta Y, Sato K, Kawahara Y, Takemoto M, Takahashi Y, Matsumoto N, Yunoki T, Yamashita T, Hishikawa N, Nishino I, Abe K	A Japanese patient with a VCP mutation c.290G/A(p.G97E) presenting a rapid progressive respiratory failure	NEUROLOGY AND CLINICAL NEUROSCIENCE	骨パジェット病および前頭側頭型痴呆をともなう封入体ミオバチー(IBMPFD)はVCP遺伝子の変異に起因する常染色体優勢遺伝の疾患である。IBMPFDは通常、進行性の四肢筋力低下を来たし、結果として平均9年の罹病期間で車椅子が必要となり、また。Pagetの沿骨性傷害や前頭側頭型痴呆はまれに呻吹不全を引き起こさせる。過去のレボートと異なり、今回、VCP遺伝子に290公人(IGS972 要養を認める日本人BMPFD)1 症例を報告し、彼はが症状のすが6年後に車椅子利用に伴って進行性の呼吸不全を来たした。本例は日本人でのVCP遺伝子変異による臨床的重症度と  C290公A(p,G97日変異との間の特異的な関係を示している。
Wesner N, Uruha A, Suzuki S, Mariampillai K, Granger B, Champtiaux N, Rigolet A, Schoindre Y, Lejeune S, Gullaume-Jugnot P, Vautier M, Hervier B, Simon A, Granier F, Gallay L, Nishino I, Benveniste O, Allenbach Y	Anti-RNP antibodies delineate a subgroup of myositis. A systematic retrospective study on 46 patients	AUTOIMMUNITY REVIEWS	※症性筋疾患は筋特異的疾患から全身性疾患まで様々な自己免疫性疾患のグループである。筋炎特異抗体 (MSAs) もしくは筋炎関連抗体 (MAAs) は筋炎における自己が体であるが、MSAsの存在が均一な患者集団を形成する助けになっているのに対し、MAAsはよく知られていないままである。 今回、抗引や下抗体陽性の筋炎とそれ以外とで、防症状、病理学的解析)や筋外症状を含めた臨床症状を解析した。 今回、抗引や下抗体陽性的炎のうち。37例(80%)が混合性統合組織病。3例(20%)がSLEと診断された。筋症状としては、9割以上が重度の近位筋慢位の筋力性下を示した。血質化値は平均2395U/Lと高値で、10例(22%)では 7000U/L以上であった。筋病理では破损用ま(35例、83%)、筋線維度上のCSD-9が監管(20例、5%)、筋線維細質でのMH-Cクラス1発見上身(36例、85%)を認めた。 抗乳や肝抗体性筋炎の臨床病理学的パターンとしては、Raynaud狀像や手指腫脹、関節炎、間質性肺炎などの筋外氷候を伴う重度の免疫介性性壊死性ミオパチー酸を呈し、既存の炎症性筋疾患とは異なるグループに見えるため、筋炎分類の自己抗体の重要性はMSAsに限らないと考えられた。
Takeuchi F, Nakamura H, Yonemoto N, Komaki H, Rosales RL, Kombers AJ, Bretag AH, Deithevanorn C, Goh KJ, Jong YJ, Kim DS, Khadilkar SV, Shen D, Wong KT, Chai J, Chan SH, Khan S, Ohnmar O, Nishino I, Takeda S, Nonaka I	Clinical practice with steroid therapy for Duchenne muscular dystrophy: An expert survey in Asia and Oceania	BRAIN AND DEVELOPMENT	商景・デュシャン又型新ジストロフィーの診療における研究は西洋においてはいくらか行われているが、アジア・オセア ニアにおける同様の研究は非常に少ない。我々はそれぞれの地域におけるDMD診療へのステロイト治療に関連した診療 状況を調査した。現在のDMD患者の健康情報や治療状況を評価するために2015年にアジア・オセアニアにおけるDMD の専門等への調査を行った。これらの関連は各は8年の ADOSearian Myology Centre、a neuromusucular disease research networkの協力を行く行われた。 総理:130回と地域から148人の健康医に調査を行い87人よりその回答を得た。中国では、5人の回答した神経り科医 らによって1385人のDMD患者カフォローされていた。その時就は84%が0~9歳の連者で15%は10~19歳、別り1% が19歳以上であった。一月日本では、20人の健康医によって1052人のDMDを指かフォローされており、年齢の内臓 は0~9歳の患者がフォローされていた。プレーンロンの内臓は75%であった。回答した91%の健康を定ちは、DMD の基本的な診療を誘動していた。プレトニンロンの内臓は初期治療として最も多く(N+45、64%)なされていた。歩 「不能後におけるプロイド治療や骨を保護する架への相反する優見も見られた。 は10分成であるア・オセアニアの今くの国でおりを継続所の必要がありまた。また。このような状況で、我々の結果は DMD患者への現在の治療や診療状況の断片を示している。どうなる後学的な研究のためにDMDレジストリーの拡大が 少要である。

著者、発表者等	論文名、演題名等	掲載誌、学会等	成果又は特記事項
Kawarai T, Yamazaki H, Yamakami K, Tsukamoto- Miyashiro A, Kodama M, Rumore R, Caltagirone C, Nishino I, Orlacchio A	A novel AIFM1 missense mutation in a Japanese patient with ataxic sensory neuronopathy and hearing impairment	JOURNAL OF THE NEUROLOGICAL SCIENCES	AFM1遺伝子(Apoptosis-Inducing Factor Mitochondria-associated-1 gene)は酸化的リン酸化のXPHOS)やアボト・シスパスウェイにおいて生物学的な役割を担っているミトコンドリアのフラビンアデニンシジスクレオチドドADが食存化のニナンアミト酸化造元酵素をコードしている。AIM1が 要別なのべからな体症状態、 、連鎖学化の中ではついているでは、連鎖性難聴DFNX5)。酸酸氏形成白質総成と資性骨脊端紫形成(H-SMD)を含む様々な不能疾患を来ず、多くの症例は西洋から観告されているが、アジア諸国においては少数例のみの報告である。今回 技不は、AIFM1に新規変異AIFM1 NM、OC4208.3: c.1357G3C(p.Glu453Gln)をへき接合性に認め、ataxic sensory neuropathyと誇覚障害を音併した日本人の1例を経験したので報告する。
Shimizu T, Kondo Y, Kanazawa N, Kaneko A, Tominaga N, Nagai M, Iizuka T, Nishino I, Nishiyama K	Anti-HMGCR myopathy following acute Epstein-Barr virus infection	MUSCLE AND NERVE	EBウイルス電車後にHMGCR抗体陽性の自己免疫性壊死性ミオバチーを発症した症例を報告する。 症例は40歳女性、EBウイルス感染症による発熱から2週間後より筋力低下が出現した。近位前極位の筋力低下、高CK 血症を認め、骨格筋固像では上腺三酸形、三頭筋にSTRで高高号域を認めた。筋生核で自己免疫性壊死性ミオバチーの 診断となり、抗体測定でHMGCR抗体が陽性であった。 ステロイドと免疫グロプリンによる加度で防力の固定と血症CK値の正常化が得られた。 本例は、抗-MGCR抗体関連自己免疫性壊死性ミオバチーのリスクファクターは有しておらず、EBウイルス感染が誘引 になったと考えられる。
Lin TY, Chen AD, Chang CH, Liang WC, Minami N, Nishino I, Lai CS	Severe Ocular Complications After Blepharoptosis Correction in the Oculopharyngeal Muscular Dystrophy Patient Literature Review and Case Presentation	ANNALS OF PLASTIC SURGERY	瞬鳴頭型筋ジストロフィーの眼線下垂の矯正手術では牙膜や眼球運動障害のために重集な合併作が生じることがある。 PubMedデータベースにおいて、ptoses surgery、ptoses correction、ptosis repair、oculopharyngeal muscular vostrodyvという用語での検索レイレビューしたところ、15の記事、222人の眼聴現野がシストロフィーの基本が基準 に送当した。そのうち7人の患者では重集な駅合併症が認められたが、治療には特に言及がなかった。自施設では2009 年9月から2017年5月のうちに、2人の眼咽頭型節ジストロフィー患者で眼瞼下垂塊正衝後の合併症を認めた。1人で は重度の急性角膜炎、結膜浮腫、角膜潰瘍に至ったが、一時的ほdrawstring tarsorrhaphyと局所点眼楽による治療を 行い回復した。
Palmio J. Jonson PH. Inoue M. Sarparanta J. Bengoechea R. Savarese M. Vihola A. Jokela M. Nakagarwa M. Noguchi S. Olive M. Masingue M. Kerty E. Hackman P, Weihl C, Nishino I. Udd B	Mutations in the J domain of DNAJB6 cause dominant distal myopathy	NEUROMUSCULA R DISORDERS	5 東系8人の適位前便位のミオバチー患者を対象に、臨床、神経生理学的検査、筋病理の検討を行った。DNAJB6のJドメインに2つの新規変異、c.149C>T (p.450M) とc.161A>C (p.E54A) を見出した。P.450Mは下腿背側優位に、p.E54Aは遺位・近位ともに関連されていた。 前端学的にはてれまてのDNAJB6のネパチーに類似していた。 DNAJB6のG/Fドメインの取録告と同様に、どちらの新規変異も、フィルタートラップ解析・TDP-43分解解析にあいて凝集に対する受容力が修下していた。 タンパクモデルでは変異残器はG/Fドメインに近接していた。 ミオバチーを引き起こす DNAJB6の変異はG/Fドメインだけでなく、Jドメインにも存在する。
Yamamoto-Shimojima K. Imaizumi T. Aoki Y. Inoue K. Kaname T. Okuno Y. Muramatsu H. Kato K. Yamamoto T.	Elucidation of the pathogenic mechanism and potential treatment strategy for a female patient with spastic paraplegia derived from a single-nucleotide deletion in PLP1.	J Hum Genet. 64 (7) ,665 - 671,04,2019	
Kouga T. Koizume S, Aoki S, Jimbo E, Yamagata T, Inoue K, Osaka H.	Drug screening for Pelizaeus-Merzbacher disease by quantifying the total levels and membrane localization of PLP1.	Mol Genet Metab Rep. 20,100474 - ,05,2019	
Fukada M. Yamada K. Eda S. Inoue K. Ohba C. Matsumoto N, Saitsu H. Nakayama A.	Identification of novel compound heterozygous mutations in ACO2 in a patient with progressive cerebral and cerebellar atrophy.	Mol Genet Genomic Med 7 (7) ,e00698 - ,05,2019	
Hijazi H. Coelho FS, Gonzaga-Jauregui C, Bernardini L, Mar SS, Manning MA, Hanson-Kahn A, Naidu S, Srivastava S, Lee JA, Jones JR, Friez MU, Alberico T, Torres B, Fans P, Cheung SW, Song X, Davis-Williams A, Jornin C, Wight PA, Patyal P, Taube J, Poretti A, Inoue K, Zhang F, Pehlivan D, Carvalho CMB, Hobson GM, Lupski JR.	Xq22 deletions and correlation with distinct neurological disease traits in females: further evidence for a contiguous gene syndrome.	Hum Mutat. 08.2019	
Miyamoto S, Nakashima M. Ohashi T, Hiraide T, Kurosawa K, Yamamoto T, Takanashi J, Osaka H, Inoue K, Miyazaki T, Wada Y, Okamoto N, Saitsu H.	A case of de novo splice site variant in SLC35A2 showing developmental delays, spastic paraplegia, and delayed myelination.	Mol Genet Genomic Med. 7 (8) ,e814 - .06,2019	
Hirasawa-Inoue A, Takeshita E, Shimizu-Motohashi Y, Ishiyama A, Saito T, Komaki H, Nakagawa E, Sugai K, Inoue K, Goto YI, Sasaki M	Static Leukoencephalopathy Associated with 17p13.3 Microdeletion Syndrome: A Case Report.	Neuropediatrics 50 (6) ,387 - 390,08,2019	
Takeshita E. Iida A. Abe-Hatano C, Nakagawa E, Sasaki M, Inoue K, Goto YI	Ten novel insertion/deletion variants in MECP2 identified in Japanese patients with Rett syndrome.	Hum Genome Var. 6 (48) ,10,2019	
Tabata K, lida A, Takeshita E, Nakagawa E, Sato N, Sasaki M, Inoue K, Goto Y.	A novel pathogenic NFIX variant in a Malan syndrome patient associated with hindbrain overcrowding.	J Neurol Sci.	
Aoki Y, Hanai S, Sukigara S, Saito T, Otsuki T, Nakagawa E, Kaico T, Kaneko Y, Takahashi A, Ikegaya N, Iwasaki M, Sugai K, Sasaki M, Goto Y, Oka A, Itoh M	Altered expression of astrocyte-related receptors/channels correlates with epileptogenesis in hippocampal sclerosis	Pediatr Dev Pathol 22 (6) ,532 - 539,06,2019	難治性でんかんを呈する海馬硬化症患者の外科的切除標本において、アストロサイト特異的受容体およびチャンネルの発現実常を分子病理学的に解明した。
Shintaro Ogawa, Miho Ota, Ikki Ishida, Zenta Yasukawa, Makoto Ozeki, Hiroshi Kunugi	Effects of L-theanine administration on stress-related symptoms and cognitive functions in healthy adults: A randomized controlled trial.	Nutrients 11 (10) ,2362 ,10,2019	健常者でテアニン投与がストレス症状と認知機能の改善作用を示すことをRCT二重盲検クロスオーバー試験で明らかにました。
Koga N. Ogura J. Yoshida F, Hattori K, Hori H, Aizawa E, Ishida I, Kunugi H.	Altered polyunsaturated fatty acid levels in relation to proinflammatory cytokines, fatty acid desaturase genotype, and diet in bipolar disorder.	Transl Psychiatry (208) ,08,2019	
Ogawa Shintaro, Kunugi Hiroshi.	Evidence for reduced homovanillic acid (HVA) in the cerebrospinal fluid of patients with depression.	Journal of Affective Disorders S0165-0327 (18) ,33267 - 33271,04,2019	Pech et al (2018) は、最近出版した論文においてうつ病患者におけるCSF中モノアミン系神経伝達物質の代謝物質の 変化についてのエピテンスは Poorである と論じていたものの、彼らが対象とした論文データについて我々が再解析を 行なったところ、うつ病患者でのCSF中ホモバニリン酸度下は非常に強い有意性を伴っており、エピデンスレベルは十 分に高いと考えられる。
Mizui Toshiyuki, Hattori Kotaro, Ishiwata Sayuri, Hidese Shinsuke, Yoshida Sumiko, Kunugi Hiroshi, Kojima Masami	Cerebrospinal fluid BDNF pro-peptide levels in major depressive disorder and schizophrenia.	Journal of psychiatric research 113,190 - 198,06,2019	男性の大うつ病患者のCSFにおいてBDNF pro-peptideが有意に減少した。
Hori H, Itoh M, Yoshida F, Lin M, Niwa M, Hakamata Y, Ino K, Imai R, Ogawa S, Matsui M, Kamo T, Kunugi H, Kim Y	The BDNF Val66Met polymorphism affects negative memory bias in civilian women with PTSD.	Sci Rep.10(1):3151. Feb 21, 2020	
Tsuchimine S. Matsuno H. O'Hashi K. Chiba S. Yoshimura A. Kunugi H.	Sohya K: Comparison of physiological and behavioral responses to chronic restraint stress between C57BL/6J and BALB/c mice.	Biochem Biophys Res Commun, Feb 15, 2020	
Ogawa S. Hattori K. Ota M. Hidese S. Miyakawa T. Matsumura R. Yokota Y. Ishida I. Matsuo J. Yoshida S. Yamazaki Y. Goodenowe D. Kunugi H:	Altered ethanolamine plasmalogen and phosphatidylethanolamine levels in blood plasma of patients with bipolar disorder.	Psychiatry Clin Neurosci. 74(3):204-210. Mar, 2020	
Imai R, Hori H, Itoh M, Lin M, Niwa M, Ino K, Ogawa S, Sekiguchi A, Kunugi H, Akechi T, Kamo T, Kim Y:	Relationships of blood proinflammatory markers with psychological resilience and quality of life in civilian women with posttraumatic stress disorder.	Sci Rep. 29:9(1):17905, Nov, 2019	
Hori H, Yoshida F, Itoh M, Lin M, Niwa M, Ino K, Imai R, Ogawa S, Matsui M, Kamo T, Kunugi H, Kim Y:	Proinflammatory status-stratified blood transcriptome profiling of civilian women with PTSD.	Psychoneuroendoc rinology. 111:104491, Jan, 2020	
Nakajima S. Fukasawa K. Gotoh M. Murakami-Murofushi K. Kunugi H:	Saturated fatty acid is a principal cause of anxiety-like behavior in diet-induced obese rats in relation to serum lysophosphatidyl choline level.	Int J Obes (Lond), 44(3):727-738. Mar, 2020	

著者、発表者等	論文名、演題名等	掲載誌、学会等	成果又は特記事項
Hiclese S. Ogawa S. Ota M. Ishida I, Yasukawa Z. Ozeki M. Kunugi H:	Effects of L-Theanine Administration on Stress-Related Symptoms and Cognitive Functions in Healthy Adults	A Randomized Controlled Trial, Nutrients.11(10): pii: E2362. Oct 3, 2019	
Ota M. Nemoto K, Ishida I, Sato S, Asada T, Arai T, Kunugi H:	Structural brain network correlated with the resilience to traumatic events in the healthy participants: An Mf1 study on healthy people in a stricken area of the Great East Japan Earthquake.	Psychol Trauma. 2019 Oct 17.	
Nakajima S. Gotoh M. Fukasawa K. Murakami-Murofushi K. Kunugi H:	Oleic acid is a potent inducer for lipid droplet accumulation through its esterification to glycerol by diacylglycerol acyltransferase in primary cortical astrocytes.	Brain Res, 1725:146484. Dec 15, 2019	
Kunugi H.	Mohammed Ali A: Royal Jelly and Its Components Promote Healthy Aging and Longevity: From Animal Models to Humans.	Int J Mol Sci, 20(19): pii: E4662. Sep 20, 2019	
Ali AM, Kunugi H.	Bee honey protects astrocytes against oxidative stress: A preliminary in vitro investigation.	Neuropsychophar macol Rep, 39(4):312-314. Dec, 2019	
Tsuchimine S, Hattori K, Ota M, Hidese S, Teraishi T, Sasayarna D, Hori H, Noda T, Yoshida S, Yoshida F, Kurnugi H,	Reduced plasma orexin-A levels in patients with bipolar disorder.	Neuropsychiatr Dis Treat. 6:15: 2221- 2230. Aug, 2019	
Koga N. Ogura J. Yoshida F, Hattori K, Hori H, Aizawa E. Ishida I. Kunugi H:	Altered polyunsaturated fatty acid levels in relation to proinflammatory cytokines, fatty acid desaturase genotype, and diet in bipolar disorder.	Transl Psychiatry, 9(1): 208. Aug 27, 2019	
Sasayama D. Hattori K. Kunugi H.	Trait Loci Mapping and CSF Proteome.	Methods Mol Biol. 2044:365-376, 2019:	
Sasayama D, Asano S, Nogawa S, Takahashi S, Saito K, Kunugi H.	Possible association between photic sneeze syndrome and migraine and psychological distress.	Neuropsychophar macol Rep. 39(3): 217-222. Sep. 2019	
Gotoh L. Yamada M. Hattori K. Sasayama D. Noda T. Yoshida S. Kunugi H. Yamada M.	Lysophosphatidic acid levels in cerebrospinal fluid and plasma samples in patients with major depressive disorder.	Heliyon, 5(5): e01699. May 16, 2019	
O'Hashi K. Sohya K. Matsuno H. Tsuchimine S. Kunugi H.	Construction of the common cortical space by spontaneous activity and its application in the mouse cortex.	Biochem Biophys Res Commun. 513(4): 869-874. Jun 11, 2019	
Ota M. Noda T. Sato N. Hidese S. Teraishi T. Setoyama S. Matsuda H. Kunugi H.	The use of diffusional kurtosis imaging and neurite orientation dispersion and density imaging of the brain in bipolar disorder.	J Affect Disord. 251: 231-234. May 15, 2019	
Ota M. Sato N. Yoshida F, Hattori K, Hidese S, Teraishi T, Kunugi H.	A polymorphism of the methylenetetrahydrofolate reductase gene confers susceptibility to schizophrenia and related brain changes.	Schizophr Res. 208: 462-464, Jun, 2019	
Itagaki K. Takebayashi M. Abe H. Shibasaki C. Kajitani N. Okada-Tsuchioka M. Hattori K. Yoshida S. Kunugi H. Yamawaki S.	Reduced Serum and Cerebrospinal Fluid Levels of Autotaxin in Major Depressive Disorder.	Int J Neuropsychophar macol, 22(4): 261- 269. Apr 1 ,2019	
Wakabayashi C, Kunugi H.	Involvement of IL-6 and GSK3 $\beta$ in impaired sensorimotor gating induced by high-fat diet.	Neurosci Res. 147: 33-38, 2019, Oct	
Ikeda M. Takahashi A. Kamatani Y. Momozawa Y. Saito T. Kondo K. Shimasaki A. Kawase K. Sakusabe T. Iwawama Y. Toyota T. Wakuda T. Kikuchi M. Kanahara N. Yamamori H. Yasuda Y. Watanabe Y. Hoya S. Aleksic B. Kushima I. Arai H. Takaki M. Hattori K. Kunugi H. Okahisa Y. Ohruma T. Ozaki N. Someya T. Hashimoto R. Yoshikawa T. Kubo M. Iwata N.	Genome-Wide Association Study Detected Novel Susceptibility Genes for Schizophrenia and Shared Trans- Populations/Diseases Genetic Effect.	Schizophr Bull, 45(4): 824-834, 2019, Jun 18	
Hirayama K. Fujiwara Y, Terada T, Shimizu K. Wada K, Kabuta T	Virtual screening identification of novel chemical inhibitors for aberrant interactions between pathogenic mutant SOD1 and tubulin	Neurochem Int. 126.19 - 26.06.2019	節萎縮性側素硬化症(ALS)は、選択的運動ニューロン所によって引き起こされる政命的な神経変性疾患である。銅/ 理能又エペーオーアドジスムターゼ(SOO)が をコードする運伝子における交換変異は、ALSの病因に鳴するるもの の主要を変わったターのうちのかった国する。SOO(異算体に青年機能整件、機能等しているなどを のよった。というでは、ALSの研究を持ちにする。ないでは、ALSの新規治療法をリンパク等・タンパク等は自体的に関する でいるこの本性機能管に関与している。したがって、変更整ら2001のPPI制度制制は、ALSの病因の理解をあるだけでなく、ALSの新規治療法としても使用することができる。PPI制度制を関すすることは困難であるが、総合部位に関する 事態の知識により取加確率を最めることができる。PPI制度制を関すすることは困難であるが、総合部位に関する 事態の知識により取加確率を最めることができる。PPI制度制を関すすることは困難であるが、総合部位に関する 事態の知識により取加確率を最めることができる。PPI制度制を関することは困難であるが、総合部位に関する まましたり取削を表しなのは、ALSの対象性が表して用して32.791代と物のドッキングラミューションと名は「MICCOのスクリーニングを行った。変異型SOO1でPI制度を制度を制度を制度して用して32.791代と物のドッキングラとして使用した。その結果、ドッキングシミュレーション中の上位ラングの化合物のなかて、6つのアッセイラで制度に終めているのであるが、GRSの SOO1ので、6つのアッセイラで制度に終めているのである。 が、GRSの SOO1の「TIC つる交換基の方置達をよった電子相互作用によって6を85 SOO1ので、6つのアッセイラで制度に終めてある。 物、GRSの SOO1の「TIC つる交換基の方置達をよった電子相互作用によって6を85 SOO1ので、6つのアッセイラで制度に終めて 物、GRSの SOO1の「TIC つる交換基の方置達をよった率を引度した。 が、GRSの SOO1のでは、我々のスクリーニング方法は、ALS治療のためのリード化合物の間定に貢献するかもしれない。
Takahashi Yuji, Uchino Akiko, Shioya Ayako, Sano Terunori, Matsumoto Chihiro, Numata-Uematsu Yurika, Nagano Seiichi, Araki Toshiyuki, Murayama Shigeo, Saito Yuko	Altered immunoreactivity of ErbB4, a causative gene product for ALS19, in the spinal cord of patients with sporadic ALS.	Neuropathology: official journal of the Japanese Society of Neuropathology 39 (4) ,268 - 278,08,2019	家族性の紡萎縮性側素硬化症(ALSIの原因遺伝子の一つ(ALS19)として同定されているErbB4の、孤発性ALSの病態における意義を検討する目的で、孤発性ALS患者脊髄の病理機関検体におけるErbB4の発現様式を検討した。孤発性ALS患者脊髄の運動神経細胞において、ErbB4発出の発現を要夫または低下させているものが見られ、ErbB4発現の無い症例のほうがより重症例である傾向が見られた。また、機制の 局在の変化、オリゴデントワサイトへの質しいに傾のほうがより重性例で、アリボーン・ログトロサイトへの質能運動神経細胞では ErbB4発現の変化を認めなかった。
Nagashima S, Takeda K, Shiiba I, Higashi M, Fukuda T, Tokuyama T, Matsushima N, Nagano S, Araki T, Kaneko M, Shioi G, Inatome R, Yanagi S.	Critical role of CRAG, a splicing variant of centaurin- 73/AGAP3, in ELK1 - dependent SRF activation at PML bodies.	Scientific Reports	CRMP-5-associated GTPase (CRAG)は、特に発達過程の脳内の神経細胞において、serum response factor ISRF)のco-activatorであるELK1との相互作用を介してSRFを活性化することにより、神経活動に伴うc-fosなどの遺伝子の転写を惹起していることを、CRAGノックアウトマウスを用いて示した。
Bertoldo MJ, Listijono DR, Ho WJ, Riepsamen AH, Goss DM, Richani D, Jin XL, Mahbub S, Campbell JM, Habibalahi A, Loh WN, Youngson NA, Maniam J, Wong ASA, Selesnemi K, Bustamante S, Li C, Zhao Y, Marinova MB, Kim LJ, Lau L, Wu RM, Mikolaizak AS, Araki T, Le Couteur DG, Turner N, Morris MJ, Walters KA, Goldys E, O'Neill C, Gilchrist RB, Sinclair DA, Homer HA, Wu LE.	NAD+ repletion rescues female fertility during reproductive aging.	Cell Reports	哺乳類の生殖各化は、卵母細胞の質の低下に関連する不可逆的なプロセスであるが、本論文では、卵母細胞の質の低下が、ニコチンアミドアデニンジヌクレオチド(NAD・)のレベルの低下を伴うことを示した。 NADの前離体であるニコチンアミドモノスクレオチド(NMN)で処理すると、老化した動物の卵母細胞の質が若返り、生殖能力が回復した。NMN補充の効果は、発達中の胚にも及び、母体の加齢による効果を軽減させることがあきらかとなった。

著者、発表者等	論文名、演題名等	掲載誌、学会等	成果又は特記事項
Huang K, Masuda A, Chen G, Bushra S, Kamon M, Araki T, Kinoshita M, Ohkawara B, Ito M, Ohno K.	Inhibition of cyclooxygenase-1 by nonsteroidal anti-inflammatory drugs demethylates MeR2 enhancer and promotes Mbnl1 transcription in myogenic cells.	Scientific Reports	筋強菌性ジストロフィー1型(DM1)の発症機序においてDMPK遺伝子3、非親抗領域にあるCUGリピートへのPNA結合蛋白Muscleblind-like 1 (MBNL-1) の結合が重要と考えられている。この論文では、非ステロイド性抗炎症薬がcyclocoygenase1 の活性を抑制することにより、MBNL-1の発現規節領域にあるメチル化を抑制することにより、MBNL-1の発現を高めてDM1の症状改善に寄与する可能性を示した。
Kondo S, Takahashi K, Kinoshita Y, Nagai J. Wakatsuki S, Araki T, Goshima Y, Ohshima T	Genetic inhibition of CRMP2 phosphorylation at serine 522 promotes axonal regeneration after optic nerve injury.	Scientific Reports 9,05,2019	微小管関連タンパクであるCPMP2のリン酸化部位の一つである第522番目のセリン残基をアラニンに置換したノック インマウスを用い、複神経障害モデルにおける傷害後軸末変性の進行を検討したところ、野生型マウスに比べて変性が軽 度であり、また軸末再生の促進が認められた。5522はCDM5によるリン酸化部位であり、軸索のシナフス側のセマフォ リン3などに由来する細胞内シグナルに関与しているものと考えられていることから、このようなシグナルが、軸索の傷 害後変性の進行、ならびに、中枢神経の再生組書に着与している可能性が示唆された。
Kinoshita Y, Kondo S, Takahashi K, Nagai J, Wakatsuki S, Araki T, Goshima Y, Ohshima T.	Genetic inhibition of CRMP2 phosphorylation delays Wallerian degeneration after optic nerve injury.	Biochemical and Biophysical Research Communications 514 (4) ,1037 - 1039,06,2019	横川管関連タンパクであるCFMP2のリン酸化部位の一つである第522番目のセリン残基をアラニンに置換したノックインマウスを用い、携神経障害モデルにおける触索変性の進行を、対策である野生型マウスにおける変化と比較検討した 起撃、CFMP2S522Aノックインマウスにおいて携神経のワーラー変性の遅延を認めることを、結構学的、生化学的手法により示した。
Tsubota M. Fukuda R. Hayashi Y. Miyazaki T. Ueda S. Yamashita R. Kolke N. Sekiguchi F. Wake H. Wakatsuki S. Ulile Y, Araki T. Nishibori M. Kawabata A.	Role of non-macrophage cell-derived HMGB1 in oxaliplatin-induced peripheral neuropathy and its prevention by the thrombin/thrombomodulin system in rodents negative impact of anticoagulants.	Journal of Neuroinflammation 16 (199) ,10,2019	oxaliplatinにより着起される化学療法誘導性末梢神経炎(CIPNJの発症過程においては、マクロファーシ以外の細胞が産生するhigh mobility group box 1 I-IMGB1)が重要な役割を果たしていること、thrombomodulin (TMIは、I-IMGB1の分解を誘導することによりI-IMGB1によるCIPNI誘導作用に括抗することを示した。
Yoshizawa H, Miyamoto JJ, Hanakawa T, Shitara H, Honda M, Moriyama K	Reciprocal cortical activation patterns during incisal and molar biting correlated with bite force levels: an fMRI study.	Scientific Report 9 (1) ,8419 - 8419,06,2019	
Fukazawa Y, Ito T, Okimura T, Yamashita Y, Maeda T, Ota J	Predicting anxiety state using smartphone-based passive sensing	Journal of Biomedical Informatics 93, 103151.	
Doi H., Sulpizio S. Esposito G. Katou M. Nishina E. Iriguchi M. Honda M. Oohashi T. Bornstein M. H. Shinohara K	Inaudible components of the human infant cry influence haemodynamic responses in the breast region of mothers	J Physiol Sci 69, 1085-1096	
Ito M. Miyamae M. Yokoyama C. Yamashita Y. Ueno C. Maruo K. Komazawa A, Niwa M, Honda M, Horikoshi M.	Augmentation of Positive Valence System/Focused Copritive Behavioral Therapy by haudble High-Frequency Sounds for Arherdoria Study A Trial Protocol for a Plate Valence System/Focused Copritive Behavioral Therapy by haudble High-Frequency Sounds for Arherdoria A Trial Protocol for a Plate Valence System/Focused Copritive Behavioral Therapy by haudble High-Frequency Sounds for Arherdoria Study A Trial Protocol for a Plate Valence System/Focused Copritive Behavioral Therapy by haudble High-Frequency Sounds for Arherdoria Study Augmentation of Positive Valence System/Focused Copritive Behavioral Therapy by haudble High-Frequency Sounds for Arherdoria Study Augmentation of Positive Valence System/Focused Copritive Behavioral Therapy by Insudible High-Frequency Sounds for Arherdoria Study Augmentation of Positive Valence System/Focused Copritive Behavioral Therapy by haudble High-Frequency Sounds for Arherdoria Study Augmentation of Positive Valence System/Focused Copritive Behavioral Therapy by haudble High-Frequency Sounds for Arherdoria Study Augmentation of Positive Valence System/Focused Copritive Behavioral Therapy by haudble High-Frequency Sounds for Arherdoria Study Augmentation of Positive Valence System/Focused Copritive Behavioral Therapy by haudble High-Frequency Augmentation of Positive Valence System/Focused Copritive Behavioral Therapy by haudble High-Frequency Augmentation of Positive Valence System/Focused Copritive Behavioral Therapy by haudble High-Frequency Augmentation of Positive Valence System/Focused Copritive Behavioral Therapy by haudble High-Frequency Augmentation of Positive Valence System/Focused Copritive Behavioral Therapy by haudble High-Frequency Augmentation of Positive Valence System/Focused Copritive Behavioral Therapy by haudble High-Frequency Augmentation of Positive Valence System/Focused Copritive Behavioral Therapy by haudble High-Frequency Augmentation of Positive Valence System/Focused Copritive Behavioral Therapy by haudble High-Frequency Augmentation of Positive Valence Sy	JAMANETWORK OPEN 2 (11) ,e1915819 e1915819,11,201 9	起高周波音響呈示によるアンヘドニア症状に対する認知行動療法の増強効果を検証するランダム化比較試験のプロトコル 請文である
Kurashige H, Kaneko J, Yamashita Y, Osu R, Otaka Y, Hanakawa T, Honda M and Kawabata H	Revealing Relationships Among Cognitive Functions Using Functional Connectivity and a Large-Scale Meta-Analysis Database	Front. Hum. Neurosci 13,457 - 457,01,2020	大規模fMRIデータベースとネットワーク理論を用い、様々な認知機能の間の関係性を明らかにした
Pajtler KW, Wei Y, Okonechnikov K, Silva PBG, Vouri M, Zhang L, Brabetz S, Sieber L, Gulley M, Mauermann M, Wedig T, Mack N, Imamura Kawasawa Y, Sharma T, Zuckermann M, Ardreiuloo F, Polland E, Masas K, K?rkel-Qu H, Liu HK, Sahm F, Capper D, Bunt J, Richards LJ, Jones DTW, Korshunov A, Chavez L, Lichter P, Hoshino M, Pfister SM, Kool M, Li W, Kawauchi D	YAP1 subgroup supratentorial ependymoma requires TEAD and nuclear factor I-mediated transcriptional programmes for tumorigenesis.	Nature Communications 10 (1) ,3914 - ,09,2019	本研究は、小児悪性脳腫瘍の一つであるヒトテント上上衣腫で特異的に発現するがん融合遺伝子YAP1-MAMLD1が、転写因子TEADおよびNFIA/Bを介し腫瘍形成を誘導することを新規上衣腫マウスモデルを用いて初めて明らかにしたものである。
Shiraishi RD. Miyashita S. Yamashita M. Adachi T, Shimoda MM. Owa T, Hoshino M.	Expression of transcription factors and signaling molecules in the cerebellar granule cell development.	Gene Expr Patterns	
Takizawa H. Hara Y. Mizobe Y. Ohno T. Suzuki S. Inoue K. Takeshita E. Shimizu-Motohashi Y. Ishiyama A. Hoshino M. Komaki H. Takeda S. Aoki Y.	Publisher Correction: Modelling Duchenne muscular dystrophy in MYOD1-converted urine-derived cells treated with 3- deazaneplanocin A hydrochloride.	Scientific Reports	
Takeuchi E. Yamada D. Suzuki S. Saitoh A. Itoh M. Hayashi T. Yamada M. Wada K. Sekiguchi M	Participation of the nucleus accumbens dopaminergic system in antidepressant-like actions of a diet rich in omega-3 polyunsaturated fatty acids.	PLoS One, 2020 Mar 25; 15(3): e0230647.	
Mimura K. Oga T. Sasaki T. Nakagaki K. Sato C. Sumida K. Hoshino K. Saito K. Miyawaki I. Suhara T. Aoki 8, Minamimoto T. Ichinohe N	Abnormal axon guidance signals and reduced interhemispheric connection via anterior commissure in neonates of marmoset ASD model.	Neuroimage. 195,243 - 251,04,2019	
Tomomi Sanagi, Tetsuya Sasaki, Kelko Nakagaki,Takafumi Minamimoto, Shinichi Kohsaka, Noritaka Ichinohe	Segmented Iba1-Positive Processes of Microglia in Autism Model Marmosets.	Front Cell Neurosci, 13,344 - ,07,2019	
Li H, Okada H, Suzuki S, Sakai K, Izumi H, Matsushima Y, Ichinohe N, Goto YI, Okada T, Inoue K	Gene suppressing therapy for Pelizaeus- Merzbacher disease using artificial microRNA.	JCI Insight, 4 (10) ,e125052 - ,05,2019	
Kawai N, Nakagami A, Yasue M, Koda H, Ichinohe N	Common marmosets (Callithrix jacchus) evaluate third-party social interactions of human actors but Japanese monkeys (Macaca fuscata) do not.	J Comp Psychol. 04,2019	
Fukuda H. Ma N. Suzuki S, Harasawa N. Ueno K, Gardner JL, Idhinohe N, Haruno M, Cheng K, Nakahara H	Computing Social Value Conversion in the Human Brain.	J Neurosci, 39 (26) ,5153 - 5172,06,2019	
Noguchi J. Nagaoka A, Hayama T, Ucar H, Yagishita S, Takahashi N, Kasai H	Bidirectional in vivo structural dendritic spine plasticity revealed by two-photon glutamate uncaging in the mouse neocortex.	Scientific Reports 9 (1) ,13922 - ,09,2019	
Hamaguchi M. Muramatsu R. Fujimura H. Mochizuki H. Kataoka H. Yamashita T. Circulating transforming growth factor-beta1 facilitates remyelination in the adult central nervous system.	Circulating transforming growth factor- beta1 facilitates remyelination in the adult central nervous system	eLife. 8:e41869.	血液に神経再生を促す分子が含まれることを発見した。

著者、発表者等	論文名、演題名等	掲載誌、学会等	成果又は特記事項
Yamamiya M. Tanabe S. Muramatsu R.	Microglia promote the proliferation of neural precursor cells by secreting osteopontin.	Biochemical and Biophysical Research Communications, 513(4):841-845.	ミクログリアが神経幹細胞の増殖を促進させる機序にオステオボンチンが寄与することを見出した。
Ozaki T, Muramatsu R, Nakamura H, Kinoshita M, Kishima H, Yamashita T.	Proteomic analysis of protein changes in plasma by balloon test occlusion	J. Clin. Neurosci., 72:397-401 , 2020	
Zhang C, Raveney BJE, Hohjoh H, Tomi C, Oki S, Yamamura T.	Extrapituitary prolactin promotes generation of Eomes-positive helper T cells mediating neuroinflammation.	Proc Natl Acad Sci U S A. 116 (42) ,21131 - 21139,10,2019	Eomes陽性ヘルパーT細胞が関与する神経免疫に関する論文
Boldbaatar Jambaldorj, Gunarta I Ketut, Suzuki Ryusuke, Erdenebaatar Purev, Davaakhuu Gantulga, Hohjoh Hirohiko, Yoshioka Katsuji	Protective role of c-Jun NH2-terminal kinase-associated leucine zipper protein (JLP) in curcumin-induced cancer cell death.	Biochemical and biophysical research communications 522 (3) ,697 - 703,02,2020	JLPがオートファジーの誘導を仲介し、クルクミン誘導ROSを介した癌細胞死における全体的な保護的役割を示唆した論文。
Kubota S. Sidikejiang W. Kudo M. Inoue K. Umeda T. Takada M. Seki K	Optogenetic recruitment of spinal reflex pathways from large-diameter primary afferents in non-transgenic rats transduced with AAV9/Channelrhodopsin 2.	Journal of Physiology 08,2019	光遺伝学を用いて、触覚や筋感覚に関わる感覚神経の活動を選択的に活性化させることに成功した。本研究の成果を将来 的に遺伝子治療に応用することにより、脊髄損傷や脳損傷に伴う機能障害の病態の理解並びに感覚障害に対する新たな治療法への展開が期待される。
Umeda T, Koizumi M, Katakai Y, Saito R, Seki K	Decoding of muscle activity from the sensorimotor cortex in freely behaving monkeys	Neurolmage197, 512-526 ,08,2019	製情報デコーディング技術 (脳活動を運動の意図や妨活動をあらわすー種の暗号とみなして、これを解読する技術)を用いて自由に行動しているサルの脳活動から筋活動情報を解読することに成功した。
Umeda T, Isa T, Nishimura Y	The somatosensory cortex receives information about motor output	Science Advances 5 (7) ,eaaw5388 - ,07,2019	従来大脳皮質にある一次体性感覚野は末梢の感覚受容器からの感覚入力を単に受けとっているだけであると考えられていましたが、実は自分で動く前から"これからはじまる動き"に関する事前情報も受けていることを明らかにしました。
Kizuki M., Fujiwara T, and Shinozaki T.	Adverse childhood experiences and bullying behaviors at work among workers in Japan	Occupational and Environmental Medicine 77 (1) ,9 - 14,11,2019	
Genereux M, Schluter PJ, Takahashi S, Usami S, Mashino S, Kayano R, Kim Y	Psychosocial Management Before, During, and After Emergencies and Disasters-Results from the Kobe Expert Meeting.	Int J Environ Res Public Health 16 (8) ,1309 - ,04,2019	災害は大きな精神保健上の負担をもたらすが、個人、地域の精神健康を災害中、災害後に向上させる方法のエビデンスは 乏しい、2018年10月に神戸で開催されたWHの会議ではアジア太平学地域での封議を通じて、観察研究全の大事が出るが支援が明らかとなり、住民の精神保健医療へのニースを組また地域のレルで測定する系統的、計量心理学り私研究との必要性が指摘された。併せて、被災者の精神医療的問題の予防、スクリーニング、治療を体系化することの必要性も指摘された。
Seto M. Nemoto H. Kobayashi N. Kikuchi S. Honda N. Kim Y. Kelman I. Tomita H	Post-disaster mental health and psychosocial support in the areas affected by the Great East Japan Earthquake: a qualitative study	BMC Psychiatry 19 (1) ,261 - ,08,2019	311 震災後中長期にわたって提供されてきた心理社会支援の実態を被災県支援機関を対象として調査し、それらが1) 優別支援、2)集団支援、3)生活と経済支援、4)社会教育、5)災害対応人材育成、6)支援者支援、7)地域社会心 理支援の連携制整に分類されることを見出した。いずれの活動についても人材と資金不足が指慮された。今後、こうした 支援の経験と知識を集構して共有し、また中長期支援を組織する機関の設立が必要である。
Okubo R. Matsuoka YJ, Sawada N, Mimura M, Kurotani K, Nozaki S, Shikimoto R, Tsugane S	Diet quality and depression risk in a Japanese population	the Japan Public Health Center (JPHC)-based Prospective Study. Scientific Reports 9 7150 - ,05,2019	長野県佐久地域の1.112人に対して主食、削菜、主菜、牛乳・乳製品、果物、総エネルギー、菓子・嗜好飲料由来のエネルギー、、白肉の赤肉に対する比の名類域の食事パランスガイド遵守商点を開出し調査から20年後の謄神料医によるうつ病診断との関連を調べました。遵守商点全体とうつ病の関連は認められませんでしたが、上記の名領域のうち、白肉(魚・鳥肉)を赤肉(鮗・牛肉)よりも多く食べているグループは、うつ時のリスクが約半分に下が切ました。
Okubo R, Wada S, Shimizu Y, Tsuji K, Hanai A, Imai K, Uchitomi Y, Fujiwara Y, Tsugane S, Matsuoka YJ:	Expectations and recommendations for cancer survivorship guideline in Japan	a literature review of guidelines for cancer survivorship. Japanese Journal of Clinical Oncology 1 - 11,05,2019	国内外のサバイバーシップに関するガイドラインについて系統的なレビューを行い、国内と国外の整備状況の違いを定性的に比較した初めての研究です。国外と比べて、が4、専門医とかかりつけ医の連携や、食・運動などの健康増進に関する領域について、日本ではガイドラインの整備が不十分でした。
Noguchi H. Okubo R. Hamazaki K, Yamashita A, Narisawa T, Matsuoka YJ	Serum polyunsaturated fatty acids and risk of psychiatric disorder at 6 months after acute coronary syndrome. A prospective cohort study.	149,18 - 23,07,2019	急性短症候群直後の血中不飽和脂肪酸が、6か月後の精神疾患罹患を予測するかを検討した論文です。同一の研究から、 急性短症候群直後の血中リノール酸濃度が高いほど、3か月後の精神疾患の罹患が増えることは示されておりましたが、 より長期の関連については研究がなされていませんでした。本研究によって、6か月後の精神疾患罹患についても、血中 リノール酸濃度が高いほど罹患が増えることが示されました
Tsuji K., Ochi E. Okubo R. Schimizu Y, Kuchiba A. Ueno T, Shimazu T, Kinoshita T, Sakurai N, Matsuoka YJ	Effect of home-based high-intensity interval training and behavioural modification using information and communication technology on cardiorespiratory fitness and exercise habits among sedentary breast cancer survivors' habit-B study protocol for a random.	BMJ Open 9 (8) ,09,2019	本論文は、身体活動が低い乳がんサバイバーに対して、habit-Bという新たな運動プログラムが、最大酸素摂取量を増やすかどうかを検討する無作為化比較試験のプロトコル論文である。habit-Bは、情報通信技術を利活用した、自宅で高強度間欠的トレーニングを行い、運動習慣を身に着けてもらうための運動プログラムである
Horigome A, Okubo R, Hamazaki K, Kinoshita T, Katsumata N, Uezono Y, Xiao JZ, Matsuoka YJ	Association between blood omega-3 polyunsaturated fatty acids and the gut microbiota among breast cancer survivors.	Beneficial Microbes 1 - 8,09,2019	本研究は世界で初めて脳内綿菌組成と血中不飽和脂肪酸組成の関連について検討した研究である。交絡因子を調整した多 変量繋折の結果、脳内のピフィズス菌占有率が高い程、ドコサヘキサエン酸の血中濃度が高かった。他のオメガ3系・6 系脂肪酸との関連は認められなかった。
Yutaka J. Matsuoka, Ryo Okubo, Yoichi Shimizu, Katsunori Tsuji, Tomomi Narisawa, Jiichiro Sasaki, Hiroyuki Sasai, Sadako Akashi-Tanaka, Tetsuya Hamaguchi, Takeshi Iwasa, Satoshi Iwata, Tomoyasu Kato, Kayo Kurotani, Dai Maruyama, Ayako Mori, Asaco Ogawa, Naomi Sakurai, Taichi Shimazu, Chikako Shimiza Takathiro Jabuchi, Myako Takathaka, Toshimi Takano, Noriatsu Tatematsu, Yosuke Uchitomi, Chie Watanabe, Tsuguya Fukui.	Developing the structure of Japan's cancer survivorship guidelines using an expert panel and modified Delphi method.	J Cancer Survivorship 12.2019	日本初のがんサバイパーシップガイドライン提言の意思決定プロセスを論文化したものです。Minds診療ガイドライン作成マニュアルを参照しながら、ガイドライン解格委員会を組織し、事務問学案を基に修正アルファイ法によって意思決定を行いました。論文ではガイドライン全体のスコープや内容に関する合意形成の過程について報告しました。
Wong MM. Castle D. Organ B. Li J. Ma L. Chui E. Ho K. Hung SF. Lo TL. Szeto WL, Yeung	Present and future of severe mental illness (SMI) policies: Reflections from an Asia-Pacific	Psychiatry Clin Neurosci	立年のメタ分析では、総合失調症における抗精神病薬単剤療法 (APM) よりも抗精神病薬多剤療法 (APP) の方が優れていると報告されているが、副作用の観点からAPMに切り替えると有益な場合がある。 APPを受けている患者がAPM に切り替えるか、APPに留まるべきかを判断するため、系統的レビューとメタ分析を実施した。 ランダム化比較試験 (RCT) は、APPとAPVるため、系統的レビューとメタ分析を実施した。また、体系的な文献検索・映画を行い、研究の中止、再発、精神病理学、神経認知、維体外路症状、および体重(体格指数に関するデータを抽出を実施)がら単剤への切り替えを検討したRCTのメタガ析を行った。APPの総様におび製とされたすべての研究を解析対象とした場合、研究中止を発表した。研究中止を発表した。 MP中による・研究中止を解析するとした。 MP中による・研究中に大きないのでは、第4年のアループでは、東京は大きないのでは、東京は大きないでは、東京は東京ないのでは、東京は大きないのでは、東京は大きないのでは、東京は大きないのでは、東京は大きないのでは、東京は大きないのでは、東京は大きないのでは、東京は大きないのでは、東京は大きないでは、東京ないでは、東京ないでは、東京ないのでは、東京ないでは、東京ないでは、東京ないでは、東京ないは、東京ないでは、東京なりでは、東京ないでは、東京ないでは、東京ないでは、東京ないでは、東京ないでは、東京なりでは、東京なりでは、東京ないでは、東京なりでは、東京なりでは、東京なりでは、東京なりでは、東京なりでは、東京なりでは、東京なりでは、東京なりでは、東京なりでは、東京なりでは、東京なりでは、東京なりでは、東京なりでは、東京なりでは、東京なりでは、東京なりでは、東京なりでは、東京なりでは、東京なりではなりでは、東京なりでは、東京なりではなりで
Matsui K, Tokumasu T, Takekita Y, Inada K, Kanazawa T, Kishimoto T, Takasu S, Tani H,	Switching to antipsychotic monotherapy vs. staying on antipsychotic polypharmacy in schizophrenia: A systematic review and meta-analysis	Schizophr Res	地域密音型のケアや集中的な症例管理モデルは重陶な精神疾患の回復を促進する、と多くの専門家が提唱している。 2016年12月と2017年11月、香港心理社会リハビリテーション協会によってアジア太平洋専門家エキスパートフォーラムが行われ、重麻な精神疾患患者の管理に関する主要な課題の確認・最適な治療に関する結構が行われた。地域密音型のケアの開始に際し、以下の解決策が挙かった: 1)スティグマ軽減のための教育、2) 徳治施設やリハビリセンターの設置、3) ケースマネーシャーとしての専門家の採用、4) ビアサボートの活用、5) 医療政策の変更に伴う患者と介護者のエンパワーメント、6) 家族の協力、7) 非政府組織の活用、施設から地域へ、というパラダイムシフトが進行しているため、政策デザイン、立法、資源配分、サービスの構造化、資金設達を含む政府の戦略無効が地域密着型のケアを成功に導く鍵となる。また、地域移行の重要性に関する認識を医療従事者内で高めていく必要もある。
Daisuke Funada, Toshihiko Matsumoto, Yuko Tanibuchi, Yasunari Kawasoe, Satoru akibara, Nobuya Naruse, Shunichiro Ikeda, Takashi Sunami, Takeo Muto, Tetsuji Cho	Changes of clinical symptoms in patients with new psychoactive substance (NPS)-related disorders from fiscal year 2012 to 2014. A study in hospitals specializing in the treatment of addiction	Neuropsychophar macology Reports 1 - 11,04,2019	
Ayumi Takano,Sachiko Ono,Hayato Yamana,Hiroki Matsui,Toshihiko Matsumoto,Hideo Yasunaga,Norito Kawakami	Factors associated with long- termprescription of benzodiazepine: a retrospective cohort study using a health insurance database in Japan	BMJ Open 1 - 6,07,2019	2012年1月~2015年4月までの18~65歳の外来患者86909名の診療報酬レセブトを用いた、後方視的コホート研究によって、ベンソジアゼビン受容体作動薬の長期処方に影響する要因を解析した。その結果、対象患者の9分が、8ヶ月を超える長期間、ベンソジアゼビン受容体作動薬の処方をされていた。そして、長期処方を予測する要因として、うつ病性障害や神経症性障害という定精神障害の存在、が小への罹患、精神程度による処方、睡眠導入剤の処方、ならびに、初回処方時に中時間作用型ベンソジアゼビン受容体作動薬を処方することが同定された。
Hori H. Yoshida F. Itoh M. Lin M. Niwa M. Ino K. Imai R. Ogawa S. Matsui M. Kamo T. Kunugi H. Kim Y.	Proinflammatory status-stratified blood transcriptome profiling of civilian women with PTSD	Psychoneuroendoc rinology 111,104491 - .01,2020	32名のPTSD女性患者および16名の健常対照女性を対象に、末梢面から抽出したRNAを用いたマイクロアレイによる 網顧的遺伝子発現解析を行った。PTSD患者には、免疫炎症系の分子群が有意に発現変動を示す一群と、神経系の分子群 が有意に発現変動を示す一群が存在することが示され、本疾患の病態を反映した亜型が現出された。

+++	50±0 van 0 va	10 ±0 ±1	<b>△</b> CD ₹9 (
著者、発表者等	論文名、演題名等	掲載誌、学会等	成果又は特記事項
Kawanishi H. Sekiguchi A. Funaba M. Fujii Y. Yoshiuchi K. Kikuchi H. Kawai K. Maruo K. Sugawara N. Hatano K. Shoji T. Yamazaki T. Toda K. Murakami M. Shoji M. Ohara C. Tomita Y. Fukudo S. Ando T	Cognitive behavioral therapy with intercosptive exposure and complementary video materials for irritable bowel syndrome (IBS): protocol for a multicenter randomized controlled trial in Japan	BioPsychoSocial Medicine 13 (14) ,06,2019	葉粉に傷が切きにくい過敏性眼症操程(ISS) 患者に対する認知に予節療法(CBT)の効果検証のための、国内の危能が 参加する各能放射同ラッタルは比較試験に関するフロトコル路文である、NOE中日本現代部病学会のバトラインで は、薬物療法に反応しない治療技術性のISS等者にはCBTを始めとする心理療法を適用することが推奨されている。しか しながら、本計ではISSに対するCBTのランダム比比較知識はこれまで実施されている。しか しながら、本計ではISSに対するCBTのランダム比比較知識はこれまで実施されている。本事では、大きでに米国にお いてその有効性が確認されている内部原常維護を用いたプログラム(CBT-IE)を用いる。導入基準を満たしたISS患者 をランダムに2種(海帯治療経、通常治療・CBTE度)に対り扱り、治療的評価、治療が3か月 評価の地点でISS患症度をはじめとする臨床尺度で評価し、同群の効果の差を検討する。
lmai R, Hori H, Itoh M, Lin M, Niwa M, Ino K, Ogawa S, Sekiguchi A, Kunugi H, Akechi T, Kamo T, Kim Y	Relationships of blood proinflammatory markers with psychological resilience and quality of life in civilian women with posttraumatic stress disorder	Sci Rep 9,17905 - ,11,2019	PTSDではレジリエンスが低く、QOLが不良である。本研究では、PTSD患者および健常対照者において、血液中炎症マーカーと自記式質問紙で評価したレジリエンス・QOLの関連を検討した。患者群では、interleukin-6 ((L-6) 濃度、高度受C-reactive protein (InSCR) 濃度は、それぞれレジリエンス、心理的QOLの得点と有意な負の相関を示した。これらの結果から、炎症を標的としたPTSD治療によって予後やQOLが改善する可能性が示唆される。
Masaya Ito, Mitsuhiro Miyamae, Chika Yokoyama, Yuichi Yamashita, Osamu Ueno, Kazushi Maruo, Asami Komazawa, Madoka Niwa, Manabu Honda, Masaru Horikoshi	Augmentation of positive valence system?focused cognitive behavioral therapy by inaudible high-frequency sounds for anhedonia: a trial protocol for a pilot study	JAMA Network Open 2 (11) ,1 - 13,11,2019	
Lin, M., Kim, Y.	The reliability and validity of the 18-item long form and two short forms of the Problematic Internet Use Questionnaire in three Japanese samples	Addictive Behaviors 101, 105961, 02,2020	本研究は、Problematic Internet Use Questionnaire (PIUQ)を日本語に翻訳した。587名の成人、360名の15-17 協の音少年、222名の大学生へ調査を行い、内的一貫性および他尺度との相関による妥当性、約1か月後の再検査信頼性 を検討した。 ストレスが記憶をはじめとする認知機能の低下を招くことは広く知られているが、本研究では、代表的なストレスホルモ
Hakamata Y, Komi S, Sato E, Izawa S, Mizukami S, Moriguchi Y, Motomura Y, Matsui M, Kim Y, Hanakawa T, Inoue Y, Tagaya H	Cortisol-related hippocampal- Psychoneuroendocrinologyextrastriate functional connectivity explains the acverse effect of cortisol on visuospatial retrieval.	Psychoneuroendoc rinology 109, 104310, 04,2019	シ・コルチゾールが娯空間記憶の符号化と検索に及ぼす影響、およびその神経機序について調査した・健常者を対象として、コルチゾールを測定するとともに、神経心理学検査により認知機能を包括的に評価した。またfMPIを用いて海馬を中心とした神経連結性についても測定した。結果、コルチゾールが高いほど、視空間記憶の符号化は促進されるにもかかりません。
Hori H. Itoh M. Yoshida F. Lin M. Niwa M. Hakamata Y. Ino K. Imai R. Ogawa S. Matsui M. Kamo T. Kunugi H. Kim Y.	The BDNF Val66Met polymorphism affects negative memory bias in civilian women with PTSD	Sci Rep 10, 3151, 02,2020	50名のPTSD女性患者および70名の健業対照女性を対象に、BDNF遺伝子の一塩基多型(SNP)であるVal66Met と、ネガティブな単語を思い出しやすいという記憶パイアスとの関連を調べた。PTSD患者群では、Val66Met多型の Met対立遺伝子を多く有するほどネガティブ記憶パイアスが有意に強くなることが示された。
Hakamata Y. Mizukami S. Izawa S. Moriguchi Y. Hori H. Kim Y. Hanakawa T, Inoue Y, Tagaya H.	Basolateral amygdala connectivity with subgenual anterior cingulate cortex represents enhanced fear-related memory encoding in anxious humans	Biological Psychiatry: Cognitive Neuroscience & Neuroimaging	無核体複合体は不安生起および情動記憶の符号化促進において重要な役割を果たすことが知られるが、これに対する無核体下位核の神経連絡が果たす役割は明らかでない。そこで65名の健常者を対象として、安静時1M円を用いて扁桃体下位核の連絡性と情動記憶符号化促進との関連を調査した。結果、不安の高い筒は、そうでない者よりも、有意に恐怖に関連した記憶の符号化が強まっていたのに対して、幸福に関連する符号化の強度は低下していた。この恐怖に関連する符号化促進とは、扁桃体外側型底核から終下部前帯状皮質との連結性が特異的に関与していた。
Hunna J. Watson , zeyneb rilmaz Laura IV. Hornton. Christopher Hržpe I. Jonathan R. I. Coleman . Hržina A. Gaspar "Julien Bryois, Anke Hinney, Virol M. Lepož, Manuel Mattheisen, Sarah E. Medland , Stephan Ripke, Shuyang Yao, Paola Giusti-Rodr'gruez, Anorexia Nervosa Genetics Initiative, Ken B. Hanscombe, Kristin L. Purves . Eating Disorders Working Group of the Psychiatric Genomics Consortium. Roser A. H. Adan, Lars Alfredsson. Tetsuya Ando. Ole A. Achessen J. Lessica H. Baker, Wade H. Berrettini, Ilka Adansa Bushren J. Lessa Baker, Wade H. Berrettini, Ilka Adansa Bushren J. Lessa Baker, Wade H. Berrettini, Ilka Adansa Bushren J. Lessa Baker, Wade H. Berrettini, Ilka Nadaraha Bushren J. Lessa Baker, Wade H. Berrettini, Ilka Adansa Bushren J. Lessa Baker, Wade H. Berrettini, Ilka Charlana Bushren J. Katharina Bushren J. Crowley, Unna N. Danner, Oliver S. P. Davis. Marina de Zwaan, George Dedoussis, Daniela Degortes, Janiece E. DeSocio, Danielle M. Dick, Dimitris Dikeos. Christian Dina, Monika Dmitrzak-Weglar, Zeberts, Stefan Ehrlin, Gen'gris Escaram's, Tryn Esko, Xavier Estivill, Anne Farmer, Angela Favaro, Fernando Fern'ndez-Aranda, Manfred M. Fichter, Krista Fischer, Manuel P?cker, Lenka Foretova, Andreas J. Forstner, Monica Forzan.	Genome-wide association study identifies eight risk loci and implicates metabo- psychiatric origins for anorexia nervosa	Nature genetics 51 (8), 1207-1214, 07,2019	国際コンソーシアムAnorexia Nervosa Genetic Initiative (ANGI) とEating Disorder Working Group of the Psychiatric Genomics Consortium (PGC-ED)のデータを用いて16,992例の神経性やせ症と55,525例の対照群による全ゲノム関連解析が実施され、8つの有意な遺伝子座位が同定された。さらに神経性やせ症と精神疾患、身体活動、静体活動、身体活動、身体活動、の間に遺伝和関があられた。これらの結果は神経性やせ症をmetabo-psychiatric disorder (代謝一精神疾患)としての再概念化することを支持する。
Mattor H-L Yilmaz Z, Thembon IA, Huibel C, Colemon JR, Gascar MA, Bryos J, Herney A, Laco A VM, Matthelien M, Modard SE, Ripkis S, Yao S, Gladi-Roy I, sau P, Hymocombe MS, Haven KL, Adain RAM, Affection J, Areb T, Andreassen CA, Baler H, Bernstein J, Cook RD, Carel PG, Cook S, Chenke J, Dalber LM, Charles G, Charlos M, Barris M, Borris C, Cook RD, Carel PG, Cook S, Chenke J, Dalber LM, Charles G, Per A, Wan M, Debousie S, Dacor MD, Carel C,	Genome-wide association study identifies eight risk loci and implicates metabo- psychiatric origins for anorexia nervosa	Nature genetics 51 (8i, 1207-1214, 07,2019	国際コンソーシアムAnorexia Nervosa Genetic Initiative (ANGII とEating Disorder Working Group of the Psychiatric Genomics Consortium (PGC-ED)のデータを用いて16,992例の神経性やせ症と55,5526 例の対照群による全ゲノム関連解析が影応れ、8つの音像温度元字便が同時された。さらに神経性やせ症と精神にも保証がある。
Mann-Chemod MA, Johnson EC, Chou YL, Calemen JR, Thomton LM, Walters RY, Yimaz Z, Baler JR, Hobbel C, Gowlon S, Medicard SE, William H L Gasper H A, Dread J, Horn A L Leap J M, Membrane M, Holland C, Gowlon S, Marchard SE, Walter H L, Garpard M, Parca J, Horn A L, Garpa JM, Membrane M, Dengrin C, Gowlon M, Christoph M, Dengrin SH, Marchard C, Garpard M, Garpard	Shared genetic risk between eating disorder- and subustance-use-related phenotypes-evidence from genome-wide assiciation studies	Addict Biol E12280, 02, 2020	
Ohara C, Sekiguchi A, Takakura S, Endo Y, Tamura N, Kikuchi H, Maruo K, Sugawara N, Hatano K, Kawanishi H, Funata M, Sugawara A, Nohara N, Kawai K, Fukudo S, Sudo N, Cooper A, Yoshiuchi K, Ando T.	Effectiveness of enhanced cognitive behavior therapy for bullimia nervosa in Japan-ia randomized controlled trial protocol	BioPsychoSocial Medicine 14(2),02,2020	神経性過食症に対する認知行動療法(CBT-E)の多施設
Yamato S. Kurematsu A. Amano T, Ariga H, Ando T, Komaki G, Wada K.	Urocortin 1: A putative excitatory neurotransmitter in the enteric nervous system	Neurogastroenterol ogy & Motility e13842, 2020	ストレス関連ペプチドであるウロコルチン1(Ucn1)が腸神経系(ENS)の興奮性神経伝達物質として機能するとの仮 説を、ラット結腸筋ストリップ収縮を用いて検証した。Ucn1は、相性収縮を用量依存的な増加させ、その効果は antalarmin (CPF1受容体拮抗薬)、TTX、およびアトロピンによって完全に抑制された。電界製造路乗収解的 antalarminにより抑制された。アトロピンは電界刺激誘発収縮を著しく減少させ、antalarminはこれをい 上減少させなかった。電界刺激により治槽液中のUcn1の濃度は著増、この増加はTTXによって完全に抑制された。 Ucn1がENSの興奮性神経伝達物質として作用し、コリン作動性神経伝達を促進することが示唆された。
Takeuchi H. Taki Y. Nouchi R. Yokoyama R. Kotozaki Y. Nakagawa S. Sekiguchi A. Iizuka K. Yamamoto Y. Hanawa S. Araki T. Miyauchi CM, Sakaki K. Sassa Y. Nozawa T. Ikeda S. Yokota S. Danlele M. Kawashima R	Empathizing associates with mean diffusivity	Scientific Reports 9 (1) ,8856 - ,06,2019	
Nakagawa S. Takeuchi H. Taki Y. Nouchi R. Kotozaki Y. Shinada T. Maruyama T. Sekiguchi A. Izuka K. Yokoyama R Yamamoto Y. Hanawa S. Araki T. Miyauchi CM, Magistro D. Sakaki K. Jeong H. Sasaki Y. Kawashima R	Mean diffusivity related to rule-breaking guilt: the Macbeth effect in the sensorimotor regions	Scientific Reports 9 (1) ,12227 - .08,2019	

著者、発表者等	論文名、演題名等	掲載誌、学会等	成果又は特記事項
Matsudaira I, Oba K, Takeuchi H, Sekiguchi A, Tomita H, Taki Y, Kawashima R	rs1360780 of the FKBP5 gene modulates the association between maternal acceptance and regional gray matter volume in the thalamus in children and adolescents	PLoS ONE 14 (8) ,e0221768 - ,08,2019	
Takeuchi H. Taki Y. Nouchi R. Yokoyama R. Kotozaki Y. Nakagawa S. Sekiguchi A. Iizuka K. Yamamoto Y. Hanawa S. Araki T. Miyauchi CM, Sakaki K. Sassa Y. Nozawa T, Ikeda S. Yokota S. Daniele M. Kawashima R	Mean diffusivity associated with trait emotional intelligence.	Social cognitive and affective neuroscience 14 (8) ,871 - 883,08,2019	
Nakagawa S, Sugiura M, Sekiguchi A, Kotozaki Y, Miyauchi CM, Hanawa S, Araki T, Sakuma A, Kawashima R	The pitfall of empathic concern with chronic fatigue after a disaster in young adults	BMC psychiatry 19 (1) ,338 - ,11,2019	
Takeuchi H, Taki Y, Nouchi R, Yokoyama R, Kotozaki Y, Nakagawa S, Sekiguchi A, Iizuka K, Yamamoto Y, Hanawa S, Araki T, Miyauchi CM, Sakaki K, Nozawa T, Ikeda S, Yokota S, Magistro D, Sassa Y, Kawashima R	Association of copper levels in the hair with gray matter volume, mean diffusivity, and cognitive functions	Brain Structure and Function 224(3), 1203- 1217, 04,2019	健常学生924名を対象として、毛髪の銅レベルと脳形態および認知機能との関連を検証し、高い銅レベルは低い認知機能および広範囲における脳灰白質量の増加との関連を認めた。神経メカニズムにおける、同の複雑な役割を示唆している。
lkeda S. Takeuchi H. Taki Y. Nouchi R. Yokoyama R. Nakagawa S. Sekiguchi A. Hanawa S. Araki T. Sakaki K. Nozawa T. Yokota S. Daniele M. Kawashima R	Neural Substrates of Self- and External- preoccupation: A Voxel-based Morphometry Study	Brain and Behavior 9(6), e01267, 06,2019	健常学生1122名を対象として、自己没入・外的没入と脳灰白質量との関連を検証し、自己没入の指標と脳の面側嗅前 割、後郎帯状回を含む広範な領域の灰白質量との間に正視度を認め、外的没入の指標と両側小脳の灰白質量との間に負相 関を認めた。自己没入、外的没入の異なった神経基盤を明らかにできた。
Takeuchi H, Tomita H, Taki Y, Kikuchi Y, Ono C, Yu Z, Nouchi R, Yokoyama R, Kotozaki Y, Nakagawa S, Sekiguchi A, Iizuka K, Hanawa S, Araki T, Miyauchi CM, Sakaki K, Nozawa T, Ikeda S, Yokota S, Daniele M, Sassa Y, Kawashima R	A Common CACNA1C Gene Risk Variant has Sex-Dependent Effects on Behavioral Traits and Brain Functional Activity.	Cereb Cortex 29(8), 3211- 3219, 07,2019	健常学生1207名を対象として、CACNA1Cの遺伝子多型の脳活動との神経相関を検証したところ、左背外側前頭前野 の安静時脳活動の低周波成分と性別の有意な交互作用および、右後即帯状皮質 視末、海馬領域の作動記憶課題試行中の 脳活動と性別との有意な交互作用を認めた。CACNA1Cの遺伝子多型は、健常群に於ける前頭葉から偏桃体の脳活動と も間連していることが示された。
Takeuchi H. Taki Y. Nouchi R. Yokoyama R. Kotozaki Y. Nakagawa S. Sekiguchi A. Iizuka K. Yamamoto Y. Hanawa S. Araki T. Miyauchi CM. Sakaki K. Nozawa T. Ikeda S. Yokota S. Magistro D. Sassa Y. Kawashima R	Association of iron levels in hair with brain structures and functions in young adults	Journal of Trace Elements in Medicine and Biology	健常学生509名を対象として、毛髪の鉄レベルと脳形態および脳血流との関連を検証し、高い鉄レベルは海馬を含む脳 灰白質量の低下、前郎 後部の局所脳血流の低下、脳梁の機能結合の増加および平均拡散性の低下との関連を認めた。鉄 は脳内の広範な領域での神経メカニズムに関与していることが示唆された。
Sugawara A. Terasawa Y, Katsunuma R, Sekiguchi A	Effects of interoceptive training on decision making, anxiety, and somatic symptoms	BioPsychoSocial Medicine 14(7), 03,2020	内受容感覚の処理の異常は、認知的な訓練によって修正できることが知られている。本研究では、不安傾向の高い健常群として12名の大学生を対象に、内受容感覚の認知訓練課題(領決計で測定された心柱のリズムと、ノートバソコンから場合首刻激力・数、あるいはイー教を選択させるもの)を1週間機能して実施してもらった。 観果、内勢を暗戦党の指標が向上、身体症状の認知や不安が減少した。さらに、内受容感覚の姿音と適応的行動変音の間には、有意な正の相関が示された。
Koga N, Ogura J, Yoshida F, Hattori K, Hori H, Aizawa E, Ishida I, Kunugi H, Altered polyunsaturated fatty acid levels in relation to proinflammatory cytokines, fatty acid desaturase genotype, and diet in bipolar disorder.	Altered polyunsaturated fatty acid levels in relation to proinflammatory cytokines, fatty acid desaturase genotype, and diet in bipolar disorder.	Transl Psychiatry 9,208 - ,08,2019	
Tsuchimine S, Hattori K, Ota M, Hidese S, Teraishi T, Sasayama D, Hori H, Noda T, Yoshida S, Yoshida F, Kunugi H.	Reduced plasma orexin-A levels in patients with bipolar disorder	Neuropsychiatr Dis Treat 15,2221 - 2230,08,2019	
Shinichi Ishikawa, Kohei Kishida, Takuya Oka, Aya Saito, Sakie Shimotsu., Norio Watanabe, Hiroki Sasamori, Yoko Kamio	Developing the universal unified prevention program for diverse disorders for school-aged children	Child and Adolescent Psychiatry and Mental Health 11,2019	多様な障害に対する万能で統一された認知行動療法の予防プログラム(Up2-D2)を開発し、受容性と忠実性を調査した。Up2-D2はトレーニングを受けた教師によって実施され、9-12歳の213人の子供がアンケートに回答した。プログラムは子どもだちに受容され、また、教師による忠実性も十分であった。Up2-D2は実際の学校現場で実現可能であることが明らかとなった。
Ai Koyanagi, Nicola Veronese, Davy Vancampfort, Andrew Stickley, Sarah E Jackson, Hans Oh, Jae II Shin, Josep Maria Haro, Brendon Stubbs, Lee Smith	Association of bullying victimization with overweight and obesity among adolescents from 41 low-and middle-income countries	Pediatr Obes 13(1) ,3-13,01,2018	低所得国と中所得国41カ国における太りすぎ/肥満といじめの被害との関連に関して、the Global School-based Student Health Surveyから得た114.240名のデータを対象にメタ解析を行った。女子において、太りすぎと配満はいじめ被害と関連していたが、男子では関連していなかった。
Andrew Stickley.H.Oh.T.sumiyoshi,M.McKee and A.Koyanagi	Injiury and depression among 212 039 individuals in 40 low and middle-income countries	Epidemiol Psychiatr Sci 27(4) ,327- 335,08,2018	低所得国と中所得国40カ国、212039名のデータを分析した結果、交通傷害の有病率[0.1%(エチオビア)〜5.1%(バングラデシュ)、その他は交通(傷害)範囲0.9%(ミャンマー)から12.1%(ケニア)が各国で大きく異なった。また、傷害生存者は精神的健康が悪化するリスクがあることが示された。
Stickley ALeinsalu M. DeVylder JE. Inoue Y, Koyanagi A	Sleep problems and depression among 237 023 community-dwelling adults in 46 low- and middle-income countries.	Sci Rep 10(1) ,8173,05,2020	World Health Survey (WHS) 2002-2004から得た低所得国と中所得国の237023名のテータを解析した。 護眼の 問題は、亜症候群性ラン病(オッズ比(CR): 223、95%信頼区間(CI): 184-270)、 短いうつ病エピソード (CR = 248、95%CI = 229-295) およびうつ病エピソード (CR = 361、95%CI = 324-4.03) と関連していた。 また、うつ病の睡眠の問題 (睡眠の問題のみと比較して) は、不安、知覚ストレス、不健康、セルフケア、痛み、認知、対人活動の領域でリスクが高かった。
Isaksson J.Schwab-Stone M.Stickley A.Ruchkin V	Risk and protective factors for problematic drinking in early adolescence- a systematic approach.	Child Psychistry & Human Development 1573 - 3327,08,2019	思春期のアルコール摂取も問題について米国にて6学年と7学年で前向きコホート研究を行った。7学年のアルコール関連の問題は、抑うつ症状、行動の問題、不正行為の認識の低下、非行中間との提携などの6学年の個人および対人関係の要因によって展生予測されていた。さらに、6学年でのアルコール使用とヒスバニックまたは白人の民族性も、その後のアルコール関連の問題と関連していた。
Leinsalu,M.Reile R.Stickley A	Economic fluctuations and long-term trends in depression : a repeated cross-sectional study in Estonia 2004-20016.	J Epidemiol Community Health 72(5) ,409- 412,03,2018	2004年から2016年のエストニアにおけるメンタルヘルスに対する経済変化の影響を贈べた。20 <sup>1</sup> 64歳の17.794人のデータを用い、うつ前の有病率を調べた結果、2004年と比較して2006年の有病率は現性の177.95% Cl 0.64-0.931、文性0.85 195% Cl 0.74 to 0.97 であった。2010年の有病率は、男处ともに2008年と比較した影合は 1.22 195% Cl 1.04 - 1.43 and 1.09 - 1.37 respectively「あった。男性では、2008-2010年のうつ病の罹患率が増加は、35-64歳、エストニア人、規格を、教育を受けているもの、雇用された人が有意であったのに対し、女性の間では50 64歳、エストニア人、非エストニア人、未婚、高学歴まだは中号教育を受けていること、中所帰屬、または雇用された人で増加していた。
Stickley A.Koyanagi A.Ueda M.Inoue Y.Waldman K.Oh H	Physical multimorbidty and suicidal behavior in the general population in the United States.	J Affect Disord 260 604- 609,01,2020	身体的多疾患罹患(2つ以上の身体的疾患があること)と自殺との関連に関して、the Collaborative Psychiatric Epidemiology Surveys (CPES)のテータを用い、15,311人を分析した結果、身体的疾患の数の増加は、自殺行動のオッズ比が高くなることと関連していた。健康状態のない人と比較して、4つ以上の疾患がある人は、自殺急應、自殺計画、自殺未遂を報告する権率がそれぞれ(299、482、439任高かった。
Stickley A. Sumiyoshi T, Narita Z, Oh H, DeVylder JE, Jacob L, Koyanagi A.	Physical injury and psychotic experiences in 48 low- and middle-income countries.	Psychol Med 49(14) ,2307- 2319,10,2019	the World Health Survey in 2002-2004から得た低所得国と中所得国の242 952名のデータを解析した。傷害、交通傷害および他の傷害が精神病経験の高さと関連していた。
Jacob L. Smith L. McDermott D, Haro JM, Stickley A, Koyanagi A.	Relationship between sexual orientation and psychotic experiences in the general population in England.	Psychol Med 49(14) ,2307- 2319,10,2019	the 2007 Adult Psychiatric Morbidity Surveyから得たデータを用い、16歳以上の7275人について分析した結果、イギリスの一般集団において性的指向(同性愛者)と精神病経験の間に関連があり、境界性パーソナリティー障害、孤独、ストレスイベントを伴う可能性があることが示唆された。
Sumiyoshi T	Cognitive enhancement in schizophrenia by buspirone: Role of serotonin1A receptor agonism	Schizophr Res 215,455- 456,1,2020	統合失調症の認知機能障害の改善に、セロトニン1A受容体作動薬buspironeなどが有効であることが、Sumiyoshi ら (2007など)により報告されてきた。Wangら(2019)は、多数例のアジア人を対象とした無作為二重盲検化試験により、buspirone设与の増強療法が、統合失調症患者のほとんどの認知機能領域を改善することを報告した。以上は、統合失調症の認知機能改善薬の開発を促進するエビデンスになると期待される。
Narita Z.Knowles K.Fedina L.Oh H.Stickler A.Kelleher I.DeVylder J.	Neighborhood change and psychotic experiences in a general population sample	Schizophr Res 206 1,04,2019	近所の環境によって引き起こされる社会的ストレスは、精神病経験を増加させる。さらにそれらは、妄想気分、観察と迫 高の妄想、統制の妄想、幻覚であった。主観的に認識された近隣の変化が精神病経験の発生に寄与する要因である可能性 があることを示唆している。
Inagawa T. Narita Z. Sugawara N. Maruo K, Stickley A, Yokoi Y, Sumiyoshi T.	Meta-Analysis of the Effect of Multisession Transcranial Direct Current Stimulation on Cognition in Dementia and Mild Cognitive Impairment	Clin EEG Neurosci 50 (4) ,273 - 282,07,2019	経頭蓋直流刺激(IDCS)の、Alzheimer病および軽度認知障害(MCI)における全般的認知機能あるいは特定の認知機能領域への効果に関して、システマティックレビューおよびメタ解析を行った。両疾患における偽刺激と複数回tDCS施行の比較に関する8研究を対象とした。それらのうち、5研究においてMini-Mental State Examinationが用いられており、19時の13点の変化がfixed-effect modelを用いた解析により認められた。一方、Alzheimer's Disease Assessment Scale-Cognitionを用いた研究が3つあり、平均-053点の変化を認めた。これまでの研究数が少なく、異なる評価法が用いられてきたことより、現時点ではtDCS有用性は明らかではない。多数例を共通の尺度で評価するさらなる研究が、今後待たれる。
Kumazaki H, Muramatsu T, Yoshikawa Y, Matsumoto Y, Ishiguro H, Sumiyoshi T,Mimura M, Kikuchi M	Comedic experience with two robots aided a child with autism spectrum disorder to realize the importance of nonverbal communication.	Psychiatry Clin Neurosci, 73 (7) ,423 - 423,07,2019	2台のヒューマノイド・ロボットによる介入を受けた、自閉症スペクトラム障害(ASD)者一例の症例報告を行った。患者はノートパソコンによる適隔操作で2台のロボット(一台は人の表情をリアルに再現でき、もう一台は限られた表情のみ再現できる)を操作さる環境に置かれた。実験節には他人との交流に自信を持てなかったが、実験後には非言語のコミュニケーションを自発的に行えるようになった。加えて、学校及び家庭でより豊かな表情をしめすことがざきるようになり、会話時のアイ・コンタクトもとることができるようになった。さらに、他人と交流をもてるようになり、自信を取り戻した。
Ohi K, Sumiyoshi C, Fujino H, Yasuda Y, Yamamori H, Fujimoto M, Sumiyoshi T, Hashimoto R.	A 1.5-Year Longitudinal Study of Social Activity in Patients With Schizophrenia	Front Psychiatry 10 (567) ,08,2019	統合失調症患者の社会的活動に対するIQ。日常生活技能、社会機能、精神病症状投薬の長期的影響を検討した。65名の患者の1.5年間の経過を追跡した結果、IQ、日常生活技能、社会機能、社会的活動の有意な改善を認めた。IQ、日常生活技能、社会機能、社会的活動の有意な改善を認めた。IQ、日常生活技能、社会機能の変化と社会的活動の変化と有意な正の相関を認めた。一方、精神病症状の変化は社会的活動の変化と有意な負の相関を示した

著者、発表者等	論文名、演題名等	掲載誌、学会等	成果又は特記事項
Sumiyoshi T, Watanabe K, Noto S, Sakamoto S, Moriguchi Y, Tan KHX, Hammer-Helmich L, Fernandez J	Relationship of cognitive impairment with depressive symptoms and psychosocial function in patients with major depressive disorder: Oross-sectional analysis of baseline data from PERFORM-J	J Affect Disord 258,172 - 178,11,2019	日本人大うつ時性障害(MDD)患者における認知機能障害と心理社会的機能との相関を、Prospective Epidemiological Research on Functioning Outcomes Related to Major Depressive Disorder in Japan (PERFORM-J) のベース ラインデータを用いて解析した。対象は、抗うつ薬による光療が新たに関しされたMDDの診断基準を滅たす外来患者 518名であった。半数以上において書観的に測定される認知機能の低下を認めた。抑うつ症状の重視度は主観的認知機能障害の程度と正の相関を良めした。一方、客観的認知機能と抑うつ症状との間には相関を認めなかった。抑うつ症状と表観的認知機能と加うつ症状と表明を強力した。これらの結果は、MDDにおける認知機能障害を対象とする治療の必要性を示唆する。
Stickley A, Oh H, Sumiyoshi T, Narita Z, DeVylder JE, Jacob L, Waldman K,Koyanagi A	Perceived discrimination and psychotic experiences in the English general population	Eur Psychiatry 62,50 - 57,09,2019	知覚される差別と精神病様体験(PEs)の関連を、英国のデータを用いて検討した。Adult Psychiatric Morbidity Survey (2007から抽出した一般人了963名の自記式情報を対象とした。結果として、人種、性、宗教、年齢、身体的問題、性 的志向のいずれによる差別の知覚も、PEsの増加につながっていた。以上の結果は、一般人のメンタルヘルス向上への公 的な施策に示唆を与える。
Stickley A, Waldman K, Koyanagi A, DeVylder JE, Narita Z, Sumiyoshi T, Jacob L, Oh H	Psychotic experiences and accidents, injuries, and poisonings among adults in the United States	Psychiatry Res 282,12,2019	精神病様体験(PEs)と精神病様体験(PEs)と事故・外傷の関係について、米国の一般人口を対象に調査を行った。 National Comorbidigy Survey Replicationから得た2274名のデータを対象とした。結果として、過去12ヶ月にPes を有した場合、事故・外傷に遭遇するリスクが有態に高かった。
Kumazaki H, Muramatsu T, Yoshikawa Y, Matsumoto Y, Ishiguro H, Sumiyoshi T, Mimura M, Kikuchi M.	Comedic experience with two robots aided a child with autism spectrum disorder to realize the importance of nonverbal communication.	Psychiatry Clin Neurosci 07,2019	自開スペクトラム症者にアンドロイドロボットと小型ロボットを操作していただいたところ他者支店の理解が進んだこと を報告した。
Kumazaki H, Muramatsu T, Miyao M, Okada Kl, Mimura M, Kikuchi M,	Brief Report: Olfactory Adaptation in Children with Autism Spectrum Disorders.	Journal of Autism and Developmental Disorders. 07,2019	自開スペクトラム症者と定型発達者の嗅覚特性を比較し自開スペクトラム症者では嗅覚順応が低下していることを報告した。
Kukmazaki H, Muramatsu T, Yoshikawa Y, Matsumoto Y, Ishiguro H, Sumiyoshi T, Mimura M, Kikuchi M.	Role-Play-Based Guidance for Job Interviews Using an Android Robot for Individuals With Autism Spectrum Disorders.	Frontiers in Psychiatry 04,2019	自開スペクトラム症者が2名一組になりアンドロイドの操作者、対面者となり面接の訓練を行った。その結果参加者の他者の立場に立つということについての自信が増した。
Kumazaki H. Muramatsu T. Yoshikawa Y. Yoshimura Y. Ikeda T. Hasegawa C, Saito ND, Shimaya J, Ishiguro H, Mimura M, Kikuchi M.	Brief report: A novel system to evaluate autism spectrum disorders using two humanoid robots.	Journal of Autism and Developmental Disorders. 49 (4) ,1709 - 1716,04,2019	小型ロボット2体を用いて、ロボットを用いた自閉スペクトラム症診断評価法を開発した。自閉スペクトラム症者及び健常者が参加した。自閉スペクトラム症社内では自閉症の重症度とロボットを用いた診断評価法の点数に相関関係があったが、一方で自閉スペクトラム症と健常者の間でスコアに有意差は認めず、診断ツールとしての有効性は示すことができなかった。
Kumazaki H. Warren Z. Swanson A. Yoshikawa Y. Matsumoto Y. Yoshimura Y. Shimaya J. Ishiguro H. Sarkar N. Wade J. Mimura M. Minabe Y. Kikuchi M.	Brief Report: Evaluating the Utility of Varied Technological Agents to Elicit Social Attention from Children with Autism Spectrum Disorders.	Journal of Autism and Developmental Disorders, 49 (4) ,1700 - 1708,04,2019	自開スペクトラム疫者及び健業者に対しアンドロイト、小型ロボット、スクリーン上のアパター、ヒトのどの声が一番反応するかを評価した。自閉スペクトラム症者と健業者の間で全てのエージェントに対する反応性に大きな差を認めた。自閉スペクトラム症者内では小型ロボットに対する反応が殴もよかった。
Naito N, Kikuchi M, Yoshimura Y, Kumazaki H, Kitagawa S, Ikeda T, Hasegawa C, Saito DN, Tomiyama S, Minabe Y.	Atypical body movements during night in young children with autism spectrum disorder: a pilot study.	Scientific Report 05,2019	自開スペクトラム疫者の睡眠の問題を、睡眠計渦中の体動の動きを評価した。ASDではコントロール群と比べて、入眠 2、3時間後の体動の動きが大きかった。
Yoshikawa Y. Kumazaki H. Matsumoto Y. Miyao M. Kikuchi M. Ishiguro H.	Relaxing Gaze Aversion of Adolescents with Autism Spectrum Disorder in Consecutive Conversations with Human and Android Robot ? A Preliminary Study ?.	Frontiers in Psychiatry 06,2019	人間の女性と女性型アンドロイドロボットと交互に対峙する半構造化された会話のセッションを計5回連続して行い、自 関スペクトラム症者が女性型アンドロイドとインタラクションした後、人間の女性とのアイコンタクト率が高まることを 報告した。
Kumazaki H. Muramatsu T. Yoshikawa Y. Matsumoto Y. Miyao M. Ishiguro H. Mimura M. Minabe Y. Kikuchi M.	How the realism of robot is needed for individuals with autism spectrum disorders in an interview setting?	Frontiers in Psychiatry. 07,2019	自聞スペクトラム症者へのロボットを用いた介入に注目が集まっている。現在までの研究でどういった外見が自聞スペクトラム症者のモチベーションを引き出すかについては分かっていない。本研究ではアンドロイドの外見に対する印象と、アンドロイドを用いた介入のモチベーションの関係について調べた。その結果、アンドロイドから人間らしさの印象を受けなかった者ほど介入へのモチベーションは高いとの結果となった。
Okumura T. Kumazaki H. Singh KA, Touhara K. Okamoto M.	Individuals with autism spectrum disorder show altered event-related potentials in the late stages of olfactory processing.	Chemical Senses. 11,2019	ASDは神経発達障害のひとつで、対人関係、コミュニケーション、興味の範囲の3つの場面に障害を持つほか、匂い音、光など感覚刺激に対する反応にも特徴があることが知られています。しかし模覚については、脳における情報処理のどのような段階に特徴を持つのか、まだ明らかにされていません。そこで東京大学大学院職学生命科学研究科の個本科学教授ら、認知部の時間変化を詳細に及えられる脳波を用いてASD者と健常者の噂しまれた。ました。14名のASD者と19名の健常者の匂いに対する嗅覚誘発脳波を比較したところ、匂い星示後542ミリ秒以降の、時間的に比較の終知の処理において違いが認められました。また、その違いは、疾郷が後等状皮質などの、嗅覚以外の感覚の処理にも関与する脳領地の活動の違いに由来することが推定されました。これらの結果から、ASD者の嗅覚処理では、脳における高次の認知処理に違いがある句能性が示唆されました。これらの結果から、ASD者の嗅覚処理では、脳における高次の認知処理に違いがある句能性が示唆されました。
Kumazaki H. Muramatsu T. Kobayashi K, Watanabe T. Terada K, Higashida H, Yuhi T, Mimura M, Kikuchi M.	Feasibility of autism-focused public speech training using a simple virtual audience for autism spectrum disorder.	Psychiatry and Clinical Neuroscience. 11,2019	自開スペクトラム症者のスピーチ恐怖にシンブルなアヴァターを多数用意したヴァーチャルシステムが有用な可能性について予備的に報告した。
Namatame H, Fujisato H, Ito M, Sawamiya Y.	Development and validation of a Japanese version of the Emotion Regulation Questionnaire for Children and Adolescents.	Neuropsychiatric Disease and Treatment, 16, 209-219.	感情調整尺度児童青年版(Emotion Regulation Questionnaire for Children and Adolescents : ERQ-CA)の日本語版を開発し、その信頼性と妥当性について報告した。
Yamada Y, Inagawa T, Sueyoshi K, Sugawara N, Ueda N, Omachi Y, Hirabayashi N, Matsumoto M, Sumiyoshi T	Social Cognition Deficits as a Target of Early Intervention for Psychoses: A Systematic Review	Front Psychiatry 10,333 - ,05,2019	早期精神病の社会認知機能障害に対する介入研究を対象として系統的レビュー(PRISMAガイドライン準拠を実施し、その結果を報告した。結果は認知トレーニングによる介入(2報)、モダフィニルによる介入(2報)、オキシトシンによる介入(1報)が設当し、社会認知機能の下位領域である表情知覚を中心に改善効果を認めた。
Gotoh L. Yamada M. Hattori K. Sasayama D. Noda T. Yoshida S. Kunugi H. Yamada M	Lysophosphatidic acid levels in cerebrospinal fluid and plasma samples in patients with major depressive disorder.	Heliyon 5 (5) ,e01699 - ,05,2019	不能和脂肪酸の一種であるリゾホスファチシン酸(lysophosphatidic acid. LPA)は大うつ病の病態に重要な役割を果たす可能性が示唆されている。本研究では、ELISA法を用いて大うつ病患者および健常対象者の脳脊髄液(CSF)と血策中LPA濃度を測定し比較した。その結果、患者群全体と健常対象群のCSFおよび血漿中のLPA濃度に有意な差は確認されなかった。本研究により、CSFおよび血漿中のLPA濃度は診断用パイオマーカーとしては成立し難いことが示された。
Akechi Tatsuo, Mantani Akio, Kurata Ken'ichi, Hirota Susumu. Shimodera Shinji, Yamada Mitsuhiko, Inagaki Masatoshi, Watanabe Norio, Kato Tadashi, Furukawa Toshi A.	Predicting relapse in major depression after successful initial pharmacological treatment.	Journal of affective disorders 250,108 - 113,05,2019	SUN/2Dは、本全国48医療機関にて合計2O11人の未治療うつ病エピソードの患者が参加した抗うつ剤の多施設共同ランダム化比較試験である。本論文は、SUN/2D investigators による試験中にみられた大うつ病の再燃にかかる二次解析結果をまとめたものである。
lmai H. Takeshima N. Hayasaka Y. Yonemoto N. Ogawa Y. Tajika A, Fujita H. Kato T. Furukawa TA: FLATT Investigators	Association between patients' feedback comments and depressive mood: satisfaction, homework conducted, and dropouts during self-guided smartphone cognitive behavioral therapy.	Psychiatry Clin Neurosci 73 (6) ,349 - 350,06,2019	FLATT studyは、薬物治療抵抗性うつ病患者を対象に薬物療法とスマートフォンを利用したモバイル認知行動療法のためのアプリケーションとの併用療法の効果を検証した多能設共同ランダム化比較試験である。 本籍文は、患者からのフィードバックコメントと抑うつ気対等のアウトカムとの関連について二次解析した結果をまとめたものである。
Kawashima Y, Yonemoto N, Inagaki M, Inoue K, Kawanishi C, Yamada M	Interventions to prevent suicidal behavior and ideation for patients with cancer: A systematic review.	General Hospital Psychiatry 60,98 - 110,07,2019	系統的レビューにより、がん患者に対する自殺予防介入の効果を検討した論文を抽出し、先行研究の課題点を整理した。 その結果、現状ではがん患者の自殺行動や自殺念慮を減少させる効果が確認された介入手法はないことが確認された。また、研究手法に関する課題点も複数抽出され、今後、さらなる研究が必要と考えられた。
Furukawa TA, Kato T, Shinagawa Y, Miki K, Fujita H, Tsujino N, Kondo M, Inagaki M, Yamada M	Prediction of remission in pharmacotherapy of untreated major depression: development and validation of multivariable prediction models.	Psychol Med 49 (14) ,2405 - 2413,10,2019	SUN?Dは、本全国48受機機関にて合計2011人の未治療うつ病エピソードの患者が参加した抗うつ剤の多施設共同ランダム化比較試験である。本論文は、SUN?D investigators による寛解予測因子にかかる二次解析結果をまとめたものである。
Akechi T, Kato T, Fujise N, Yonemoto N, Tajika A, Furukawa TA: SUN⊕D Investigators	Why some depressive patients perform suicidal acts and others do not.	Psychiatry Clin Neurosci 73 (10) ,660 - 661,10,2019	ランダム比較試験(SUND試験)の2次解析を行った。うつ病患者における自殺行動について分析し、報告した。
Akechi T, Sugishita K, Chino B, Itoh K, Ikeda Y, Shimodera S, Yonemoto N, Miki K, Ogawa Y, Takeshima N, Kato T, Furukawa TA for SUN@D Investigators.	Whose depression deteriorates during acute phase antidepressant treatment?	J Affect Disord 260, 342-348, 01,2020	ランダム比較試験 (SUND試験) の2次解析を行った。 急性期の抗うつ薬治療中にうつ病の悪化を経験する患者はごく少数である。 最初のうつ病エピソードの発症時年齢。 現在の年齢、 および抗うつ薬に対する早期の陰性反応は、 その後のうつ病の悪化の有用な予測因子である可能性があることを明らかにした。
Kusui Y. Nishizawa D. Hasegawa J. Uno K. Miyanishi H. Ujike H. Ozaki N. Inada T. Iwata N. Sora I. Iyo M. Yamada M. Kondo N. Won MJ, Naruse N, Uehara-Aoyama K. Ikeda K. Nitta A	A Single Medical Marker for Diagnosis of Methamphetamine Addiction - DNA Methylation of SHATI/NAT8L Promoter Sites from Patient Blood.	Curr Pharm Des 2020:26(2):260- 264	我が国では行われた多施設共同研究 JGIDA group で収集された患者ゲノムを用いて実施されたゲノムワイド関連解析研究の成果である。本籍文では、SHATI/NAT8L 遺伝子のプロモータ部位のメチレーションについて報告した。
Kawashima Y, Yonemoto N, Inagaki M, Inoue K, Kawanishi C, Yamada M	Interventions to prevent suicidal behavior and ideation for patients with cancer: A systematic review.	Gen Hosp Psychiatry 19, 30465-30467, 11,2019	がん患者の希死念慮や自殺関連行動の予防のための介入効果についてのシステマティックレビューを報告した研究である。

著者、発表者等	論文名、演題名等	掲載誌、学会等	成果又は特記事項
Levis B. Benedetti A, Thombs BD, on behalf of the DEPRESsion Screening Data (DEPRESSD) Collaboration	Accuracy of Patient Health Questionnaire-9 (PHQ-9) for screening to detect major depression: individual participant data meta-analysis.	BMJ 365, 11781, 04, 2019	本論文は、McGill 大学 (Brett D. Thombs 教授) が中心となって実施されているうつ病スクリーニング評価指標の標準化に関する国際共同研究「the DEPRESsion Screening Data (DEPRESSD) Collaboration」の成果論文である。DEPRESSD には山田前長と報道正弦多角研究員が書している。本論文は、PHQ-9 評価についての大規模メタアナリシスのプライマリ論文と位置付けられている。
Wu Y, Levis B, Riehm KE, Saadat N, Levis AW, Azar M, Rice DB, Boruff J, Cuijbers P, Gilbody S, Ioannidis JPA, Kloda LA, McMillan D, Patten SB, Shrier I, Ziegelstein RC, Akena DH, Arroll B, Ayalon L, Baradaran HR, Baron M, Bombardier CH, Butterworth P, Carter G, Chagas MH, Chan JCN, Cholera R, Conwell Y, de Man-van Ginkel JM, Fann JR, Fischer FH, Fung D, Gelaye B, Goodyear-Smith F, Greeno CG, Hall BJ, Harrison PA, Ha rter M, Hegerl U, Fides L, Hobfoll SE, Hudson M, Hybhantis T, Inagaki M, Jetté N, Khamseh ME, Kely KM, Kwan Y, Lamers F, Lu SH, Johnson M, Loureiro SR, Lowe B, Kodure S, Challes S, McGune JR, Lowe B, Channash K, Os Ghouse S, Challes S, Chal	Equivalency of the diagnostic accuracy of the PHG-8 and PHG-9: a systematic review and individual participant data meta-analysis.	Psychol Med. 2019 Jul 12:1-13. doi: 10.1017:S00332 91719001314. Online ahead of print.	McGill 大学(Brett D. Thombe 教授)との共同研究「DEPRESSD Project」によるシステマティックレビューとメタ 解析の結果である。本論文では、PHQ-8とPHQ-9の診断性能を比較し報告した。DEPRESSD Project には山田部長 と福垣正按答義研究員が参画している。
Sean McGrath, XiaoFei Zhao, Russell Steele, Brett D. Thombs, Andrea Benedetti, the DEPRESsion Screening Data (DEPRESSD) Collaboration,Mitsuhiko Yamada, Yuying Zhang	Estimating the sample mean and standard deviation from commonly reported quantiles in meta-analysis.	Stat Methods Med Res 2020 Jan 30:96228021988 9080, doi: 10.1177/096228 0219889080. Online ahead of print.	本論文は、McGill 大学が中心となって実施しているうつ病スクリーニング評価指標の標準化に関する国際共同研究「DEFRESSD Collaboration」の成果である。本語文は、PHQ-9 評価についての大規模メタアナリシスの二次解析論文である
Nakatake Y, Furuie H, Yamada M, Kuniishi H, Ukezono M, Yoshizawa K, Yamada M	The effects of emotional stress are not identical to those of physical stress in mice model of social defeat stress.	Neurosci Res 2019 Oct 16:S0168- 0102(19):30261- 5, doi: 10.1016/j.neures. 2019.10.008, Online ahead of print.	本研究では、心理的ストレスに集点を当てた社会的敗北ストレス負荷マウスモデルを確立したことを報告している。このモデルは、構成概念妥当性の高い新規の慢性ストレスモデルとなるものと考えられる。
Shibasaki K, Yamada K, Miwa H, Yanagawa Y, Suzuki M, Tominaga M, Ishizaki Y	Temperature elevation in epileptogenic foci exacerbates epileptic discharge through TRPV4 activation.	Lab Invest 100(2), 274-284, 02,2020	ランダム比較試験(SUND試験)の2次解析を行った。急性期の抗うつ薬治療中にうつ病の悪化を経験する患者はごく少数である。最初のうつ病エピソードの発症時年齢、現在の年齢、および抗うつ薬に対する早期の陰性反応は、その後のうつ病の悪化の有用な予測因子である可能性があることを明らかにした。
GBD 2017 Child and Adolescent Health Collaborators	Diseases, Injuries, and Risk Factors in Child and Adolescent Health, 1990 to 2017 Findings From the Global Burden of Diseases, Injuries, and Risk Factors 2017 Study.	JAMA Pediatr 173(6) e190337, 04,2019	小児青年期の国際疾病負荷(Global Burden of Diseases)の2017年データを示した。先天性心疾患は、子どもの健康における世界的な大規模かつ急遽に出現している問題である。先天性心疾患の有病事を大幅に変化させる能力がなければ、年存率と生活の質を向上させるために介入と資源を使用しなければならない。研究は、先天性必疾患における世界的な大きな不公平を浮き彫りにし、スクリーニング、治療、データ収集を改善するための政策変更の出発点となりうるものであった。
Global Burden of Disease Cancer Collaboratio	Global, Regional, and National Cancer Incidence, Mortality, Years of Life Lost, Years Lived With Disability, and Disability- Adjusted Life-Years for 29 Cancer Groups, 1990 to 2017 A Systematic Analysis for the Global Burden of Disease Study	JAMA Oncol 5(12) ,1749- 1768,09,2019	国際疾病負荷(Global Burden of Diseases)研究として、がん関連の世界的な疫学的プロファイルを示した。結果は大きな不均一性を示しており、これは危険因子への曝露、経済的環境、ライフスタイル、ケアおよび触診へのアクセスの違いを反映したものである。この成果は、政政立案者およびその他の利害関係者が、世界目標を達成し、がん医療の公平性を向上させるために、国および地域のがん対策を開発し、改善するために利用できる。
Roy Burstein, Nathaniel J. Henry, Naohiro Yonemoto (···) Simon I. Hay	Mapping 123 million neonatal, infant and child deaths between 2000 and 2017	Nature 574, 353- 358,10,2019	2000年以降、多くの国が子どもの生存率の改善に大きな成功を収めてきたが、地域ごとの推捗状況は依然として不明である。2030年までに予防可能な子どもの死亡をなくず、という国連持続可能な場発目標3.2に向けた取り組みに信頼提供するために、子どもの死亡をなくが、という国連持続可能な場発目標3.2に向けた取り組みに信頼提供するでは、子どもの死亡をといて主まで動に制し、地理統計学的生存モデルを用いて、中低所得国99カ国における新生児、見見、2000年から2017年までの駅間に、地理統計学的生存モデルを用いて、中低所得国99カ国における新生児、見見、2000年末満の子との死亡率とかこめの国的競争を定量化した。その結果、これらの国の会議・港内の32%が、2017年までに出生1.000人当たりの死亡率か25人以下になった地区に住みており、これらの国の2000年から2017年の間に発生した子どもの死亡の59%は、地理的不平等がなければ回避できたと推定された。この研究により、高死亡率クラスター、進歩パターン、地理的不平等を特定し、すべての人々の健康を改善するための適切な投資と実施に情報を提供することが可能とした。
Yumoto T, Naito H, Yorifuji T, Tahara Y, Yonemoto N, Nonogi H, Nagao K, Ikeda T, Sato N, Tsutsui H and on behalf of the Japanese Circulation Society Resuscitation Science Study (JCS-ReSS) Group	Geographical Differences and the National Meeting Effect in Patients with Out-of-Hospital Cardiac Arrests' A JCS- ReSS Study Report.	Int J Environ Res Public Health 16(24) E5130, 11,2019	「全国集会効果」とは、医療従事者が学会に参加し、病院が人員を削減した場合に、患者転帰が悪化することを指す。本 研究の目的は、これまでの研究では検討されていない院外心停止(COHCA)患者の転帰の地域差を考慮し、会議の開催 場所による表現中、会議制後、会議後の転用の強いを検討することであった。日本のOHCA患者では、集会日前後の データを比較し、集会場所や地域差を考慮しても、「全国集会効果」は存在しなかった。
Ueda K. Yonemoto N	Impacts of early intervention on family outcomes: A multicenter cross-sectional study in Japan.	Disability and Health Journal 13(1)100832,01, 2020	近年、日本では早期介入プログラムには家族中心アプローチの概念が取り入れられている。早期介入を通して提供されるサービスは、家族に有益な結果をもたらす可能性がある。我々は以前、日本で使用するだめに「Family Outcomes Survey-Flewised (FOS-R) を調査したが、家族への影響は評価されていなかった。そこで、早期介入が家族のアウトルム法なにアウトカム達なに原理するの芸で与える遺色のな影響を理範した。日本全国の120所の発達支援センターで早期介入を受けている未就学児の庫画児の母親をお家に、匿名の自己式質問票を配布した。多変量ランダム効果モデルを開いて日本部がOS-Rのスフアを評価した。304人の母親のテータを分析した。早期介入の側間が長いほど、家族の結婚と正の相関があった(12ヵ月未満 vs 12-23ヵ月:図帰係数 - 0.19,p = 0.02、95%C1: 0.02、0.36)。早期介の倉用性の別域は、家族の配名・常に関係と正の人の20、95%C1: 0.02、0.55)、本研究は、早期介入が家族、特に早期介入が有用であると認識している家族にとってより良い転帰と関連していることを示唆していた。
Ikeda Masashi, Takahashi Atsushi, Kamatani Yoichiro, Momozawa Yukhide, Saito Takeo, Kondo Kenji, Shimsaski Ayu, Kawase Kohei, Sakusabe Takaya, Iwayama Yoshimi, Toyota Tomoko, Wakuda Tomoyasu, Kakuchi Mitsuru, Kanahara Nobuhisa, Yamamori Hidenaga, Yasuda Yuka, Watanabe Yuichiro, Hoya Satoshi, Aleksic Branko, Kushima Itaru, Arai Heli, Takaki Manabu, Hattori Kotaro, Kunuja Hiroshi, Okahisa Yuko, Ohnuma Tohru, Ozaki Norio, Someya Toshiyuki, Hashimoto Ryota, Yoshikawa Takeo, Kubo Michiaki, Iwata Nakao	Genome-Wide Association Study Detected Novel Susceptibility Genes for Schizophrenia and Shared Trans- Populations/Diseases Genetic Effect.	Schizophrenia bulletin 45 (4) ,824 - 834,06,2019	これまでのゲノムワイド関連解析(GWAS)では100以上の総合失調症(So2)のリスク遺伝子の候補が固定され、So2はエフェクトサイズの小さい、数多くの遺伝的変質によって生じる多因子遺伝疾者であることが示されてきました。 本研究では、So2の新規のリスク遺伝子を同定するだめ、まず日本人サンブル(So2 1,940人と対照者7.408人)を用 いGWASを、また別の日本人サンブル(So2 4,071人と対象音の4.479人)を用い追述を実施しました。その結果、新 規にSPHKAP、SLC38A3、CABP1-ACADSという3個のリスク遺伝子を同定しました。 次にヨーロッドでのGWASコンソーシアムのSo2データの結果も併せて解析し、さらに新規に12個の候補遺伝子をを同 定しました。本部学では新での遺伝の対通性を検討したところ、So2の遺伝的ソスクは人種を超えて共通するこ と、さらには、総合失調症の近線精神疾患である双端性増高とも共通すことをみいだしました。 まためますと、本研学では新たに15個のSo2のリスク遺伝子を同定し、またSo2の"リスク"は他の精神障害と、民族 を超えて共通することが示されました。
Ohi K. Sumiyoshi C. Fujino H. Yasuda Y. Yamamori H. Fujimoto M. Sumiyoshi T, Hashimoto R	A 1.5-year longitudinal study of social activity in patients with schizophrenia	Front Psychiatry 10 (567) ,1 - 10,08,2019	統合失調症では社会活動、知能指数(Q)、日常生活技能、社会機能が障害される。社会活動はその中で高次な転帰となる。本研究には結合失調症患者の社会活動の転帰に対して各要因や精神症状、薬物療法が軽新的にどれだけの効果を示すが評価した。65人の場合失調症患者を恐時点(ペースライン(TI)とフォローアップ時点(T2))で評価した。6、日常生活技能、社会機能に対して200億で有意に改善し、社会活動と経時のにこの相関を示いた。特神症は対社対象と負の相関を示した。社会活動の報酬的対象をは社会機能の変化と独立して正の相関を示し、特に対人コミュニケーションと正の相関を示し、他の要因の解析的な変化は社会機能の変化と独立して正の相関を示し、特に対人コミュニケーションと正の相関を示し、他の要因の解析的な変化は対急制に直接的な影響はなかった。本研究結果に基づき、社会活動はその他の要因よりも、社会機能により強く影響されることが判明した。
Oya Kazuto, Sakuma Kenji, Esumi Satoru, Hashimoto Yasuhiko, Hatano Masakazu, Matsuda Yuki, Matsui Yuki, Miyake Nobumi, Nomura Ikuo, Okuya Makoto, Iwata Nakao, Kato Masaki, Hashimoto Ryota, Mishima Kazuo, Watanabe Norio, Kishi Taro	Efficacy and safety of lithium and lamotrigine for the maintenance treatment of clinically stable patients with bloolar disorder. A systematic review and meta-analysis of double-blind, randomized, placebo-controlled trials with an enrichment design.	Neuropsychophar macology reports 30 ,241 - 246,09,2019	リチウムかラモトリギンで臨床的に安定している成人双極性障害患者において、その薬物療法を継続すべきであるかは十分には権立されていない。この条約的レビューとメタ解析は、臨床的に安定した成人双極性障害患者のリチウムとラモトリギンにる連絡情感法の効果と安全性を押他した。リチウムかラモトリギンに急性期では最反応のあった思かみを選んだ強化デザインで、二重盲検、無作為割付、フラセが式物試験のみを組み込んでメタ銀術を実施した。2018年11月15日以前の報告を検索し、主要押価目目は試験が予めあらかる気力エピットドによる再発をした。リチウムに関する2つの試験と、ラモトリギンに関する4つの試験が集まされ、商業剤ともにあらゆる気力エピソードによる再発率と、全ての原因による中断手を満らすのにフラセポよりも優れていた。商業剤は臨床的に安定した成人双極性障害患者の再発予防に有益であることが示された。
Takaesu Y, Watanabe K, Numata S, Iwata M, Kudo N, Oishi S, Takizawa T, Nemoto K, Yasuda Y, Tagata H, Tsuboi T, Tsujino N, Hashimoto N, Matsui Y, Hori H, Yamamori H, Sugiyama N, Suwa T, Kishimoto T, Hishimoto A, Usami M, Furihata R, Iwamoto K, Fujishiro H, Nakamura T, Mizuno K, Inagaki T, Katsumoto E, Tomita H, Ohi K, Muracka H, Atake K, Iida H, Nagasawa T, Fujita J, Yamamura S, Onitsuka T, Murata A, Takayanagi Y, Noda H, Matsumura Y, Takezawa K, Iga J, Ishihashi K, Ogasawara K, Yamada H, Inada K, Hashimoto R.	Improvement of psychiatrists' clinical knowledge of the treatment guidelines for schizophrenia and major depressive disorders using the "Effectiveness of Guidelines for Dissemination and Education in psychiatris treatment (EGUIDE)" project a nationwide dissemination, education and evaluation study.	Psychiatry Clin Neurosci 73 (10), 642 - 648,10,2019	研究グループは、精神料医療の語及と教育に対するガイドラインの効果に関する研究(EGUIDEプロジェクト)を2016 年に開始し、43大学と130以上医療の医療機能が参加する国内外に例がない治療ガイドラインの効果を検証する研究を 行ってきた。EGUIDEプロジェクト(精神科医療の語及と教育に対するガイドラインの効果に関する研究: Effectiveness of GUIdeline for Dissemination and Education in scytchiatric treatment)とは、精神科医に対し てガイドラインの教育の講習を行い、ガイドラインの効果を検証する研究を行うものである。EGUIDEプロジェクトで は、統合失調を敷始療ガイドライン(日本の大神経精神変更多)及びうつ場か構力ドライン(日本つみ食)の構習 をそれぞれ1日行い、その講習では、午前中にガイドラインの内容についての講義を行い、午後に症例のグループティス カッションを行って、ガイドラインの実際の使い方、ガイドラインの授界、ガイドライとはない診療に対しる大力である。 フいて学ぶものである。EGUIDEの講習を行い、ガイドラインの理解をについては、商講習において講習後に顕著な理解 度の向上が認められた。

著者、発表者等	論文名、演題名等	掲載誌、学会等	成果又は特記事項
Baba M. Yokoyama K. Seiriki K. Naka Y. Matsumura K. Kondo M. Yamamoto K. Hayashida M. Kasai A. Ago Y. Nagayasu K. Hayata-Takano A. Takahashi A. Yamaguchi S. Mori D. Ozaki N. Yamamoto T. Takuma K. Hashimoto R. Hashimoto H. Nakazawa T.	Psychiatric-disorder-related behavioral phenotypes and cortical hyperactivity in a mouse model of 3q29 deletion syndrome.	Neuropsychophar macology, 44 (12) ,2125 - 2135,11,2019	とト3a/29領域のゲノムコビー数変異(CNV)(3a/29欠失)は、統合失調底、自開スペクトラム症、知的能力障害等の精神疾患等、多様な疾患の発症に大きく寄与することが示唆されているが、その分子病態についてはほとんど不明である。3a/29欠失が触りる病態を、分子機能レベルで明らかにすることを目的として、本稿文では、ヒト9a/29領域に対応するするがよりが親に入市の文を導入したモナルマウス(Dドイマウス)は特殊した。ロドイマウスは依持を他的脳重量といった表現型のみならず、統合失調底、自耐スペクトラム症と関連しているそれでよっている大きないのであった。本研究で開発したDF/マウスは、精神疾患の分子病態を明らかにする上で重要な知見を与えるものであると考えられる。
Matsumura K. Baba M. Nagayasu K. Yamamoto K. Kondo M. Kitagawa K. Takemoto T. Seiriki K. Kasai A. Ago Y. Hayata-Takano A. Shintani N. Kuriu T. Iguchi T. Sato M. Takuma K. Hashimoto R. Hashimoto H.	Autism-associated protein kinase D2 regulates embryonic cortical neuron development.	Biochem Biophys Res Commun 519 (3), 626 - 632,11,2019	自開スペクトラム症は、頻度の高い神経発達障害の一つであるが、その原因や病態の分子メカニズムは未だ不明な点が多い。近年、患者の両親にはなく、患者に生じるde nowe突然変異が自開スペクトラム症患者から動きく同定されてあいる あいり 自制スペクトラム症患者が必要な必要なが認定など、患者の必要ながある。 では、一般などの変異が固定な呼吸の多代と違伝子を抑りを関係する。 あることを変異が固定として、また、自制スペクトラム症患者を関係して、その経典である。 おようなとなるである。 からかにひた、また、自制スペクトラム症患者を取り変異とより PKD2のキナーゼ活性が狙害されることが 明らかになった。本規則な、PKD2の変異による機能異常が神経細胞の発達異常、ひいては自制スペクトラム症の発症に繋がることを示唆している。
van Ero Theo G M, Walton Esther, Hibar Derrek P, Schmaal Lianne, Jange Werhao, Glahn David C, Pearlson Godfreo D, Yao Nalin, Fikurasa Messaki, Hashimoto Proto, Godan Noshiro, Yamenon Hidensea, Clark Vincent P, Mueller Bronn A, de Zwarte Sonia M C, Ophoff Roel A, van Haren Neetlie L M, Andressen OH, A Gurthor II, P. Gruber Oliver, Kraemer Bernd, Richter Ania, Calhoun Vince D, Cresco-Facoron Loughland Camen, Catts Stanley, Fullerton Janice M, Green Melissa J, Henslens Frans, Jablensky Assen, Mowry Bryan J, Pantels Christos, Qud? Yam S, Stall Ulinis, Scott Hoohen J, Clarin M, Murray J, Seal Merc. Tooney Paul A, Passee Paul E, Cooper Gavin Steamon Murray J, Seal Merc. Tooney Paul A, Passee Paul E, Cooper Gavin Steamon Murray J, Seal Merc. Tooney Paul A, Passee Paul E, Cooper Gavin Steamon Murray J, Seal Merc. Tooney Paul A, Passee Paul E, Cooper Gavin Steamon Braine H, Potkin Steven G, Preds Adrian, Fan Feneme, Erhich Stefan, King Mergaret D, Delbaran Lieuw, Velleman Dick J, Assopan Francesca, Banal Nerisa, Ge Rossi Petro, Jorn Meraneska, Prens Fabrico, Spelletta Gentriano, Porrarch Harrisberger Fabierne, Riecher-Friseler Anits, Smieskova Renata, Alpert Harrisberger Fabierne, Riecher-Friseler Anits, Smieskova Renata, Alpert Harrisberger Fabierne, Riecher-Friseler Anits, Smieskova Renata, Alpert Kathynn L Bertolin Alessandro, Norrivo Aurona, Di Gorgo Armabella, Nelson Erma, Merc Androw R, Yun Jeh Yean, Garnin Norriso R, Libedon Bergman Heleine, Pivott Lena, Spos Pedro G P, Serna Maurico L Zanetti Marcus V, Hoschi Cyll, Socch Antonin, Spaniel Filia. Tomeck David Marcha A, Johannshad Neda, Thompson Paul M, Turner Jessica A, Guthenn Boris A, Jahanshad Neda, Thompson Paul M, Turner Jessica A.	Reply to: New Meta- and Mega-analyses of Magnetic Resonance Imaging Findings in Schizoohrenia: Do They Really Increase Our Knowledge About the Nature of the Disease Process?	Biological psychiatry 85 (7), e35 - e39,04,2019	自剛症患者から最も多くの突然変異が同定されているものの、その機能がほとんどわかっていないPogo transposable element with zinc finger domain (POGZ)タンパク質が脳の正常な発達に必要であることを発見しました。また、その突然変異によるPOGZの機能低下によって、マウス脳の発達期における神経機能の発達。および自興産と関連する社会性行動に障害を与えることを新たに見い出しました。図1・目剛症の原理は大きに見い出しました。図1・目剛症の原理は大きに明な点がほとんどであり、治療薬は存在しないことから、治療戦略の開発が緊急の課題である現状において、目側症と関連する脳高次機能異常の分子メカニズムを見い出したことは、精神医学/神経科学の領域において極めて注目される成果です。今後、目剛症の新たな治療戦略の時発に発展することが期待されます。
Nemoto K, Shimokawa T, Fukunaga M, Yamashita F, Tamura M, Yamamori H, Yasuda Y, Azechi H, Kudo N, Watanabe Y, Kido M, Takahashi T, Kolke S, Okada N, Hirano Y, Oritsuka T, Yamasue H, Suzuki M, Kasai K, Hashimoto R, Arai T.	Differentiation of schizophrenia using structural MRI with consideration of scanner differences: A real-world multisite study.	Psychiatry Clin Neurosci 74 (1), 56-63. 01,2020	報経画像研究により除合生期症患者の灰白質体車が様々な領域で減少していることが明らかになっており構造MFが紛合 失調定の診断に有用とされてきたが多能設所では扱われていた。そでてVBN解析によってMFN装置を書きた。 失調定の診断に有用とされてきたが多能設所では現めれていた。そで、VBN解析によってMFN装置の返りを考慮した。 第6 と続合失調症患者を区別するモデルを評価した。541人の統合失調症患者と1252人の確常者で3DT1振像により 灰白質を抽出し55人の患者と95人の健常者で区別に必要なFOOを生成し、残りの破終者では各FOO保障を求め、ABMN 装置について生態、性別、認識的体積を考して区別する特徴を計算に、AUCは3074~084で工程度は69%~ 76%。全サンブルでのFOO保解がではAUCは3076で正確度は73%であった。多施設の異なるMFN装置から得られた構造 画像を用いて健常と続合失調症をかなりの単で区別でき、臨床場面での統合失調症の診断に神経画像技術を適用するのに 寄与し得る。
Matsumura K, Seiriki K, Okada S, Nagase M, Ayabe S, Yamada I, Furuse T, Shibuya H, Yasuda Y, Yamamori H, Fujimoto M, Nagayasu K, Yamamoto K, Kitagawa K, Miura H, Gotoda-Nishimura N, Igarashi H, Hayashida M, Baba M, Kondo M, Hasebe S, Ueshima K, Kasai A, Ago Y, Hayata-Takano A, Shintari N, Iguohi T, Sato M, Yamaguchi S, Tamura M, Wakana S, Yoshiki A, Watabe AM, Okano H, Takuma K, Hashimoto R, Hashimoto H, Nakazawa T,	Pathogenic POGZ mutation causes impaired cortical development and reversible autism-like phenotypes.	Nat. Commun 11 (1), 8859, 02,2020	自開症患者から最も多くの突然変異が同定されているものの、その機能がほとんどわかっていないPogo transposable element with zinc finger clomain (POGZ)タンパク質が脳の正常な発達に必要であることを発現しました。また、その突然変質によるPOGZの機能低下によって、マウス脳の発達期における神経細胞の発達、あよび自動症と関連する社会性行動に練習を与えることを新たに見い出しました。図1。目閉症の発症の原因は未だ不明な点がほとんであか、治療薬は存在しないことから、治療戦略の開発が緊急の課題である現状において、目閉症と関連する脳高次機能質常の分子メカニズムを見い出したことは、精神医学/神経科学の領域において極めて注目される成果です。今後、目閉症の新たな治療戦略の開発に発展することが期待されます。
Yasuda Y, Okada N, Nemoto K, Fukunaga M, Yamamori H, Ohi K, Koshiyama D, Kudo N, Shiino T, Morita S, Morita K, Azechi H, Fujimoto M, Miura K, Watanabe Y, Kasai K, Hashimoto R	Brain morphological and functional features in cognitive subgroups of Schizophrenia.	Psychiatry Clin Neurosci 74 (3), 191-203, 03,2020	認知機能低下に応じて圏別化された統合失調症の2群(悪化群、保存群)と健常対照群で脳の構造と機能的接続性を比較 しだ。悪化群の総皮質反性質体積、右筋腫状包、左眼窩回、右三角側、左上側頭回、左島の体積、および両側の質算 が、健常対照群と保存群に比べて小さかった。また、統合失調症面軽の左側数を、右破根および充進球の体積が煙業内 解除に比べて大き、、両側無馬、左前中心回、右衛側中前頭回、両側上前頭回の体積がいたかった。悪化群では、推床と 近新囲の脳領域の間に健常群に比べて高い接続性があったが、保存群では明確ではなかった。悪化群では、推床と 近新囲の脳領域の間に健常群に比べて高いる形で、大保存群では明確ではなかった。また旅谷失調に割て順 後上・中前回回との間の接続が悪化肝に比べて高かった。これらの経実は、認知機能が悪化した統合失調を指 遠・機能的な脳の異常があることを示し、このサブグループが新しい診断や治療戦路のための脳病態生理学を解明するための有用なパイオタイプになり得ることを示唆する。
Shiino T, Miura K, Fujimoto M, Kudo N, Yamamori H, Yasuda YJkeda M, Hashimoto R.	Comparison of eye movements in schizophrenia and autism spectrum disorder.	Neuropsychophar macol Rep 40 (1), 92-95, 03,2020	本研究では、統合失調症と自閉スペクトラム症の患者の眼球運動異常の類似点と相違点を理解することを目的とする。注 視。追跡眼球運動、プリーピューイング課題を用いて得られた。統合大調症患者、自閉スペクトラム症患者および農業核 験者の眼球運動的特徴を比較した。その経験、2.1個の眼球運動特徴に払いて動合失調症既と健業者も同能に統計的に有 意乃差が認められたが、自閉スペクトラム症群と健業対照群の間に有意是はなかった。また、フリーピューイングと追跡 眼球運動から得られた5つの眼球運動特性で、統合失調症と自閉スペクトラム症の患者で有態差が認められた。本結果 は、自閉スペクトラム症の眼球運動異常が統合失調症と質なり、この研究で用いられた眼球運動タスクが統合失調症の 球運動異常の検出に有効であることを示唆する。
Sønderby IE, Gústafsson O, Doan NT, Hibar DP, Martin-Brevet S, Abdellaoui A, Ames D, Amunts K, Andersson M, Armstrong NJ, Bernard M, Blackburn N, Blansero J, Boonsma D IB: Pathen J, Brattabak HR, Brodaty H, Brouwer RM, Bülow R, Calhoun V, Caspers S, Cavalleri G, Chen CH, Cichon S, Cuirolini S, Corvin A, Crespor-Facorro B, Curran JE, Dale AM, Dalvie S, Dazzan P, de Geus EU, Ge Zublicaray Gl, de Zwarte SMC, Delanty N, den Braber A, Desrivi ères S, Donchoe G, Draganski B, Ehrlich S, Esposeth T, Fisher SE, Franke B, Frouin V, Fukunaga M, Gareau T, Glahn DC, Grabe H, Groenewold NA, Haavik J, H å berg A, Hashimoto R, et al	Dose response of the 16p11.2 distal copy number variant on intracranial volume and basal ganglia.	Mol Psychiatry 25 (3): 584-602, 03:2020	大きな再発性コピー数多型(CNV)キャリアは神経発達層書を発症するリスクが高く、16p112適位CNVキャリアは自閉スペクトラム症、総合失機症に罹患しやすい。そこで大規模脳MFIは同研究体のENGMA-CNVから16p112適位の欠失多型キャリア12人と重複多型キャリア12人の皮質下脳体構を6882人の非キャリアと比較した結果、頭面的体構を、果状核、淡塵球の上が影響が自体的で、上で製造物の相様で、一般に大きな場所が一致した。2つのデータセットを合わせると側坐核、足対核、淡塵球、一般的および頭面内体構で有意な負の用量反応があった。全検査のは非キャリアの声がといるというというに、自然は16p112 遺位CNVの影響に関する最初の脳MFI研究で、皮質下の脳構造に対する影響を実証し神経発達障害の神経病理学的背景を示唆した。
Grasby KL, Jahanshad N, Painter JN, Colodro-Conde L, Bralten J, Hibar DP, Lind PA, Pizzagalli F, Ching CRK, McMahon MAB, Shatokhira N, Zsembik LCP, Thomocoulos SI, Zhu AH, Strike LT, Agartz I, Alhusaini S, Almeda MAN, Alness D, Amlen IK, Andersson M, Ard Christica St. Selbey-Cen A, Alkins JR, Bernard M, Brouwer RM, Hashimoto R, et al	The genetic architecture of the human cerebral cortex	Science 367 (6484), eaay6690, 03.2020	大脳皮質は私たちの複雑な認知能力の根底にあるが、人間の皮質構造に影響を与える特定の遺伝子座についてはほとんど 知られていない。そこで、皮質構造に影響を与える遺伝的変異を向正するために、51.665人の脳磁気共鳴画像データの グッムフィド関連メタ解析を表面にした。皮質を45.240の接対の機能特化領域の表面様と平均皮質等を解析した。1950年 日本の大阪の大阪の大阪の大阪の大阪の大阪の大阪の大阪の大阪の大阪の大阪の大阪の大阪の
Ono, C. T.Yu. Z.Kikuchi, Y.Kunii, Y.Hino, M.Matsumoto, J.Nagaoka, Alto, Jlwasaki, Y.Hagihara, H.Miyakawa, T.Yoshida, M.Saito, Y.Niwa, S. I.Yabe, H.Kakita,A.Tomita, H.	Minimal amount of tissue-based pH measurement to inprove quality control in neuropsychiatric post-mortem brain studies	Psychiatry and clinical neurosciences 05,2019	組織pHとFNA integrityは神経精神疾患のヒト死後脳研究における重要な品質管理指標である。しかしpHは組織量の制限があるのであまり測定されてこなかった。この研究では、限り場のヒト死後脳組織量での組織pH評価のフロトコルを開発し、マウス脳組織を用いた3倍実験に基づいて20個機と水分の強切な割合を決め扱いと標準的な型の52例の死後脳組織をヌクレアーゼフリー水でホモジェナイズUnlab UltraマイクロpH電極を用いてpHを測定した。最か容量による新たなプロトコルに多りにpH測定値は、標準的なプロトコルに多つトコルに対した。最か容量による新たなプロトコルに多いにpH測定した。現在の標準プロトコルの10分の1の組織量で、死後脳組織の正確な意を評価し、以後の解析に供することができることがのかった。このプロトコルによって交絡因子を減少させ、死後脳研究の生物学的現象の検出を改善させ得る。
Ohnishi, T.Balan, S.Toyoshima, M.Maekawa, M.Ohba, H.Watanabe, A.Wayama, Y.Fujita, Y.Tan, Y.Hisano, Y.Shimamoto-Mitsuyama, C.Nozaki, Y.Esaki, K.Nagaoka, A.Matsumoto, J.Hino, M.Mataga, N.Hayashi-Takagi, A.Hashimoto, K.Kunii, Y.Kakita, A.Yabe, H.Yoshikawa, T.	Investigation of betaine as a novel psychotherapeutic for schizophrenia	EBioMedicine 06,2019	ペタインはさまざまな生物学的ストレスに対して作用することが知られており統合失調症患者では低下している。この研
Kunii Y. Hino MMatsumoto J.Nagaoka A.Nawa H.Kakita A.Akatsu H.Hashizume Y.Yabe H.	Differential protein expression of DARPP- 32 versus Calcineurin in the prefrontal cortex and nucleus accumbens in schizophrenia and bipolar disorder.	Scientific Reports 9 (1) .14877 - 14877,10,2019	DARPP-32ドバミン作動性シグナル伝達を調整する。カルシニューリン(CaN)はドバミン作動性シグナル伝達経路の下派で総リン酸化によりDARPP-32を不活性化する。統合失調症、双極性障害、健業者の49例の死後駆サンブルで前腎筋皮質(PFC)および側坐核(NAc)におけるDARPP-32とCaNのタンパツ質発現レベルをELSA法で調定しドバミシステム調連分チのSNPsも制定した。総合失調症基本のFFCでは、DARPP-32の発現が有意に乗がしていた。DARPP-32とCaNの発現の相関解析では健業群と統合失調症群のFFC、統合失調症群の側坐核で正の相関がみられPFCではDARPP-32/CaNの発現には統合失調症で有態に低く前述のSNPsでタンパン質発現を予測し何ることがかった。統合失調症と双陸性障害の病因の背景にある潜在的な分子メカニズム、精神疾患の達いを反映していると思われた。

著者、発表者等	論文名、演題名等	掲載誌、学会等	成果又は特記事項
Morita K. Miura K. Fujimoto M. Yamamori H. Yasuda Y, Kudo N. Azechi H. Okada N. Koshiyama D. Ikeda M. Kasai K. Hashimoto R	Eye movement abnormalities and their association with cognitive impairments in schizophrenia.	Schizophr Res 209.255 - 262.07,2019	総合失調症における認知機能と破球運動の異常との関係を明らかにするために、眼球運動の特徴とウェクスラー成人知能 検査(第3版)のスコアの間の関連整折を行った。その結果、統合失調症では、写真や結を自由に見る際のスキャンパス 長(視線の総移動距離)が行列推理と行号のスコアと正相関し、機等者では単結よび認う環とのスコアと相関があると とがわかった。さらに、統合失調症で見られたスキャンパス長と行列推理との間の相関は、投棄量や職性をなどとの交絡 因子を考慮しても有態であった。この結果は、スキャンパス長と利覚熱合の尺度である行列推議の二つに共通の認知プロ セスが存在し、スキャンパス長が長い程、知覚統合を要するタスクにおいて有利に働くことを示唆している。
Ono Seiji, Miura Kenichiro, Kawamura Takashi, Kizuka Tomohiro	Asymmetric smooth pursuit eye movements and visual motion reaction time.	Physiological reports 7 (14) ,e14187 - ,07,2019	遊跡眼球運動は動きの方向によって非対称性を示すことが知られている。遊跡眼球運動の開始時の眼の動きには、視覚運動別覚に関与するMicdle TemporalMTT野とMedial Sperior TemporalMSTT野が関係すると考えられている。本研究では、協師眼球運動の開始時の眼の動きにおける方向の非対称性が視覚運動対策と関連するからかを示すことを目的と考る。19人の健康は男性患者を持つ、数、特殊を用いて水井可向からかなご動態球運動的を維持するよう、現態運動、知覚の反応時間(FT)と続った。現態運動が見か反応時間(FT)における方向の非対格センドプスと自動機球運動の方向対対性の側には有意な相関が認められた。本部果は、遊跡開始と視覚連動打て共通の神経回路が限与することを示唆する。
Morita Kentaro, Miura Kenichiro, Fujimoto Michiko, Yamamori Hidenaga, Yasuda Yuka, Kudo Noriko, Azechi Hirotsugu, Okada Nachiro, Koshiyama Daisuke, Shiino Tomoko, Fukunaga Masaki, Watanabe Yoshiyuki, Ikeda Manabu, Kasai Kiyoto, Hashimoto Fiyota	Eye-movement characteristics of schizophrenia and their association with cortical thickness.	Psychiatry and clinical neurosciences 73 (8) ,508 - 509,08,2019	総合失調症では根球運動が障害されることが知られているが、その障害の神経基盤には未解明な部分が多く残されている。本研究では、総合失調症の限球運動特徴と大脳皮質厚との関連について検討を行った。破球運動指標として、フリーとフェーンを実施されるように発見しまった。 ビューンを実施されるようには、大型では、大型では、大型では、大型球型やのより、機能を使っていません。 「関係を表し、コンドに登し、一、課題中の水中に運動が起き、主動球型やのより、機能を持ち続いた。 用いて産出るれただされる。他の水型で緩和が必要が最近の水型を表した。他の水中に重かなのでは、 用いて産出るれただされる。他の水型で緩和が必要が最近の水型を表した。他の本地では、 用いて産出るれただされる。他の水型で緩和が必要が最近の水型をあった。 ア及びスキャンバス長と左下前頭回手番組皮質摩の間に有意な正相関が認められた。本地東は、統合失調症の眼球運動特 数に関連する神経基盤を示唆する所見である。
Horikoshi S, Kunii Y, Matsumoto J, Gotoh D, Miura I, Yabe H.	Does Treatment Response With Antidementa Drugs After 6 Months in Alzheimer's Disease Predict Long-term Treatment Outcome?	J Clin Psychopharmacol 40 (2), 195-197	アルツハイマー病(AD)は幅性の推行性疾患で家族や介護者に負担をかけるので病状進行を遅らせることは重要である。 早期治療反応性と、その後の治療効果の関係は新金生調症と大うつ病性障害で報告されている。そこでADの6か月(M)時点での抗認知症薬の治療反応性とその後の治療効果について検討した。推定ADと診断された194人のAD患者を組み込み、架件を満たした110人の患者でMMSEの6 M、12 M、および24 Mのスコアを測定し、反応能と無反応は 江境した。反応群はこれまでの報告で各 M後のMMSEの98 に均穏終起。同じかそれ以下の議合と定義した。反応する対象で各 M後のMMSEの98 に均穏終起。同じかそれ以下の議合と定義した。 ベースラインからのMMSEの変化は12Mと24Mともに反応様で有意に少なかった。 結論として、抗認知症薬での6Mでの治療反応性が12 Mと24 Mでの治療効果を予測した。従って治療反応性は6Mことに評価し検討をするべきと思われる。
Takaesu Y, Utsumi T, Okajima I, Shimura A, Kotorii N, Kuriyama K, Yamashita H, Suzuki M, Watanabe N, Mishima K.	Psychosocial intervention for discontinuing benzodiazepine hypnotics in patients with chronic insomnia: A systematic review and meta-analysis.	Sleep Med Rev.	
Yoshiike T, Dallaspezia S, Kuriyama K, Yamada N, Colombo C, Benedetti F.	Association of circadian properties of temporal processing with rapid antidepressant response to wake and light therapy in bipolar disorder.	J Affect Disord.	
Yoshiike T, Honma M, Ikeda H, Kuriyama K	Bright light exposure advances consolidation of motor skill accuracy in humans	Neurobiology of Learning and Memory	
Yoshiike T, Dallaspezia S, Kuriyama K, Yamada N, Colombo C, Benedetti F	Association of circadian properties of temporal processing with rapid antidepressant response to wake and light therapy in bipolar disorder	Journal of Affective Disorders	
Kawamura A, Yoshiike T, Yoshimura A, Koizumi, H, Nagao K, Fujii, Y, Takami, M, Takahashi, M, Matsuo, M, Yamada, N, Kuriyama, K	Bright light exposure augments cognitive behavioral therapy for panic and posttraumatic stress disorders: a pilot randomized control trial.	Sleep and Biological Rhythms	
Yoshiike T, Kuriyama K, Nakasato Y, Nakamura M	Mutual relationship between somatic anxiety and insomnia in maintaining residual symptoms of depression	Journal of Behavioral and Cognitive Therapy	
Kitamura S. Takahashi M, Mishima K	Sleep problem but not chronotype is associated with retirement from shift work a cross-sectional retrospective study	Sleep and Biological Rhythms 17 (3) .331 - 337,06,2019	地域在住交代性勤務経験者97名を対象にクロノタイプ、睡眠障害が交替制勤務への短期(主観的適向度)および長期 (不適応退職)適応性と関連するか後方視的に調査した。過去の交代性勤務経験者では、不適応退職群がそれ以外よりも 低い主観的適応を表いたが、クロノタイプに差は視られなかった。さらに、ロジスティック回帰分析では、早続製度 交代勤務からの不過応退職の有意な予測因チとして無出されたが、クロノタイプはそうではなかった。本研究の知見は、 長期的な観点から見ると、夜型クロノタイプにみられる夜間の眠気への耐性よりも、睡眠状態の管理を検討することが重 要であることを示唆する。
Komada Y, Okajima I, Kitamura S, Inoue Y	A survey on social jetlag in Japan: a nationwide, cross-sectional internet survey	Sleep and Biological Rhythms 17 (4),417 - 422,10,2019	日本人の大集団におけるソーシャルジェットラグ(S.J.)の有病率を明らかにすることを目的として、10,000人のモーターを対象にWebペースのミュンへ、版クロノタイプ質関集(MCTG)日本語版の評価を行った。 S.J. は各参加者の平日の睡眠中央特別を、休日の睡眠中央特別を、休日の睡眠中央特別を、休日の睡眠中央特別を、休日の時間の日の世眠中の事態:45,1±13,4歳)において、絶対的S.J. (S.J.Labs)の平均±SD値は091±0,89時間であり、1時間を超えるS.J.Labsの割合は40.1%であった。S.J.Labsは、年齢が上がるに従って減少した。結論として、平日と休日の間での睡眠行動の違いは多数の参加者で認められ、特に夜型傾向の強い若年成人においては平日に蓄積された睡眠不足を補うために休日の代償的な睡眠症長が生じていることが示唆された。
Enomoto M. Kitamura S. Tachimori H. Takeshima M. Mishima K	Long-term use of hypnotics: Analysis of trends and risk factors	General Hospital Psychiatry 62,49 - 55,01,2020	機能展案の長期処力の危険因子を評価するために、330,000人の診療処方データを用いた後向きコホート研究を実施した。2006年4月から2008年3月の間に順帳を初処方された3981人の患者(男性2382名、女性1599名、年齢403±124歳)を退跡した。対象者のうち、596%が連続2か月間緩軽薬を処方され、対象者の101%が12か月の観察期間全体に渡って即力を受けていた。時間依存型コックス比例・ザード分析では、抗うつ薬の使用、軽振薬の使用、多は大力のよるび高い年齢が、機能薬の長期処方と有意に関連していた(p<001)。 機能薬の長期処方と力価との関連性の分析では、高処方量、高年齢、初診時の診療料が長期処方と有意に関連していた(p<001)。
Abe T, Mishima K, Kitamura S, Hida A, Inoue Y, Mizuno K, Ogata K, Kaida K, Nakazaki K, Motomura Y, Maruo K, Ohta T, Furukawa S, Dinges DF	Tracking intermediate performance of vigilant attention using multiple eye metrics.	Sleep	健常成人16名を対象に38時間の連続覚醒中の眼球指標記録と持続的注意課題 (PVT) の同時記録を実施し、マイクロ サッケード (POM) が新たな注意力の指揮となり得ることを見出した。さらに、POMを他の眼球関連指標と縮合するこ とで、注意力検出の新しいアルゴリズムを開発した。本アルゴリズムでは、従来の手法では追跡できなかった中間レベル の注意力変化の検出が可能となり、覚醒度低下によるヒューマンエラー関連事故予約に応用可能であることが示された。
Miidera H. Enomoto M. Kitamura S. Tachimori H. Mishima K	Association Between the Use of Antidepressants and the Risk of Type 2 Diabetes: A Large, Population-Based Cohort Study in Japan	Diabetes Care	日本医療データセンター (JMDC) の診療処方データを用い、新規発症2型糖尿病リスクと抗うつ薬使用期間および抗うつ薬投与量、糖尿病発症後の抗うつ薬使用と臨床転帰との関連を後方視的に検証した。傾向スコアマッチングにより抗うつ薬処方群と非処方群に各45265人が強付された。抗うつ薬の使用は、期間および用量依存的に糖尿病発症リスクと関連していた(短期使用:aOR=1.27、95%CI-1.16-1.39、長期使用:aOR=3.95、95%CI 3.31-4.72)。抗うつ薬処方を中止または減量した患者ではHbA1c値の低下が認められた。
Yasumura A. Omori M. Fukuda A. Takahashi J. Yasumura Y. Nakagawa E. Koike T. Yamashita Y. Miyajima T. Koeda T. Aihara M. Inagaki M	Age-related differences in frontal lobe function in children with ADHD	Brain and Development 41 (7) .577 - 583,08,2019	本研究では注意欠如・多動性障害(ADHD)児における前頭前野(PFC)の発達的変化を解明することを目的とした。 299例の小学生が参加し、抑制課題中のPFCの活動を近赤外分光法を用いて計測した。定型発達(TD)児(n=140) およびADHD児(n=67)を解析した。行動レベルでは、低学年ではTD児と比較してADHD児の干渉率が高から、 高学年になると同様で差異はあられなくなった。PFCの活動について、TD児と比較してADHD児はすべての年齢層 で石および中央の活動低下を示した。総果から、抑制課題中のPFCの活動はADHD児の年齢によって変化することが示唆され、左のPFCは代償的な役割を果たすことが示唆された。
Saito Y, Kaga Y, Nakagawa E, Okubo M, Kohashi K, Omori M, Fukuda A, Inagaki M	Association of inattention with slow- spindle density in sleep EEG of children with attention deficit-hyperactivity disorder.	Brain and Development 41 (9) ,751 - 759,10,2019	注意欠陥多動症(ADHD)児における前頭部紡錘波と注意機能との関係を明らかにした。対象は、ADHD児21名と定型 発達児(TDC)18名。前頭部壁位の12Hz種転筋錘波に着自し、パワースペクトル解析行い、前頭部紡錘波と持続注意 譲渡(CPT)の反応時間のばらつきを比較検討したところ、ADHDの12Hz紡錘波のパワー値は、TDCより高く、反応 時間のばらつきと正の相関を認めた。前頭部紡錘波は、ADHD児の不注意のパイオマーカーとして有用である可能性が ある。
Kita Y, Ashizawa F, Inagaki M	Prevalence estimates of neurodevelopmental disorders in Japan: A community sample questionnaire study	Psychiatry and Clinical Neurosciences 10,2019	本邦の発達障害の有病率を推定するために、3852名の小児の症状を保護者および教員に調査した。ADHDやASDなどの推定有病率が、脱存の報告よりも高いとともに、保護者と教員との間で評価が乖離することが示された。本研究はコミュニティペースで有病率を弾出した数少ない知見であるとともに、有病率を適正に算出する必要性を示唆するものである。
Kita Y, Ashizawa F, Inagaki M	Is the motor skills checklist appropriate for assessing children in Japan	Brain and Development 41 (6): 483-489, 2019.6.	発達性協調運動障害の診断に向けた症状チェックリストの開発研究。3852をの小児を対象に国際基準のチェックリストを用いて、運動機能を個別評価した。チェックリストの啓轄性・妥当性を示すとともに、日本人小児用のカットオフ値を見出した。同障害の診断手順の構築に貢献するとともに、治療効果判定などの介入研究に今後活かされる基礎知見である。

著者、発表者等	論文名、演題名等	掲載誌、学会等	成果又は特記事項
Ueda R. Takeichi H. Kaga Y. Oguri M. Saito Y, Nakagawa E. Maegaki Y, Inagaki M	Atypical gamma functional connectivity pattern during light sleep in children with attention deficit hyperactivity disorder	Brain and Development 42 (2) ,129 - 139,02,2020	注意欠切多動症(ADHD)のバイオマーカーを見つけるため。ADHDと正常発達児(TDC)のノンレム維眠stage1の脳波の機能連結性を比較した。ADHDU小見とTDCを対象に19チャネル脳波(10/20法)を測定し、8-7の各周波数帯域のPhase lag index/PLJ を計測した。7PLIは中心接頭部を中心にADHDで有意に低い。?PLIは、質問紙の多動の得点が高いほど、持機処理課題の反応時間が遅いほど下がる。?PLIはADHD診断補助ツールとなる可能性があり、低い?PLIは、より重症なADHDであることを示す。
Suzuki W. Seno T, Yamashita W, Ichinohe N, Takeichi H, Palmisano S	Vection induced by low-level motion extracted from complex animation films	Experimental Brain Research 237 (12) ,3321 - 3332,12,2019	自己身体運動知覚(ベクション)への視覚運動情報の寄与について調べるだめ、アニメーションクリップと、視覚運動情報のおが含まれるオプティカルフローを抽出した動画で、誘導されるベクションを比較した。ベクションの持続時間と強度はオリジナル動画が中・高次の情報を削除したオプティカルフロー動画を上回ったが、潜時は変わらなかった。低次の視覚運動情報はベクションの誘導に、中・高次の情報は維持と強化に重要と思われる。
Ueda R. Matsuda H. Sato N. Iwasaki M. Sone D. Takeshita E. Motohashi Y. Ishiyama A. Saito T. Komaki H. Nakagawa E. Sugai K. Sasaki M. Kaga Y. Takeichi H. Inagaki M	Alteration of the anatomical covariance network after corpus callosotomy in pediatric intractable epilepsy	PLoS ONE 14 (12) ,e0222876 - ,12.2019	脳梁離断術(CC)の発作減少効果の神経基盤の明らかすることを目的とした。 【方法】脳構造MPI画像を用いた灰白質 ネットワークを、手術前後で検討した。手術時平均年齢26歳の21名のCC群と年齢、性別を一致させた正常対照群を比 較した。 【結論】患者の局所灰白質ネットワークでは修修に大脳内側構造の連続性が低下し、ハブが対照群と同部位に出 現した。また、ランダム攻撃に対するネットワークの頑健性がCC後に低下した。
Kitamura Y, Kita Y, Okumura Y, Kaga Y, Okuzumi H, Ishikawa Y, Nakamura M, Inagaki M <sup>;</sup>	Discrepancy between musical ability and language skills in children with Williams syndrome	Brain and Development 42 (3) ,248 - 255,01,2020	Williams症候群児における音高弁別能力と言語スキルの発達的関係について音高弁別課題を用いて調べた。その結果、彼らの音高弁別能力は言語スキルが低い時期には想定されるよりもあいが、一定の言語スキルを獲得した後ではそこから想定されるよりも低くなることが示された。これらの無限は、WS児における非定型な音楽能力と言語スキルとの発達的関係を示すものであり、WS別に音楽能法・教育を実施する前に、言語スキルや他の認知能力と併せて音楽能力を評価することの重要性を示唆している。
Yasuma, N. Watanabe, K., Matsunaga, A., Nishi, D., & Kawakami, N	Personal values in adolescence and suicidality: a cross-sectional study based on a retrospective recall	BMC Psychiatry 19 (1) ,214 - 214,07,2019	思春期は、こころも身体も多様に変化し、将来の自分を形成するための重要な時期である。思春期の健康とwellbeing (幸福)への投資は、現在、将来、そして彼らの子ともにおける3階の配当になることが知られている。思春期に家族や 友人などの身近なんを大切にする者は、成人期の自殺金融と負の関連を下した。思春期に、身近な人を大切にすることの 重要性について検討することは、成人期における自殺金速の発症予防に有用かもしれない
Yasuma N, Watanabe K, Iida M, Nishi D, Kawakami N	Personal values in adolescence and psychological distress in adults: A cross-sectional study based on a retrospective recall	PLOS ONE 14 (11) ,e0225454 - e0225454,11,201 9	思春期主体価値と成人期の心理的ストレスの関連について思い出し法による横断研究を行った。 思春期に身近な人を大切にすること、 横極的にチャレンジすることを大事な価値とした人は、 成人期の心理的ストレスの減少と有意な関連を示した
Yasuma N. Narita Z. Sasaki N. Obikane E. Sekiya J, Inagawa T. Nakajima A. Yamada Y, Yamazaki R. Matsunaga A. Saito T. Watanabe K. Imamura K, Kawakami N, and Nishi D	Psychological intervention for universal prevention of antenatal and postnatal depression among pregnant women: protocol for a systematic review and meta-analysis	Systematic Rsviews 8.297 - 297,12,2019	全妊婦を対象にした心理学的介入手法を用いた妊娠期および産後うつ予防に関するシステマティックレビュー、メタ分析のプロトコル論文である
Osumi T	Mediating role of attenuated physiological arousal on the association between psychopathic traits and fairness norm violation	Scientific Reports 9 (18053) ,1 - 11,12,2019	不公正な行動をする前に生じる身体の覚醒がサイコパシー特性によって抑制されることを明らかにした。ただし、その身体の覚醒の低さが不公正な行動と移びつくのは動かない場合に限られ、動に対する身体の覚醒の低さはサイコパシーによる規範逸脱を説明できないことを示唆した。
Matsunaga A, Yamaguchi S, Sawada U, Shiozawa T, Fuji C	Psychometric properties of scale to assess the therapeutic relationship	Japanese version (STAR-J) Frontiers in Psychiatry 10,575 - 575,09,2019	地域精神保健サービスにおける専門家と患者の治療的関係を測定するScale to assess the therapeutic relationship ISTAN の日本語版を作成した。専門家城は1因子、患者版は2因子構造が確認され、各々の併存的妥当性、内的整合性、患者板の相検査便類性は良好であった。
Suzuki K, Yamaguchi S, Kawasoe Y, Nayuki K, Aoki T, Hasegawa N, Fujii C	Development and evaluation of Intensive Case Management Screening Sheet in the Japanese population	International Journal of Mental Health Systems 13 - 22,04,2019	本研究は、ケースマネジメントを必要とする患者の判別するために、日本の臨床現場の実情に即した補助ツール (Internsive Case Management Screening Sneet: ICMSS)を開発した。調査の結果、ICMSSは、医師による症状評価などよりもケースマネジメント・サービスの対象者を効率的にスクリーニングすることが可能であった
Yamaguchi S, Ojio Y, Koike J, Matsunaga A, Ogawa M, Tachimori H, Kikuchi A, Kimura H, Inagaki A, Watanabe H, Kishi Y, Yoshida K, Hirooka T, Oishi S, Matsuda Y, Fujii C	Associations between readmission and patient-reported measures in acute psychiatric inpatients: a study protocol for a multicenter prospective longitudinal study (the ePOP-J study)	International Journal of Mental Health Systems 13 (1) ,40 - 40,05,2019	本論文は、国内21精神科病院の急性期病様に新規で入院する患者を対象として、再入院の予測因子を検証するプロシェクトのプロトコル論文である。本研究の第1目的は、退院時の主観的な生活の質に関する尺度得点が退院後1年以内の再入院の有無を予測するかであった。この目的達成するための対象選定、その他のアウトカムや帰露の測定方法、分析計画などを記した
Kanie A, Kikuchi A, Haga D, Tanaka Y, Ishida A, Yorozuya Y, Matsuda Y, Morimoto T, Fukuoka T, Takazawa S, Hagiya K, Ozawa S, Iwata K, Ikebuchi E, Nemoto T, Roberts DL, Nakagome K	The Feasibility and Efficacy of Social Cognition and Interaction Training for Outpatients With Schizophrenia in Japan: A Multicenter Randomized Clinical Trial	Frontiers in Psychiatry 10,589 - 589,08,2019	
Takeda K, Sugawara N, Yamada Y, Nagata T, Kashiwagi H, Kono T, Hirabayashi N, Okada T	Employment-related factors of forensic psychiatric outpatients with psychotic disorders	Neuropsychiatric Disease and Treatment 15,3341 - 3350,12,2019	精神病性障害を有する65歳未満の医療観察法通修対象者を対象に、就労に関連する更因を検討した。処遇中の就労率は 13.8%で、一般精神和の総合失調症患者と同様であった。傷害に比して、より重大な他種の対象行為を行った者は就労 率が低く、物質使用歴を有する者と退院後に家族と同居した者は就労率が高かった。
Ojio Y, Yamaguchi S, Ohta K, Ando S, Koike S	Effects of biomedical messages and expert-recommended messages on reducing mental health-related stigma: a randomised controlled trial	Epidemiology and Psychiatric Sciences, 29:e74	生物医学的内容の教育」を受けた者は「専門家合意による推奨内容の教育(心理社会的内容)」を受けた者と同様に、精神疾患に対する誤解、差別、扁見か改善することを、無作為化比較試験で明らかにし、精神疾患に関する生物医学的知識がスティグマ軽減に役立つことを示した
Shiozawa T, Yamaguchi S, Matsunaga A, Sawada U, Fujii C	Development of the Interpersonal Processes of Care Survey-Japanese version	Neuropsychophar macology reports. 2020 Mar:40(1):107- 112	患者自身が報告する医師と患者との多次元的なコミュニケーションと対人関係を測定する尺度(IPC)の日本語版を開発することを目例に研究を行った。日本国内2施設(48人を対象として調査を行った結果、2因子22項目の因子構造が明らかとなり、一定の信頼性・妥当性が確認された
Kawakami N, Yasuma N, Watanabe K, Ishikawa H, Tachimori H, Takeshima T,Ueda M,Shimoda H,Nishi D	Association of response rate and prevalence estimates of common mental disorders across 129 areas in a nationally representative survey of adults in Japan	Social Psychiatry and Psychiatric Epidemiology	地域における精神疾患の有病率は、回答率によって大きく影響を受けない可能性があることを世界 精神保健日本調査セカンドのデータを用いて明らかにした。しかし、薬物使用障害の場合、回答率 の低下は、Overestimationにつながる恐れがあるので解釈に注意を要する。
Hayashi T, Yamaguchi S, Sato S	Implementing the individual placement and support model of supported employment in Japan	Barriers and strategies. Psychiatric Rehabilitation Journal 43(1):53- 59, 2020	本稿は、日本の援助付き雇用に関する研究および実践の状況をまとめた論文である。前半部分では、援助機雇用の効果検証に取り組んで日本の研究を系統的にレビューした結果を示し、日本においても援助付き雇用が利用者に多くの就労機会をもたらすことを報告した。後半部分では、日本で援助付き雇用を実践する機関の取り組みを紹介した。
Nagata T. Tachimori H. Nishinaka H. Takeda K. Matsuda T. Hirabayashi N.	Mentally disordered offenders discharged from designated hospital facilities under the medical treatment and supervision act in Japan: Reoffending and readmission.	29 (3) ,157 - 167,06,2019	現在の日本の法医学精神保健法(医療監督法(MTSA))は2003年に制定されました。しかしながら、この規定の下で病院内に拘禁されている犯罪患者の実際の結果についてはほとんどわかっていません。MTSAの下で拘禁され、その後2007年から2015年の間に全国の28の病院のいずれかから退院した精神障害の526人の犯罪者を追跡した。
Shimomura H. Lee T. Tanaka Y. Awano H. Itoh K. Nishino I, Takeshima Y	Two closely spaced mutations in cis result in Ullrich congenital muscular dystrophy	HUMAN GENOME VARIATION 2019 (6) ,21 - eCollection,04,201	UCMDの2歳男児において、次世代シークエンサーによる遺伝子解析を行なったところ、COL6A3遺伝子にc.6283-1GJT、c.6310-2AJTの2つのパリアントを検出した。mRNAではexon18スキップが確認され、ゲノムDNA解析により2つのパリアントは周一アレルに位置することが判明した。両親にこれらのパリアントは検出されず、de novo変異により、常染色体優勢のUCMDが引き起こされたと考えられた。
Inoue M. Tanboon J. Okubo M. Theerawat K. Saito Y, Ogasawara M. Indrawati LA, Uruha A. Okiyama N. Fujimoto M. Suzuki S. Nishino I	Absence of sarcoplasmic myxovirus resistance protein A (MxA) expression in antisynthetase syndrome in a cohort of 194 cases	NEUROPATHOLO GY AND APPLIED NEUROBIOLOGY 45 (5) ,523 - 524,08,2019	抗アミノアシルHPNA合成酵素(anti-aminocyl-IRNA synthetase: ARS)抗体開性となる炎症性筋疾患、抗合成酵素 症候群(antisynthetase syndrome: ASS)194項を対象に、皮膚肺炎特異的に影響を発酵するミクソウイルス剤性 空自類(mynovinus-resistance protein 4/MA)を用いた予感相様で学力を行った。3例を除いた必要者が格 筋ではMxAの発現を認めず、骨格筋レベルでは1型インターフェロン誘導型に関の発現において皮膚筋炎と明確な差異が みられた。このことはASSが皮膚筋炎とは異なる病態機序を持つ、独立した疾患概念であることを示している。
Hamanaka K. Miyatake S. Koshimizu E. Tsurusaki Y. Mitsuhashi S. Iwama K. Alkanag AN. Fujita A. Imagawa E. Uchiyama Y. Tawara N. Ando Y. Mitsumi Y. Okubo M. Nakashima M. Mizusuchi T. Takata A. Miyake N. Saitsu H. Ilda A. Nishino I. Matsumoto N	RINA sequencing solved the most common but unrecognized NEB pathogenic variant in Japanese nemaline myopathy	GENETICS IN MEDICINE 21 (7) ,1629 - 1638,07,2019	メンデル遺伝病のエクソーム解析による診断率は一般的に20~40%である。その理由の一部は全エクソーム解析では ディープイントロンや異常スプライシングを起こす同義パリアントが見逃されるためである。本研究では、異常スプライ シングとそれに関連するパリアントを効果的に検出するためFNAシークエンフを用いた。方法:エクソーム解析で診め のつかなかったネマリンミオバチー6倍例の生検筋で、FNAシークエンスとによって異常スプライッングが解析された。 結果:。1569-339A/Gのパリアントを1例で、。24684G/3C(p.Ser8228Ser)を3例で認めた。。224884G/3C/リアントは停留も大178人に17アレ( 35552人中20アリル) という割合であられ、これは全ての病的にアリアントトの中で最も高熱度であった。結婚:これらの結果からは、これまで未診断だった筋疾患のうち大部分をRNAシーク エンスによって解決できることが示唆される。
Shimomura H. Lee T, Tanaka Y, Awano H, Itoh K, Nishino I, Takeshima Y	Two closely spaced mutations in cis result in Ullrich congenital muscular dystrophy	HUMAN GENOME VARIATION 2019 (6) ,21 - eCollection,04,201 9	UCMDの2歳男児において、次世代シークエンサーによる遺伝子解析を行なったところ、COL6A3遺伝子にc6283-1G)T、c6310-2A)Tの2つのパリアントを検出した。mPNAではexxn18スキップが確認され、ゲノムDNA解析により2つのパリアントは同一アレルに位置することが判明した。両親にこれらのパリアントは検出されず、de novo変異により、常染色体衝勢のUCMDが引き起こされたと考えられた。

		I	
著者、発表者等  Uchino S, lida A, Sato A, Ishikawa K, Mimaki M, Nishino I, Goto YI	論文名、演題名等  A novel compound heterozygous varient of ECHS1 identified in a Japanese patient with Leigh syndrome	掲載誌、学会等 HUMAN GENOME VARIATION 2019 (6) ,19 - eCollection,04,201 9	成果又は特記事項 Leighneg解はミトコンドリア機能異常により引き起こされる不知った表現型をとる神経変性疾患である。ある種の Leighneg解は、ミトコンドリアにおける部が酸に分子領アラン腺の代謝において、短線エノイルCoAヒドラターゼを コードレているECHS1遺伝子の変異を有している。エクソームシークエンスを用いることで、我々は一人の日本人患者 をLeighneg能と診断し、その患者がECHST通信子においてTMM、OC402924と23TD、CLB Lus MPでは NMLO040924と、176A公G (p.Asn59Ser)の新規パリアントを複合ヘテロ接合性にもつことを同定した。
Matsumoto C. Mori-Yoshimura M. Noguchi S. Endo Y. Oya Y. Murata M. Nishino I. Takahashi Y:	Phenotype of a limb-girdle congenital myasthenic syndrome patient carrying a GFPT1 mutation	BRAIN & DEVELOPMENT 41 (5) .470 - 473,05,2019	庭例は38歳女性、近位筋優位の軽度筋力修下と月経中やエフェドリン含有剤の使用中に変動する易疲労性を呈した。 19歳等の筋生検でtubular aggregatesを呈する先天性ミオバチーと診断されていた。 彼女の修正された最終診断は、GFPT1遠伝子変異(GFPT1 (2013.3 IMM 610542)、c.722_723msG homozygote、CMS-GFPT1) による先天性医療力能検験である。 骨格筋CTはびまん性のが正応が・体幹筋の萎縮を呈し、特に外側広筋、ハムストリング、排腹筋内側、ヒラメ筋が障害されていた。 経口でOpyridostigmine bromide投与は筋力修下と易疲労性を朗瞭に改善した。 本征例は、日本におけるCMS-GFPT1の限初の一例である。CMSは治療可能な疾患であるため、患者QOLの向上のために早期に正確に診断することは結束を定とって重要である。 が上検で引いたはAT aggregatesや日内変動は本疾患における重要な特徴である。 定量的な筋力測定は治療の有効性を評価する上で有効であった。
Funayama K, Shimizu H, Tanaka H, Kawachi I, Nishino I, Matsul K, Takahashi N, Koyama A, Katsuragi-Go R, Higuchi R, Aoyama T, Watanabe H, Kakita A, Takatsuka H	An autopsy case of peliosis hepatis with X-linked myotubular myopathy	LEGAL MEDICINE 38 (2019) .77 - 82.04.2019	X連鎖性ミオチュブラーミオバチーに肝素斑病を合併し、肝出血と肝破裂により死亡した4歳男児の割検例の報告である。 肝業斑病は肝臓に多数の様々なサイズの血液貯留空を認め、慢性消耗病や特殊な薬剤の使用によって続発することもある。 X連鎖性ミオチュブラーミオバチーは最も重席な先天性ミオバチーを来すうちの1疾患であり、男児で発症し、出生後す ぐに重度の低緊張と呼吸障害を宣する。 我々の疾患もいれて現在までに12例のX連鎖性ミオチュブラーミオバチーに小児期肝素斑病を合併した報告がなされて いる。 形常斑病は発生頻度は低いが、肝出血の原因の一つとして考慮されるべきであり、正確な診断のためには十分な肉眼的、 組織学的な調査が必要である。
Nishikawa A. Iida A. Hayashi S. Okubo M. Oya Y. Yamanaka G. Takahashi I. Nonaka I. Noguchi S. Nishino I	Three novel MTM1 pathogenic variants identified in Japanese patients with X-linked myotubular myopathy	MOLECULAR GENETICS & GENOMIC MEDICINE 7 (5) ,e621 - e621,05,2019	お内はX連鎖性ミオチュプラーミオバチーにおいて、4つの新規パリアントを検出した。いずれのパリアントもPTPドメインに位置しており、種の保存性、健常人データベースデータ、患者の臨床病理情報からもこれらのパリアントは疾患の原因変異であると考えられた。
Miyazaki M. Mori-Yoshimura M. Yamamoto T. Oya Y, Saito Y, Nishino I	Chronic sarcoid myopathy mimicking sporadic inclusion body myositis	CLINICAL NEUROLOGY AND NEUROSURGERY 182 (2019) ,84 - 86,05,2019	患者は81歳の女性、73歳から脳段昇端困難、嚥下困難が出現し、74歳から瓶のふたを開けられなくなった。胸側レントケンで両側肺門肌リンパ節腫脹を認め、アンジオテンジン変換酵素の上昇、気管支肺態況浄液でのリンパ支増殖も認めた。歩行障害を主訴に81歳で当院を受診した。手指阻曲と膝ಠ原の筋力低下が害しく、この筋障害パターンは孤発性対力人体防炎に衝撃していた。しかし、畜豚内里とは対量前が上半難様がが遅れ的に保存されており、この所の機サルコイドミオバチーに一致した。筋病理での肉芽種、FDG-PETでの両線門肌リンパ節腫胀、以前のアンジオテンジン変換蓄索の上昇や電空支援所見から、最終的にサルコイドミオバチーと診断に、サルコイドミオバチーは必要な疾患で、カリ、孤発性料人体防炎と鑑別されるべきである。臨床所見だけで診断することなく、筋生検も行うべきであり、さらに骨格筋画像の筋選択性も鑑別に役立つ可能性がある。
Ozawa K. Mochizuki K. Manabe Y, Yoshikura N, Shimohata T, Nishino I, Goto YI	Reply to: Diagnosing MELAS requires not only an mtDNA variant but also an appropriate phenotype	DOCUMENTA OPHTHALMOLOGI CA 138 (3) .257 - 258,06,2019	我々は認知機能障害、ミオバチー、難聴、大脳萎縮より総合的に判断し、ミトコンドリア脳筋症(MELAS)と診断しま した。しかし、ご指摘の通り、mitochondrial multiorgan disorder syndrome(MIMODS)の定義を満たしており、 MIDOSという診断に賛同します。
Miyazaki M. Mori-Yoshimura M. Yamamoto T. Oya Y, Saito Y. Nishino I. Takahashi Y	Chronic sarcoid myopathy mimicking sporadic inclusion body myositis	CLINICAL NEUROLOGY AND NEUROSURGERY 182 (2019) ,84 - 86.07.2019	患者は81歳の女性。73歳から階段昇降困難、嚥下困難が出現し、74歳から瓶のふたを開けられなくなった。胸部レントゲンで両側制門部リンパ節腫脹を認め、アンシオテンシン変換酵素の上昇、気管支肺部洗浄液でのリンパ球増殖も認めた。歩行障害を主訴に81歳で当院を受診した。手指阻曲と膝中展の筋力性下が害しく、この筋障害パターンは現神性が入体防炎に客機していた。しかし、画像所見上は大量直筋と半腱様筋が延れ的に保存されており、この所見は慢性サルコイドミオバチーに一致した。筋疾理での肉芽種、FDG-PETでの両時間で割りンパ節腫脹、以前のアンジオテンシン変換解系の上昇や気管支撑所見から、農総的にサルコイドミオバチーと参手に、サルコイトミオバチーはよりな疾患であり、孤発性引入体筋炎と鑑別されるべきである。臨床所見だけで診断することなく、筋生検も行うべきであり、さらに骨格筋画像の筋速択性も鑑別に役立つ可能性がある。
Onda A. Miyagawa S. Takahashi N. Gochi M. Takagi M. Nishino I, Suzuki S. Oishi C. Yaguchi H	Pembrolizumab-induced Ocular Myasthenia Gravis with Anti-titin Antibody and Necrotizing Myopathy	INTERNAL MEDICINE 58 (11),1635 - 1638,06,2019	73歳男性、静線癌の治療のためにpembrolizumab(ベムプロリズマブ)を使用し、その後複視を発症した。 全身の筋力性下は認めなかったが、眼線下垂と外眼筋麻痺も併発した。 血清CX(歯は7311 U/Lと上昇していた。 抗人A-HARがなが抗M-SK抗体、エトロホニウムテスト、反復中経射激熱筋線は全て陰性であったが、抗titin抗体が陽性で あったため、重症筋無力症と診断した。 筋病理所見では、tubular asgregatesを伴うnecrotizing myopathyの所見であった。 地前報告されていたpembrolizumab間連の重症筋無力症は主に全身型であるが、本症例では銀筋型であった。 本症例は抗titn抗体陽性であり、tubular asgregatesを伴うpembrolizmab間連重症筋無力症の最初の報告である。
Seki M, Uruha A, Ohnuki Y, Kamada S, Noda T, Onda A, Ohira M, Isami A, Hiramatsu S, Hibino M, Nakane S, Noda S, Yutani S, Hanazono A, Yaguchi H, Takao M, Shina T, Katsuno M, Nakahara J, Matsubara S, Nishino I, Suzuki S	Inflammatory myopathy associated with PD-1 inhibitors	JOURNAL OF AUTOIMMUNITY 100,105 - 113,06,2019	本研究の目的は、programmed cell cleath 1 inhibitors(PD-1)関連数値性ミオバチーの特徴を示すことである。 対象は、豊彦大学に受診したPD-1ミオバチーの日本人事者19名(関13名、女6名、平均70歳)で、コントロールとして 水容中が体調性6名名、がAFD-1には関いた。世界46名であり、には火圧。 形容中が体調性6名名、がAFD-1には関いた。世界46名であり、には火圧。 重要は11 (別がからい面がて、8例がからいたのには関いては、2分もから平均29日でPD-1 ミオバチーを発生 事業は11 (別がからい面がて、8例がからいたのにからで更要と、9分はからと呼り29日でPD-1 ミオバチーを発し を関した。助力低下の中で、初発症状は10例に関節ト重を認め、全体としては15例で開助下重、13例で増排、8例で配面にした。助力低下の中で、初発症状は10例に関節ト重を認め、全体としては15例で開助下重、13例で呼吸と関方を 管理、10例で対定症状、13例で呼吸と関方と、血薄な人間は17名ので心臓病薬。6例で呼吸と関方を 管理、10例で対定症状、13例で国際が13名が、13例(8例)で認めた。1人へ4712(272)ルは健常コントラール環より高頻度に認めた。か病理は筋内動の炎症やMFIC class 1の発度を伴う多局在性の壊死性筋線維によって特徴付けられた。 ステロイドによる分段和削離は試はたいている場合的がよりで表がため、10分に関連として、今回の健床的、病理学的、免疫学的所見に基づき、PD-1ミオバチーは皮症性ミオバチーの個別の疾患分類 てあると言える。
Pogoryelova O, Urtizberea JA, Argov Z, Nishino I, Lochm?ller H	237th ENMC International Wokshop: GNE myopathy ? current and future research Hoofddorp, The Netherlands, 14-16 September 2018	NEUROMUSCULA R DISORDERS 29 (5) ,401 - 410,05,2019	2018年9月第237回ENMCワークショップが開催され、GNEミオバチーに関する研究を行っている研究者が集まった。シアル酸桐が原法第3相治験、各国のコホート研究や自然歴研究の結果報告、遺伝学的研究や遺伝子治療、シアル酸代謝経路に関する新たな知見等に関し繊維されたので、本籍文にまとめた。
Uruha A, Allenbach Y, Charuel JL, Musset L, Aussy A, Boyer O, Mariampillai K, Landon-Cardinal O, Rasmussen C, Bolko L, Maisonobe T, Leonard-Louis, Suzuki S, Nishino I, Stenzel W, Benveniste O	Diagnostic potential of sarcoplasmic MxA expression in subsets of dermatomyositis	NEUROPATHOLO GY AND APPLED NEUROBIOLOGY 45 (5) .513 - 522.08.2019	目的:皮膚筋炎におけるMxA(myxovirus resistance protein A)の筋形質での発現の診断的価値を明らかにする。さらに他のマーカーよりもMxAが優けいることを示す。 方法:57例の皮膚筋炎の患者において骨体筋時体でMxAとPIG-Iの免疫染色を行い、perifascicular atrophy (PFA)の有無を比較した。患者の内別は抗Mr-2抗体が6例、抗TIF-1ヶ抗なが10例、抗NXP-2抗体が13例、抗MDA5抗なが10例、抗MDA5抗なが10例、抗MDA5抗なが10例、抗MDA5抗なが6例、大TIF-1ヶ抗なが10例、抗NXP-2抗体が13例、抗MDA5抗なが6例を20回去年期発症であった。コントロールの疾患群として、ASS(antisynthetase syndrome)関連筋炎30例、immunereclated neorotroiting myonathy (IMMM)例例、打入体系数6例を用いた。 起策:皮膚筋炎患者において筋形質におけるMxAの発現は高度77%、特異皮140%であった。一方でRIG-I 染色や 即年7年20年21年21年21年21年21年21年21年21年21年21年21年21年21年
Inoue M. Tanboon J. Okubo M. Theerawat K. Saito Y. Ogasawara M. Indrawati L.A. Uruha A. Okiyama N. Fujimoto M. Suzuki S. Nishino I	Absence of sarcoplasmic myxovirus resistance protein A (MxA) expression in antisynthetase syndrome in a cohort of 194 cases	NEUROPATHOLO GY AND APPLIED NEUROBIOLOGY 45 (5) .523 - 524.08.2019	抗アミノアシルはRNA合成酵素(anti-aminooyl-triNA synthetase: ARS)抗体陽性となる炎症性筋疾患、抗合成酵素 症候群(antisynthetase syndrome: ASS)194例を対象に、皮膚筋炎柱実施した。 高機能で発現するミクソウイルス酸性 直角質人(myodvus-resistance protein A. MxA) 召称した免疫組織化学薬色を行った。 別を添いてASS患者骨格 助ではMxAの発現を認めず、骨格筋レベルでは1型・1ンターフェロン患機器白質の発現にあいて皮膚筋炎と明確な差異が みられた。このことはASSが皮膚筋炎とは異なる病態機序を持つ、独立した疾患機念であることを示している。
Inoue M. Uchino S. Iida A. Noguchi S. Hayashi S. Takahashi T. Fujii K. Komaki H. Takeshita E. Nonaka I. Okada Y. Yoshizawa T, Van Lommel L, Schuit F, Goto YI. Mimaki M. Nishino I	COX6A2 variants cause a muscle- specific cytochrome c oxidase deficiency	ANNALS OF NEUROLOGY 86 (2) ,193 - 202,08,2019	チトクロームc酸化酵素(COX)欠損症は、ミトコンドリア呼吸鎖複合体の障害であり、多くの場合、多臓器が障害される。これまでに横紋筋特異的なCOX欠損症を起こす核遺伝子の報告はない。 投水は臨床的に先天性ミオバチーと診断された患者2人に全エクリーム解析を行い、COXGA2に両アル性のミスセン ス変異を認めた。患者2人は非過して乳児期間すて1骨格筋の症状を認め、1人は心筋の症状を認めた。他の臓器の症状は 認めなかった。患者骨格筋ではCOX活性の低下、複合体Vのアセンブリー障害を認めた。CoxGa2+KOマウス骨格筋で も同様の結果が得られた。 COXGA2はCOXのサブユニットであり、骨格筋・心筋にのみ発現しているため、症状が骨格筋・心筋に限定されたと考 えられた。我々は、これまでのCOX欠損症と異なる、横紋筋特異的な症状を来す新たなCOX欠損症の原因遺伝子を同定 した。

Hamanaka K, Mistaka S, Koshimiza E, Taurusaki Y, Mistamaki S, Ivyama K, Alkanna AM Fulin A, Imasawa E, Uchiyama Y, Tawara N, Ando Y, Mistam Y, Ckubo M, Mistamaki S, Wama K, Alkanna AM Fulin A, Imasawa E, Uchiyama Y, Tawara N, Ando Y, Mistami Y, Ckubo M, Mistamaki S, Nakana S, Maria T, Calandor-Frara AS, Lundberg E, Ohnuki Y, Shara T, Calandor-Frara	
REDICINE 58 Nemaine Mycopathy Nemaine Mycopath	fでは スプライ で診断 れた。 GXCバ 3バリア シーク
T. Galindot-Peria AS, Lundberg E. Ohnula Y, Shina T, Suzuki S, Nishino I  Marthylgiutanyi-coenzyme a reductase antibody with reducing body myopathy. Possible double trouble pody myopathy. Possible double trouble	オパ
Yu M, Zhu Y, Xie Z, Zheng Y, Xiao J, Zhang W, Nishino I, Yuan Y, Wang Z  Novel TTN mutations and muscle imaging characteristics in congenital titinopathy  Novel TTN mutations and muscle imaging characteristics in congenital titinopathy  TRANSLA ALONAL NEUROLOGY 6  (7) 1311 - 1318.07.2019    TRANSLA ALONAL NEUROLOGY 6   TTN mutations and muscle imaging characteristics in congenital titinopathy    TRANSLA ALONAL NEUROLOGY 6   TTN mutations and muscle imaging characteristics in congenital titinopathy   TRANSLA ALONAL NEUROLOGY 6   TTN mutations and muscle imaging characteristics in congenital titinopathy   TRANSLA ALONAL NEUROLOGY 6   TTN mutations and muscle imaging characteristics in congenital titinopathy   TRANSLA ALONAL NEUROLOGY 6   TTN mutations and muscle imaging characteristics in congenital titinopathy   TRANSLA ALONAL NEUROLOGY 6   TTN mutations and muscle imaging characteristics in congenital titinopathy   TRANSLA ALONAL NEUROLOGY 6   TTN mutations and muscle imaging characteristics in congenital titinopathy   TRANSLA ALONAL NEUROLOGY 6   TTN mutations and muscle imaging characteristics in congenital titinopathy   TRANSLA ALONAL NEUROLOGY 6   TTN mutations and muscle imaging characteristics in congenital titinopathy   TTN mutations and muscle imaging characteristics in congenital titinopathy   TTN mutations and muscle imaging characteristics in congenital titinopathy   TTN mutations and muscle imaging characteristics in congenital titinopathy   TTN mutations and muscle imaging characteristics in congenital titinopathy   TTN mutations and muscle imaging characteristics in congenital titinopathy   TTN mutations and muscle in the congenital titinopathy   TTN mutations and muscle interpolations page congenital titinopathy   TTN m	BA/G tまだ結 初めて
である。 対体筋炎は進行性であり、原因は不明で未だ有効な治療法がない疾患である。封入体筋炎は2015年に日本政府は で、難病に指定され治療費の一郎が取病によって補償されるようになった。本研究に追索10年間における封入体筋 患者数の変化を指遣し、日本人における封入体防炎の患者数は主治医への住棄はがきのアンケート用紙で評価した。本研究では題床的に'definite'か がないまな、M. Mori-Yoshimura M. Yamashita S. Nakano S. Murata KY. Mori M. Inamori Y. Matsui N. Kimura E. Kusaka H. Kondo T, Ito H. Higuchi I. Hashiguchi A. Nodera H. Kaj R. Tateyama M. Izumi R. Ono H. Kato M. Warta H. Tateyama M. Izumi R. Ono H. Kato M. Warta H. Tateyama M. Izumi R. Ono H. Kato M. Warta H. Tateyama M. Izumi R. Ono H. Kato M. Warta H. Tateyama M. Izumi R. Ono H. Kato M. Warta H. Tateyama M. Izumi R. Ono H. Kato M. Sala M. Kaj R. Tateyama M. Izumi R. Ono H. Kato M. Warta H. Tateyama M. Izumi R. Ono H. Kato M. Warta H. Tateyama M. Izumi R. Ono H. Kato M. Warta H. Tateyama M. Izumi R. Ono H. Kato M. Warta H. Tateyama M. Izumi R. Ono H. Kato M. Warta H. Tateyama M. Izumi R. Ono H. Kato M. Warta H. Tateyama M. Izumi R. Ono H. Kato M. Warta H. Tateyama M. Izumi R. Ono H. Kato M. Warta H. Tateyama M. Izumi R. Ono H. Kato M. Warta H. Tateyama M. Izumi R. Ono H. Kato M. Warta H. Tateyama M. Izumi R. Ono H. Kato M. Warta H. Tateyama M. Izumi R. Ono H. Kato M. Warta H. Tateyama M. Izumi R. Ono H. Kato M. Warta H. Tateyama M. Izumi R. Ono H. Kato M.	で確認し ぎった。 Nの複 別な低下 先天性
8人の患者はC型肝炎ウイル抗体陽性であった。それらのうちの3人は対人を数炎を発症する前にインターフェロン 与されていた。フテロイトは3名人(311%)の患者に使用され、MGは44名人の患者(43.4%)に使用された。2 年から2017年までに合計70人の患者が指定難調医療費助成制度に申請した。政府によって治療費は部分的に補償 れたが、多くの患者は精神的、経済的不安を視いていた。 結論:我々は日本人の封入体節炎患者の横断的解析を行った。継続的なサポートと将来的な調査が求められている。	所によっ か を る み る み る み る み る み る と る と る と る と る と
Ishiura H. Shibata S. Yoshimura J. Suzuki Y. Qu W. Dol K. Almansour MA, Kikuchi JK. Taira M. Mitsui J. Takahashi Y. Ichikawa Y. Mano T. Iwata A. Harigaya Y. Matsukawa M. Mahrida M. Shirota Y. Ohtomo R. Kowa H. Date H. Mitsue A. Hatsuta H. Morimoto S. Murayama S. Shiio Y. Saito Y. Mitsukaka A. Kawai M. Sasaki T. Sugiyama Y. Hamada M. Ohtomo G. Terao Y. Nakazato Y. Takeda A. Sakiyama Y. Hamada M. Ohtomo G. Terao Y. Nakazato Y. Takeda A. Sakiyama Y. Hamada M. Ohtomo G. Terao Y. Nakazato Y. Takeda A. Sakiyama Y. Hamoda Kameyama Y. Shinmi J. Ogata K. Kohno Y. Lim SY. Tan AH. Shimizu J. Goto J. Nishino I. Toda T. Morishita S. Tsuji S	))、白 遺伝子 果り返し 列の異常
Hanna MG, Badrising UA, Benveniste O, Lloyd TE, Needham M, Chiroy H, Acki M, Machado PM, Liang C, Reardon KA, et Visser M, Ascherman DP, Barrohn RJ, Dirachkie MM, Miller JAL, Kissel JT, Oskarsson B, Joyce NC, Van den Bergh P, Basts J, De Bleecker JL, Karar B, Caption B, Ca	った。 とし、ピマの 32人で 7グあっグル 5人人 5人人 5人人 15人人 15人人 18/kg 21 18/kg 31 18/kg 31
(CURRENT OF INDIAN) A COMPANIES pathology perspectives Trial tool of idiopathic inflammatory myopathies pathology perspectives (5) 7.04 - 714,102019 (74,102019)	要サブグ 免疫介 される。 異なるタ する。 して、特
Donkervoort S. Dowling JJ. Laporte J. MacArthur D. B?nnemann CG. Beggs A. Bonne G. Dubowitz V. Goldberg M. Goldberg M. Herault Y. Karakaya M. Lennox A. Malfatti E. Mathews K. Mora M. Nishino I. Oates E. Rutkowski A. Spring M. Voermans N. Warman J. Willer T. Xong H. Zaharieva I. Zanoteli E. Colore 2015	の確認
Shitsuka Y, Inoue S, Furuta JI, Koguchi-Yoshioka H, Nakamura Y, Watanabe R, Okiyama N, Fujisawa Y, Enokizono T, Hiroko F, Suzuki H, Nishino I, Kosaki K, Fujimoto M  Sweat retention anhidrosis associated with tubular aggregate myopathy  Sweat retention anhidrosis associated with tubular aggregate myopathy  Sweat retention anhidrosis associated with tubular aggregate myopathy  CRACチャネルの機能喪失変異は免疫不全、筋力低下を伴う無汗性外胚葉形成不全症を引き起こし、機能獲得変異 (15)、1104 - 1106,11,2019	異は管
Takeguchi-Kikuchi S, Hayasaka T, Katayama T, Kano K, Takahashi K, Salto T, Savada J, Minoshima A, Sakamoto N, Akasaka K, Moykawa N, Nishino I, Ishibashi-Ueda H, Hasebe N  Anti-signal Recognition Particle Antibody positive Necrotizing Myopathy with Scondary Cardiomyopathy. The First Myocardial Biopsy-and Multimodal Imaging-proven Case  MEDICINE 58 (21) 3189-3194,11.2019	
Ueno T, Suzuki C, Nishino I, Tomiyama M  Dropped Head Syndrome Caused by Immune-mediated Necrotizing Myopathy  Dropped Head Syndrome Caused by Immune-mediated Necrotizing Myopathy  Dropped Head Syndrome Caused by Immune-mediated Necrotizing Myopathy  Baltiel FN/D 虚模群と回旋筋力低下をきたした60歳女性。血清CKは8.430 U/Lと高値であり、抗SRP抗体が陽あった。MRIのSTIRでは傍脊柱筋に高信号を認めた。左上腕二頭筋の筋生検では、ヘマトキシリン・エオジン染色 複矩形主要化に加え、競優機管合体の筋鞘膜下の沈着を認め、免疫介在性壊死性ミオバチーとの関連は不明だが、値下がり症候群に高CK血症を伴う腕は、臨床免疫介在性壊死性ミオバチーを考慮すべきである。	あった。
Paraspinal amyotrophy in DNM-2-related centronuclear myopathy  DNM2変異を有する中心核ミオパチーの臨床症状は幅広いが、今回初めて脊柱起立筋の萎縮を呈した症例を報告するまた。  「容柱起立筋の障害も診断に役立つと考えられる。  に脊柱起立筋の障害も診断に役立つと考えられる。	する。 あらた

著者、発表者等	論文名、演題名等	掲載誌、学会等	成果又は特記事項
Lafor ?? P. Inoue M. Goillot E. Lefeuvre C. Cagin U. Streichenberger N. Leonard-Louis S. Brochier G. Madelaine A. Labasse C. Hedberg-Oldfors C. Krag T. Jauze L. Fafregue J. Labrune P. Millesenda J. Nadaj-Pakleza A. Sacconi S. Mingozzi F. Ronzitti G. Petit F. Schoser B. Oldfors A. Vissing J. Romero NB. Nishino I. Malfatti E	Deep morphological analysis of muscle biopsies from type III glycogenesis (GSDIII), debranching enzyme deficiency, revealed stereotyped vacuolar myopathy and autophagy impairment	ACTA NEUROPATHOLO GICA COMMUNICATION S 7 (1) ,167 - 167,10,2019	糖原病間型(防分枝酵素欠損症)はまれな代謝障害であり、肝、心筋、骨格筋が障害される。糖原病間型の筋形態学的特 徴を明らかにし、新たな疾患のマーカーと経路を同定するため、多施設における30人の糖原病間型患者の形核は、糖原 病間型モデルマウスの筋を解析した。と下筋球束では、典型的マー定の空路性ミオバチーが見られ、様々の大きさの PAC満性の物質で代たされる空間が特徴であった。後于機能で見ると、大きなnonvembrane boundの筋形をプリ コーゲン活きと、よりいさな円形の嚢状構造が現られ、それらはグリコーゲンの名きむ連続した二重版で覆われ、ト トファゴソームに相当する。と下骨格筋での気られ、それらはグリコーゲンの子の音を改連続した二重版で覆われ、テ レ、LC3IIの増加もこのことに矛盾しない。SQSTM1/pG2の減少は極熱病間型のモデルマウスにおいても見られた。
Naonori Yasuma, Zui Narita, Natsu Sasaki, Erika Obikane, Junpei Sekiya, Takuma Inagawa, Aiichiro Nakajima, Yuji Yamada, Ryuichi Yamazaki, Asami Matsunaga, Tomomi Saito, Kazuhirio Watanabe, Kotaro Imamura, Norito Kawakami,Daisuke Nishi	Psychological intervention for universal prevention of antenatal and postnatal depression among pregnant women: protocol for a systematic review and meta-analysis	Systematic Reviews 12,2019	
Koji Takeda, Norio Sugawara, Yuji Yamada, Takako Nagata, Hiroko Kashiwagi, Toshiaki Kono, Naotsugu Hirabayashi, Takayuki Okada	Employment-Related Factors of Forensic Psychiatric Outpatients with Psychotic Disorders	Neuropsychiatric Disease and Treatment 12,2019	
Zui Narita, Andrew Stickley, Jordan DeVylder, Yuma Yokoi, Takuma Inagawa, Yuji Yamada, Kazushi Maruo, Ai Koyanagi, Hans Oh, Tomiki Sumiyoshi	Effect of multi-session prefrontal transcranial direct current stimulation on cognition in schizophrenia: A systematic review and meta-analysis	Schizophrenia Research 12,2019	
Yuji Yamada, Madoka Matsumoto, Kazuki lijima, Tomiki Sumiyoshi	Specificity and Continuity of Schizophrenia and Bipolar Disorder: Relation to Biomarkers	Current Pharmaceutical Design 01,2020	
Koji Takeda, Norio Sugawara, Taro Matsuda, Akihiro Shimada, Takako Nagata, Hiroko Kashiwagi, Naotsugu Hirabayashi, Takayuki Okada	Mortality and suicide rates in patients discharged from forensic psychiatric wards in Japan	Comprehensive Psychiatry 95,11,2019	
Ogawa M, Maruo K, Sone D, Shimada H, Suzuki K, Watanabe H, Matsuda H, Mizusawa H	Loneitudinal analysis of risk factors for dementia based on Mild Cognitive Impairment Screen results and questionnaire responses from healthy Japanese individuals registered in an online database	Alzheimers Dement (N Y) 5.347 - 353,08,2019	健業成人のオンラインデータベースIROOPを活用し、473名について分析し、気分、睡眠、QOL、病歴が認知機能の縦断的変化に影響することを明らかにした。
Taniguchi K, Yamamoto F, Arai T, Yang J, Sakai Y, Itoh M, Mamada N, Sekiguchi M, Yamada D, Saitoh A, Kametani F, Tamaoka A, Araki YM, Wada K, Mizusawa H, Araki W	Tyrosol Reduces Amyloid- & Oligomer Neurotoxicity and Alleviates Synaptic, Oxidative, and Cognitive Disturbances in Alzheimer's Disease Model Mice	J Alzheimers Dis 70 (3) ,937 - 952,06,2019	植物由来のtyrosolが短難細胞、アルツハイマー病モテルマウスにて、アミロイドβオリゴマーの神経毒性を軽減し、認 知機能障害症状を軽減することを示した。
Ozaki K, Ansai A, Nobuhara K, Araki T, Kubodera T, Ishii T, Higashi M, Sato N, Soga K, Mizusawa H, Ishikawa K, Yokota T	Prevalence and clinicoradiological features of spinocerebellar ataxia type 34 in a Japanese ataxia cohort	Parkinsonism Relat Disord 65,238 - 242,08,2019	506名の失調症患者の検索で、SCA34の有病率は0.2%で、MFIで橋のhot cross bun signを特徴とすることが判明した。
Hashiguchi S. Doi H. Kunii M. Nakamura Y. Shimuta M. Suzuki E. Koyano S. Okubo M. Kishida H. Shiina M. Ogata K. Hirashima F. Inoue Y. Kubota S. Hayashi N. Nakamura H. Takahashi K. Katsumoto A. Tada M. Tanaka K. Sasaoka T. Miyatake S. Miyake N. Saits H. Sato N. Ozaki K. Ohta K. Yokota T. Mizusawa H. Mitsui J. Ishiura H. Yoshimura J. Morishita S. Tayi S. Takeuchi H. Ishikawa K. Matsumoto N. Ishikawa T. Tanaka F	Ataxic phenotype with altered CaV3.1 channel property in a mouse model for spinocerebellar ataxia 42	Neurobiol Dis 130,10,2019	SCA42動物モデルを作製しブルキンエ細胞減少を再現すると共に、それに先行して下オリーブ核からブルキンエ細胞への登上線維の電気生理学的な異常が出現することを明らかにした。
Reis J. Mizusaza H	Environmental challenges for the nervous system and the brain in Japan	Revue neurologique 175 (10) ,693 - 697,12,2019	日本ではメチル水銀、硫化ダイオキシン、カドミウム、ダイオキシンなど多くの化学物質、原爆、核災害、サリンガスなどの大災害といった環境神経学の多くの実例を経験してきたが、空気汚染やブリオン病もいまた課題である。
Minikel EV. Vallabh SM. Orseth MC. Brandel JP. Ha?k S. Laplanche JL. Zerr I. Parchi P. Capellari S. Safar J. Kenry J. Fong JC, Takada LT. Ponto C. Hermann P. Knipper T. Stehmann C. Kitamoto T. Ae R. Hamaguchi T. Sanjo N. Tsukamoto T. Mizusawa H. Collins SJ. Chiesa R. Roiter I. de Pedro-Cuesta J. Calero M. Geschwind MD. Yamada M. Nakamura Y. Mead S	Age of onset in genetic prion disease and the design of preventive clinical trials	Neurology 93 (2) ,125 - 134,07,2019	遺伝性ブリオン病の予防的な治験のデザインの検討のために、世界の1094名の患者のデータを分析し、エンドボイントの代替となるパイオマーカーが必須で理、自然歴コントロールを用いた市販後調査が臨床的有用性の判定に役立つと思われた。
Miyazaki M. Mori-Yoshimura M. Yamamoto T, Oya Y, Saito Y, Nishino I, Takahashi Y	Chronic sarcoid myopathy mimicking sporadic inclusion body myositis.	Clinical neurology and neurosurgery 182,84 - 86,07,2019	封入体筋炎に類似した臨床像を呈したサルコイドミオパチーの症例を報告した、
Nishida Y, Nakamura M, Urata Y, Kasamo K, Hiwatashi H, Yokoyama I, Mizobuchi M, Sakurai K, Osaki Y, Morita Y, Watanabe M, Yoshida K, Yamane K, Miyakoshi N, Okiyama R, Ueda T, Wakasugi N, Saitoh Y, Sakamoto T, Takahashi Y, Shibano K, Tokuoka H, Hara A, Monma K, Ogata K, Kakuda K, Mochizuki H, Arai T, Araki M, Fujii T, Tsukita K, Sakamaki-Tsukita H, Sano A	Novel pathogenic @VPS13A Novel pathogenic @VPS13A gene mutations in Japanese patients with chorea-acanthocytosis.	Neurology, Genetics 5 (3) ,e332 - ,06,2019	chorea-acanthocytosisの新規変異症例の臨床像を記載した。
Naruse H, Takahashi Y, Ishiura H, Matsukawa T, Mitsui J, Ichikawa Y, Hamada M, Shimizu J, Goto J, Toda T, Tsuji S	Prominent Spasticity and Hyperreflexia of the Legs in a Nepalese Patient with Friedreich Ataxia.	Internal medicine (Tokyo, Japan) 06,2019	著明な症性を呈したフリードライビ失調症の症例を報告した。
Sugiyama A, Sato N, Kimura Y, Shigemoto Y, Suzuki F, Morimoto E, Takahashi Y, Matsuda H, Kuwabara S	Exploring the frequency and clinical background of the "zebra sign" in amyotrophic lateral sclerosis and multiple system atrophy.	Journal of the neurological sciences 401,90 - 94,06,2019	ALSの画像的特徴であるzebra signについて検討し、MSAと比較した。
Takahashi Y, Uchino A, Shioya A, Sano T, Matsumoto C, Numata-Uematsu Y, Nagano S, Araki T, Murayama S, Saito Y	Altered immunoreactivity of ErbB4, a causative gene product for ALS19, in the spinal cord of patients with sporadic ALS.	Neuropathology: official journal of the Japanese Society of Neuropathology 05,2019	ALS19の原因遺伝子産物ErbB4の免疫組織化学的検討を行い、孤発性ALSの脊髄運動神経細胞において発症早期からの発現低下を見出した。発現低下はTDP-43病理と相関していた。
Naruse H. Matsukawa T, Ishiura H. Mitsui J, Takahashi Y. Takano H. Goto J. Toda T, Tsuji S	Association of ATXN2 intermediate- length CAG repeats with amyotrophic lateral sclerosis correlates with the distributions of normal CAG repeat alleles among individual ethnic populations.	Neurogenetics 20 (2),65 - 71,05,2019	ATXN2の中間型アリルとALSとの関連を検討した。
Matsumoto C, Mori-Yoshimura M. Noguchi S, Endo Y, Oya Y, Murata M. Nishino I, Takahashi Y	Phenotype of a limb-girdle congenital myasthenic syndrome patient carrying a GFPT1 mutation.	Brain & development 41 (5) ,470 - 473,05,2019	GFPT1変異を幽する先天性筋無力症候群の症例を報告した。
Naruse H. Ishiura H. Mitsui J. Takahashi Y. Matsukawa T. Tanaka M. Doi K. Yoshimura J. Morishita S. Goto J. Toda T. Tsuji S	Burden of rare variants in causative genes for amyotrophic lateral solerosis (ALS) accelerates age at onset of ALS.	Journal of neurology, neurosurgery, and psychiatry 90 (5) ,537 - 542,05,2019	孤発性ALSにおいて、家族性ALSの原因遺伝子のRare variantを認める症例は発症年齢が早い傾向があることを見出した。
Miyazaki M. Mori-Yoshimura M. Yamamoto T, Oya Y, Saito Y, Nishino I. Takahashi Y.	Chronic sarcoid myopathy mimicking sporedic inclusion body myositis.	Clin Neurol Neurosurg. (182) ,84 - 86,07,2019	

著者、発表者等	論文名、演題名等	掲載誌、学会等	成果又は特記事項
Suzuki N. Mori-Yoshimura M. Yamashita S. Nakano S. Murata KY, Mori M. Inamori Y. Matsui N. Kimura E. Kusaka H. Kondo T, Ito H. Higuchi I. Hashiguchi A. Nodera H. Kaji R. Tateyama M. Izumi R. Ono H. Kato M. Warita H. Takahashi T. Nishino I. Aoki M.	The updated retrospective questionnaire study of sporadic inclusion body myositis in Japan.	Orphanet J RareDis. 14 (1) ,155 - ,07,2019	
Hanna MG, Badrising UA, Benveniste O, Lloyd TE, Needham M, Chinoy H, Aoki M, Machado PM, Liang C, Reardon KA, de Visser M, Ascherman DP, Barohn RJ, Dimachkie MM, Miller JAL, Kissel JT, Oskarsson B, Joyce NC, Van den Bergh P, Baets J, De Bleecker JL, Karam C, David WS, Mirabella M, Nations SP, Jung HH, Pegoraro E, Maggi L, Rodollo C, Filosto M, Shaibani AI, Pegoraro E, Maggi L, Rodollo C, Filosto M, Shaibani AI, Sivakumar K, Goyal NA, Mori-Yoshimura M, Yamashita S, Suzuki N, Katsuno M, Murata K, Nodera H, Nishino I, Romano CD, Williams VSL, Vissing J, Auberson LZ, Wu M, de Vera A, Papanicolaou DA, Amato AA: RESILIENT Study Group.	Safety and efficacy of intravenous bimagrumab in inclusion body myositis (RESILIENT): a randomised, double-blind, placebo-controlled phase 2b trial.	Lancet Neurol. 18 (9) ,834 - 844.09.2019	
Mori-Yoshimura M. Mizuno Y. Yoshida S. Ishihara N. Minami N. Morimoto E. Maruo K. Nonaka I. Komaki H. Nishino I. Sekiguchi M. Sato N. Takeda S. Takahashi Y.	Psychiatric and neurodevelopmental aspects of Becker muscular dystrophy.	Neuromuscul Disord, 29 (12) ,930 - 939,12,2019	
Nakashima M. Tohyama J. Nakagawa E. Watanabe Y. Ch'ng Gaik-Siew. Chieng Siik Kwong, Yamoto K. Hiraide T. Fukuda T. Kaname T. Nakabayashi K. Hata K. Ogata T. Saitsu H. Matsumoto N.	Identification of de novo CSNK2A1 and CSNK2B variants in cases of global developmental delay with seizures.	Journal of Human Genetics 64 (4) ,313 - 322,04,2019	
lkegaya N, Takahashi A, Kaido T, Kaneko Y, Iwasaki M, Kawahara N, Otsuki T	Surgical strategy to avoid ischemic complications of the pyramidal tract in resective epilepsy surgery of the insula: technical case report	Journal of Neurosurgery 128 (4) ,1173 - 1177,04,2019	島回のてんかん焦点を切除する際に、片麻痺の合併症リスクを減らすための手術手技を報告した。
Enokizono M. Sato N. Ota M. Shigemoto Y. Morimoto E. Oba M. Sone D. Kimura Y. Sugai K. Sasaki M. Ikegaya N. Iwasaki M. Matsuda H	Disrupted cortico-ponto-cerebellar pathway in patients with hemimegalencephaly	Brain & Development 41 (6) ,507 - 515,06,2019	
Matsumura N. Nobusawa S. Ito J. Kakita A. Suzuki H. Fuji Y. Fukuda M. Iwasaki M. Nakasato N. Tominaga T, Natsume A. Mikami Y. Shinojima N. Yamazaki T, Nakazato Y. Hirato J. Yokoo H	Multiplex ligation-dependent probe amplification analysis is useful for detecting a copy number gain of the FGFR1 tyrosine kinase domain in dysembryoplastic neuroepithelial tumors	J Neurooncol 143 (1) ,27 - 33,05,2019	
Ikegaya N, Nakagawa E, Sugai K, Sasaki M, Saito T, Sumitomo N, Iijima K, Kimura Y, Kaneko Y, Iwasaki M	lctal deafness in drug-resistant MRI- negative epilepsy	Epileptic Disord 21 (2) ,215 - 220,04,2019	
Shigemoto Y, Sato N, Kimura Y, Morimoto E, Suzuki F, Ikegaya N, Iwasaki M, Nakagawa E, Matsuda H	Postoperative changes in the brain: Assessment with serial T2WI/FLAIR MR images in non-neoplastic patients	Epilepsy Research 154 (8) ,149 - 151,06,2019	
Ikegaya N. Motoi H, lijima K, Takayama Y, Kambara T, Sugiura A, Silverstein BH, Iwasaki M, Asano E	Spatiotemporal dynamics of auditory and picture naming-related high-gamma modulations: A study of Japanese-speaking patients	Clin Neurophysiol 130 (8) ,1446 - 1454,08,2019	
Oribe S. Yoshida S. Kusama S. Osawa S. Nakagawa A. Iwasaki M. Tominaga T, Nishizawa M	Hydrogel-Based Organic Subdural Electrode with High Conformability to Brain Surface	Sci Rep 9 (1) ,13379 - ,09,2019	
Acki Y, Hanai S, Sukigara S, Otsuki T, Saito T, Nakagawa E, Kaido T, Kaneko Y, Takahashi A, Ikegaya N, Iwasaki M, Sugai K, Sasaki M, Goto Y, Oka A, Ito M	Altered Expression of Astrocyte-Related Receptors and Channels Correlates With Epileptogenesis in Hippocampal Sclerosis	Pediatr Dev Pathol 1093526619855 488 - ,07,2019	
Kimura Y, Ikegaya N, lijima K, Takayama Y, Kaneko Y, Omori M, Kaido T, Kano Y, Iwasaki M	Withdrawal of deep brain stimulation in patients with gilles de la tourette syndrome	Movment Disorders 34 (12) ,1925 - 1926,12,2019	
Leo Gotoh a, Misa Yamada a, Kotaro Hattori b.c. Daimei Sasayama b.d. Takamasa Noda e, Sumiko Yoshida e, f, Hiroshi Kunugi b, Mitsuhiko Yamada	Lysophosphatidic acid levels in cerebrospinal fluid and plasma samples in patients with major depressive disorder.	Heliyon e01699,05,2019	リゾホスファチジン酸(Lysophosphatidic ackiLPA)は動物モデルにおいて感情制御に重要な役割を果たす事が報告されているので、大うつ勇性障害の患者と健常コントロールの脳脊髄液と血漿中のLPA濃度を測定して比較したところ、脳脊髄液と血漿のいずれにおいても大うの疾性障害のつ重症度との閉側は無かった。我々の結果は、LPA濃度が大うつ病性障害の臨床的なバイオマーカーととして適切でないことを示唆している。
Miyazaki M. Mori-Yoshimura M. Yamamoto T, Oya Y, Saito Y, Nishino I, Takahashi Y	Chronic sarcoid myopathy mimicking sporadic inclusion body myositis	Clin Neurol Neurosurg 182,84 - 86,05,2019	
Satoh Jl, Kino Y, Yanaizu M, Ishida T, Saito Y	Microglia express GPNMB in the brains of Alzheimer's disease and Nasu-Hakola disease	Intractable Rare Dis Res 8 (2) ,120 - 128,05,2019	
Ono CT, Yu Z, Kikuchi Y, Kunii Y, Hino M, Matsumoto J, Nagaoka A, Ito J, Iwasaki Y, Hagihara H, Miyakawa T, Yoshida M, Saito Y, Niwa SI, Yabe H, Kakita A, Tomita H	Minimal amount of tissue-based pH measurement to improve quality control in neuropsychiatric post-mortem brain studies	Psychiatry Clin Neurosci 73 (9) ,566 - 573,05,2019	組織DHとFNA integrityは神経精神疾患のヒト死後脳研究における重要な品質管理指標である。しかしoHは組織量の制限があるのであまり測定されてこなかった。この研究では、限り場のヒト死後脳組織量での組織のH評価のフロトコルを開発し、EVを検討した。マウス総組織を用いた予備実験に基づいて脳組織と水分の適切を割合を決め思いと信準的な量の52例の死後脳組織をヌクレアーゼフー水でホモシェナイズUnLab UltraマイクDoH電極を用いてpHを測定した。駅内容量による新たなプロトコルに基づいた。H別定値は、指導的なプロトコルに基づいた。出来の経過半プロトコルに基づいた。中別定値は、指導的なプロトコルに基づいた測定値と有態に相関した。現在の標準プロトコルの1分如1の組織量で、死後脳組織の正確定質を評価し、以後の解析にはすることができることがわかった。このプロトコルによって交換因子を減少させ、死後脳研究の生物学的現象の検出を改善させ得る。
Kimura Y, Shioya A, Saito Y, Oitani Y, Shigemoto Y, Morimoto E, Suzuki F, Ikegaya N, Kimura Y, Ijima K, Takayama Y, Iwasaki M, Sasaki M, Sato N	Radiologic and Pathologic Features of the Transmantle Sign in Focal Cortical Dysplasia: The T1 Signal Is Useful for Differentiating Subtypes	AJNR Am J Neuroradiol 40 (6) ,1060 - 1066,05,2019	
Kurihara M. Koda H. Aono H. Sugimoto I. Sakurai Y, Sano T. Saito Y. Murayama S. Mori M	Rapidly progressive miliary brain metastasis of lung cancer after EGFR tyrosine kinase inhibitor discontinuation	An autopsy report. Neuropathology 39 (2) ,147 - 155,05,2019	
Mitsutake A, Tamai T, Kamisawa A, Sugiyama Y, Sato T, Katsumata J, Seki T, Maekawa R, Hideyama T, Saito Y, Shiio Y	Familial neuronal intranuclear inclusion disease complicated by subcortical hemorrhage	Neurol Clin Neurosci 7 (3) ,136 - 138,05,2019	
Takahashi Y, Uchino A, Shioya A, Sano T, Matsumoto C, Numata-Uematsu Y, Nagano S, Araki T, Murayama S, Saito Y	Altered immunoreactivity of ErbB4, a causative gene product for ALS19, in the spinal cord of patients with sporadic ALS	Neuropathology 39 (4) ,268 - 278,05,2019	
Ishiura H. Shibata S, Yoshimura J, Suzuki Y, Qu W, Doi K, Almansour MA, Kikuchi JK, Taira M, Mitsui J, Takahashi Y, Ichikawa Y, Mano T, Iwata A, Harigaya Y, Matsukawa MK, Matsukawa T, Tanaka M, Shirota Y, Ohtomo R, Kowa H, Date H, Mitsue A, Hatsuta H, Morimoto S, Murayama S, Shio Y, Saito Y, Mitsutake A, Kawai M, Sasaki T, Sughima Y, Hamada M, Ohtomo G, Terao Y, Nakazato Y, Takeda A, Sakiyama Y, Umeda -Kameyama Y, Shinmi J, Ogata K, Kohno Y, Lim SY, Tan AH, Shimizu J, Goto J, Nishino I, Toda T, Morishita S, Tsuji S	Noncoding CGG repeat expansions in neuronal intranuclear inclusion disease, oculopharyngodistal myopathy and an overlapping disease	Nat Genet 51 (8) .1222 - 1232.05.2019	

著者、発表者等	論文名、演題名等	掲載誌、学会等	成果又は特記事項
Tsujimoto K, Mizuno K, Nishida D, Tahara M, Yamada E, Shindo S, Kasuga S, Liu M.	Prism adaptation changes resting-state functional connectivity in the dorsal stream of visual attention networks in healthy adults: A fMRI study.	Cortex (119) ,594 - 605,10,2019	
Tashiro S, Oku Y, Gotou N, Sugano T, Kikuhara K. Nakamura T, Suzuki H, Endo N, Miyata C, Mizuno K, Ishii N, Asato Y.	Orthotic treatment for refractory plantar ulcers using distribution assessments of sensory disturbance and dynamic plantar pressure in patients with Hansen's disease: A case series.	J Dermatol 46 (7) ,248 - 250,07,2019	
Tsujimoto K, Mizuno K, Kobayashi Y, Tanuma A, Liu M	Right as well as left unilateral spatial neglect influences rehabilitation outcomes and its recovery is important for determining discharge destination in subacute stroke patients.	Eur J Phys Rehabil Med 05,2019	
Bando K., Honda T., Ishikawa K., Takahashi Y., Mizusawa H., Hanakawa T.	Impaired adaptive motor learning is correlated with cerebellar hemispheric gray matter atrophy in spinocerebellar ataxia patients: A voxel-based morphometry study.	Frontiers in Neurology, 10.	
Fujii T, Takeshita E, Iwata Y, Yajima H, Nozaki F, Mori M, Kumada T.	Cumulative jerk as an outcome measure in nonambulatory Duchenne muscular dystrophy	Brain and Development	
Komaki H., Maegaki Y., Matsumura T., Shiraishi K., Awano H. Nakamura A. Kinoshita S. Ogata K., Ishigaki K., Saitoh S., Funato M., Kuru S., Nakayama T., Iwata Y., Yajima H., Takeda S.	Early phase 2 trial of TAS - 205 in patients with Duchenne muscular dystrophy	Annals of Clinical and Translational Neurology	
Okuyama K., Kawakami M., Tsuchimoto S., Ogura M., Okada K., Mizuno K., Ushiba J., Liu M.	Depth Sensor-Based Assessment of Reachable Work Space for Visualizing and Quantifying Paretic Upper Extremity Motor Function in People with Stroke.	Physical therapy	
Nakayama K. Yamamoto T, Oda C, Sato M, Murakami T, Horiguchi S	Effectiveness of Lee Silverman Voice Treatment? LOUD on Japanese-speaking patients with Parkinson's disease	Rehabilitaion Research and Practice 10,2019	Lee Shilverman Voice Treatment LOUDの日本人における長期的効果について検討した。声量は訓練1年後まで有意に効果が継続した。発話明瞭度は短期的には効果があったが、長期的な効果はみられなかった。
	Caregiver burden and related factors among caregivers of patients with myotonic dystrophy type 1	Journal of Neuromuscular Diseases 12,2019	
Shigemoto Y, Sato N, Kimura Y, Morimoto E, Suzuki F, Ikegaya N, Wasaki M, Nakagawa E, Matsuda H	Postoperative changes in the brain: Assessment with serial T2W/FLAR MR images in non-neoplastic patients.	Epilepsy Res 154,149 - 151,05,2019	この研究の目的は、非連痛性患者の連続T2WI/FLAIF画像の外科的マージンにおける高信号病変の価後変化を調査することでした。難治性でんかんの手術を受けた27人の患者(17人の限局性皮質異形成症と10人の海馬硬化症)の71の 修修MR画像を抒情した。T2WI/FLAIF-高信号病変のサイズと形状は、3点グレーティングラステムを使用して開発 的に評価された。衝後発作または脳波接流(EEG)スパイと進行シェートとの原理も評価された。その影味、フォ ロース・アングライン・アングライン・アングライン・アングラステムを使用して開発している。 EEG スパイツの存在は、T2WIFLAIF-高信号病変の拡大と有機に関連をいた。これでは、10人の発作またに対している可能性がある。 拡大が一部の非理痛性患者で観察され、この発見は残存領域のでんかん発生と相関している可能性がある。
Ogawa M. Sone D. Beheshti I, Maikusa N. Okita K. Takano H. Matsuda H	Association between subfield volumes of the medial temporal lobe and cognitive assessments	Heliyon 5 (6) .601828 - .07.2019	認知評価と神経画像診断は、アルツハイマー病(AD)に代表される認知症を診断するために、臨床診療で日常的に組み合わされている。モントリオール認知評価(MoCA)は、軽度認知障害(MCI)および軽度ADのスクリーニングに、ミニメンタルステード検査(MMSE)よりも適していると報告されている。一方、内側側線架のサブフィールドボリューム混定は、ADの艦別診断に全時期発見のだめ、展近重要と考えられています。、内側側線架のサブフィールドボリュースポールドボ および関策する海馬外構造が、MCIおよびAD)患者の設知評価スコアの低下に寄与するかを明らかにすることである。機能がHMCIの日本人患者14人とADの可能性のある17人の日本人患者14人とADで表すらないまである。それでいることの機能を関連を使用したである。機能の中のアリおよびLDFATOの50人の健康な高結晶を募集した。MMSE、Wechself Memory Scale-Revised (生別の調整により、高齢保度11および172端調画像を使用した「ルギーメージクおよび野別評価を与った。年齢とし会はAIMのアリおよび、NMSE、Wechself Memory ISAよびIN、MOCA (MMCA-4) の日本経験を使用したイメーシングおよび野別評価を与った。年齢とし会はAIMの関係に対して、MRCA (MMCA-4) の日本経験を使用したイメーシングおよび野別評価を与った。年齢とリコントロールと比較して、MCIRよびADの患者は、アンモニス角(CA)1、CAと、プロトマン領域(BA)35、日本8台、日本の場に高くMRCA (JMMSEよりも高くMRCA) エールド・経角が関ルを示した。オペての参加者は、CA1、DG、海馬台、ERC、およびBA3Gの認知評価スコアとサブフィールドが加まりまった。14年のの場に高い相関係数(CA)方で、JMCA (JMMSEよりもありまで) は、内側側頭架のサブフィールドが出土力との情報を含むとなった。これらの場に高いていますとから、特定のサブフィールドがMSH前のIN vvo分析とMCCA-JMSMSCよりも、MRMBを示し、CA1、DG、海馬台、ERCのサブフィールドがリュームと相関のあられた。これらの原実は、内側側頭架のサブフィールドが出土を加え、MRMSEは一般に関係を合いている。
Sugiyama A. Sato N. Kimura Y. Shigemoto Y. Suzuki F. Morimoto E. Takahashi Y. Matsuda H. Kuwabara S.	Exploring the frequency and clinical background of the Zebra sign in amyotrophic lateral sclerosis and multiple system atrophy.	J Neurol Sci 401.90 - 94.06.2019	防薬條性側素硬化症(ALS)では、作相等強調磁気共鳴画像(PADRE)の中心前回における「セブラ氷線」が、上拉連 動ニューロン(UMN) 関与の可能性のあるイメーシングパイオマーカーとして限近報告された。以前の研究では、「セ ブラ氷線」により、ALS患者と健常者を優れた精度で区別できることが示されています。 ALS患者と健常者を区別する ため、ALS患者と健常者を優れた精度で区別できることが示されています。 ALS患者と健常者を区別する。 PADREの「セプラ彩線」は、26人のALS患者、26人の多条紙受験症(MASA)および26人の健康なコントロールで評 働され、それぞれ50%、23%。 および3%と関係された。「セブラ34線」のあるALS患者は、兆候のない患者よりも 悪いUMN資料はファクを示した。PADREの「セブラ38線」は、MSALもも存在し、ALSに特異的ではないものの、神経 変性障害の連動皮質内のUMNの変性を反映している可能性がある。
Sone D. Maikusa N. Sato N. Kimura Y, Ota M. Matsuda H.	Similar and differing distributions between 18F-FDG-PET and arterial soin labeling imaging in temporal lobe epilepsy	Front Neurol 10.318 - .04.2019	習景: てんかん患者の動脈スピンラベリング(ASL)の使用が増加しているにもかかわらす、機能分離を含む脳の局所 分布パターンとFDG-PETとの対域についてはほとんど知られていない。ここでは、側頭葉てんかん(TLE)における FDG-PETとASLの地域的な一致と不一致を調査した。方法: 発作間ASLおよびFDG-PETスキャンを受けた片側性 TLE患者27人を募集した。これらの画像は、Statistical Parametric Mapping 12を使用して空間的に上現化され、 ASLとFDG-PETの両方の地域値は、側頭葉、隣接疫質、皮質下構造、および小脳を含む20ポリューム(VOI)内の PMODソフトウェアを使用して計算された。37人の健康が服金のASL通常と分析あまじれなれた。 に側頭葉と前頭葉で再想な側性を示したが、FDG-PETで再想な異常はより広範であり、最と乳頭上値を含みていた。 随機球な関連とい面球でものみられた。 スタ側は、FDG-PETでのみられた。交対側と比較に関連して関係していていていていていていていていていていていていていていていていていていてい
Ota M. Noda T. Sato N. Hidese S. Teraishi T. Setoyama S. Matsuda H. Kunusi H.	The use of diffusional kurtosis imaging and neurite orientation dispersion and density imaging of the brain in bipolar disorder.	J Affect Disord 251,231 - 234,05,2019	開景: 拡散尖度イメージング (DKI) および神経突起方位分散および密度イメージング (NODDI) は、人間の脳の神経 結臓の特性を明らかにする新し、地部磁気共鳴イメージング (dMF?ぞ) 技術である。この研究では、これらのdMF/R技 権により双極性障害 (BD) 患者の大脳の構造変化を評価した。 が法: 31人の日本人民D走着 (男性 女性: 14/17; 31人中29人が右利き・平均年齢: 39.5±±9.3) および28人の健 康な石利きの日本人級を着が3-テスラのMF/Rを受けた。2つのグループ間でdMF/R トリックを比較し、メトリック間の 関係を調べた。 の関係を調べた。 はの異常の参加者の大部分は、抗うつまと抗精神疾患を限用していた。BDの液維精造の変化に関する結論を引き は要: BD開催は、コントロールと比較し、そ下が後頭まれるどび各様状皮質 (PCC) の平均尖度、および右-PCCの神 核突起辺度指数を大幅に減少させた。方向分数指数については、BDョ者の左軍無管領域の有意な減少が移出された。 総論: 新しんMF/R に減少させた。方向分数指数については、BDョ者の左軍無管領域の有意な減少が移出された。 を認識・新しんMF/R は、関いなせました。 を認識・新したMF/R は、関いなは、BDの微細細細細細細の変化を検討するのにNODDIとDMが有用であることを示している可能性がある。これらの技術は、神経画像研究の主流の方法として採用されることが予想される。
Beheshti I. Maikusa N. Matsuda H	Effects of aging on brain volumes in healthy individuals across adulthood.	Neurol Sc 40 (6) .1191 - 1198.06.2019	このレトロスペクティブ研究では、成人期の健康な脳の脳容積に対する年齢の影響を分析した。 MPIスキャンと関連情報がMJテータペース(brain-development.org/ixi-datasetから取得された563人の健康な関係(年齢範囲:20-86、55%の女性)の脳の脳溶精と年齢の相関を調査したが、回帰分析を行って、年齢が脳全体の体積に及ぼす影響と、選択した地域の体積測定を評価した。全脳分析により、灰白質(GM)と年齢の間に負の縁形態解外あり、年齢とら、選択(以下地域の体積測定を評価(CSF)、おどが成人期のGM / MM比率の関係に非線形/ターンボルあることが明らかになった。 (機関地の体積が対は、加齢に下の場所ある、事件を発表して非常形の年齢に関連した地域の体積変化を元がた。我内の現代の見は、、傾向 の脳の構造が成人期にどのように変化するかを理解することに貢献し、バーキンソン病やアルツハイマー病などの加齢に伴う神経障害における病的な加齢に伴う神経の変化に対処するのに役立つ。

著者、発表者等	論文名、演題名等	掲載誌、学会等	成果又は特記事項
Eguchi Y, Noda Y, Nakajima S, Tsugawa S, Kida H, Piltman E, Graff-Guerrero A, Chakravarty MM, Takayama M, Arai Y, Matsuda H, Mimura M, Niimura H,	Subiculum volumes associated with memory function in the oldest-old individuals aged 95? years and older.	Geriatr Gerontol Int. 19 (4) ,347 - 351,04,2019	目的:最高齢の個人を対象としたコホート研究はほとんど行われていない。海馬の海馬台は却慢機能に関連すると考えられており、この構造の登縮は構造性の健度認知障害からアルツハイマ・解への転換をもたらす可能性がある。そのため、Ackenbrooke's Cognitive Examination III (ACE-III) と呼ばれる新しい窓別発産ニ海医な磁気 共和感受が形式である Multiple Automatically Generated Templatesを使用して、95歳以上の個人の海馬サプフィールドボリュームと記憶機能の関係を潜水に、55歳以上の展局齢の老人を対象とした売川195・試験のコホートデータの一部が使用されました。合計10人がすべての試験を売了した。MAGGT脳を適用して、海馬のサプフィールドは特を推定した。相関が折と重回分析を実行して、ACE-IIIに増入コアと海馬のサプフィールドを含むサプフィールドボリュームの関係を調べた、公民三間に増入コアと海馬のサプフィールドを含むサプフィールドボリュームの関係を調べた。公民主義を表した。10元以上の最近の大田・田・田・田・田・田・田・田・田・田・田・田・田・田・田・田・田・田・田・
Enokizono M. Sato N. Ota M. Shigemoto Y. Morimoto E. Oba M. Sone D. Kimura Y. Sugai K. Sasaki M. Ikegaya N. Iwasaki M. Matsuda H.	Disrupted cortico-ponto-cerebellar pathway in patients with hemimegalencephaly.	Brain Dev 41 (6) .507 - 515,06,2019	目的:小脳の不成熱と損傷は、広範囲の神経運動障害、神経認知障害、行動障害、早産に関連している。拡散テンソルMRイメージングを使用して、小児発症の重度でんかんの小児における構造的皮質・橋一小崎 (CPC) 結合障害を検討した。 と4の片側大脳症 (HME) 患者、病因不明の患者の28ウェスト症候群 (MS)、およびてんかんの病題を納引し 海常もない25の小児疾由コントロール破壊者でCPCトラクトを確成した。 CPCトラクトを特定するために、 右および 左の大脳脚それぞれに個別にシードROIを配置した。小脳へのCPCトラクトの分布パターンと臨床所見との相関を評価した。 「新聞」といるのとでは、一般のCPCトラクトは20(80.0%) および21(751年間 住職・未知の病因グループのコントロールおよびMSでは、両側のCPCトラクトは20(80.0%) および21(751年間 住職・未知の病因グループのコントロールおよびMSでは、両側のCPCトラクトは20(80.0%) および21(751年の総計・100年) 「一般・大型・100年) 「一般・大型・100年) 「一般・大型・100年) 「一般・大型・100年) 「一般・大型・100年) 「一般・大型・100年) 「一般・100年) 「一般・100
Shigemoto Y, Sone D, Ota M, Maikusa N, Ogawa M, Okita K, Takano H, Kato K, Kimura Y, Morimoto E, Suzuki F, Fujii H, Sato N, Matsuda H	Voxel-based correlation of 18F- THK5351 accumulation and gray matter volume in the brain of cognitively normal older adults.	EJINMMI Res 9 (1) .81 - .08.2019	問景: 神経原線維変化 (NFT) は主に人間の加齢とともに内側側頭葉に蓄積するが、認知的に正常な高齢者のNFT蓄積と灰白 保 (GM) 量との相関関係を調べた。 別するの場合である。ここでは、18F-THK5351の蓄積とボクセルレベルでの (GM量との相関関係を調べた。 別するとが、11C-ビッツバーグ化合物-Bおよび18F-THK5351 PETスキャン、および神経心理学的評価 構造的級気共鳴画像法、11C-ビッツバーグ化合物-Bおよび18F-THK5351 PETスキャン、および神経心理学的評価 を受けた47人のアミロイド陰性の認知的に正常な高齢者(650±±7。9年、26人の女性)を募集した。 協気共鳴および18F-THK5351 PET画像は、統計的パラメトリックマッピング12を使用して空間的に正規化された。18F- THK5351 基積とGMボリューム間のボクセルことの相関は、生物学的パラメトリックマッピングソールボックスを使用して評価した。 記録: 11店1-THK5351の蓄積とGMボリュームの間の有意な負の相関(p<±0.001)が両側の側側頭葉で検出された。 ボクセルごとの相関分析により、アミロイドβ、沈着の近い個体の内側側頭葉に対ける18F-THK3351 蓄積とGM層の有 都な負の相関が明らかになった。これらの結果は、人間の加齢における原発性加齢性タウオバチーの病那生理のより良い 世報に貢献するかもしれない。
Beheshti I, Hossein-Abad HM. Matsuda H. the Japanese- Alzheimer s Disease Neuroimaging Initiative.	Identification of Alzheimer's Disease on the Basis of a Voxel-Wise Approach	Appl Sci 9,3063 - .07,2019	アルツハイマー病(AD)の堅牢な予測は、ADの早期診断に役立ち、AD患者の治療をサポートする可能性がある。本研 発では、ADの早期発見と軽度認知障害(MC)変換の予測のために、脳全体のボクセル単位のメリットペースの特徴選 状法に基づく目動コンピューター支援診断(CAD)フレームワークを開発する。ベースライン低気共鳴画像(MH7) データを使用した分析。また、ホウセル単位のメドリックAD分類をMC製資券割に対するさまさまなMCH2を開始能の 影響を調査した。507人のJ-ADN診測者(146人の健康なコントロールIHC)。女正したMCI はMCI を持つ102人 連行性MCI はMCI を持つ112人、および14イスのAD)第2金画像解像は(ダは方ち、2、4、8、8よび16年70102人 4つの個末約に関連する診断プループのペア。2mmの空間分解能で10倍の文差検証執路を打してナポートペクターマ シン分類器を同由して、提挙されてCADフレームワープは、AD / 健康プントロールの測で91、13%、アイアが8、 81、12%、および81、73%の分類精度をそだらした。それぞれsMCI / pMCI、sMCI / AD、およびpMCI / HC。実験 結果は、空間分解能が低い(つまり、2 mm)ことで、ADの神経損失に関連する脳萎縮を温筋するためのより整字な情 物が得られることを示している。
Sato K. Mano T. Matsuda H. Senda M. Ihara R. Suzuki K. Arai H. Ishii K. Ito K. Ikeuchi T. Kuwano R. Toda T. Iwatsubo T. Iwata A: Japanese Alzheimer's Disease Neuroimaging Initiative.	Visualizing modules of coordinated structural brain atrophy during the course of conversion to Alzheimer's disease by applying methodology from gene co-expression analysis.	Neuroimage Clin 24.101957 - .07.2019	目的: 高度な接続性を備えた脳鎖域のモジュール化された構造整線と、もともと数節なしの階層的クラスタリング手法である加重遺伝子共発現ネットワーク解析(WGCNA)を使用して、アルツハイマー病(AD)の進行に伴うその縦断的変化を特定することを目的とした。この方法はもともと遺伝子分析で使用される。 方法: 日本アルツハイマー病ニューロイメージングイニシアチブ(J-ADNI)研究のベースラインに、後期経度認知障害 (MCI)の参加者を含めた。FreeSurferソフトウェアの計算に基づいて、164個のパーセル化された認め領域・構造の正規化およびZ変換された構造がリュームまたは皮質原データを作入した。高度に相互接続された構造を網パターンを持つモジュールを抽出するためにMGCNAを適用し、特定されたモジュールと間線末ADが進行との相関と語がといると観撃・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・
Ogawa M. Maruo K. Sone D. Shimada H. Suzuki K. Watanabe H. Matsuda H. Mizusawa H	Longitudinal analysis of risk factors for dementia based on Mild Cognitive Impairment Screen results and questionnaire responses from healthy Japanese individuals registered in an online database.	Alzheimers Dement (N Y) 5.347 353.08.2019	前書き:  競別電に対する改善策を早急に開発する必要があるにもかかわらす。疾患惨能薬は開発されていない。間疾試験を実施するには、参加者募集のための効率的なプロトコルを確立する必要がある。このニーズを施にすために、大規模なオンラインレジストリシステムであるオレンジプランの統合レジストリ(IROOP?)が健康な個人向けに作成された。認知症の施設の子はの月の2014間隔で100mの研究で議論されてきたが、いくつかの愛因は議論の余地がある。本研究の目的は、IROOP?テータを使用して、18か月の長期にわたる認知機能の長期的変化に影響を与える要因を調査することである。方法: この研究では、認知症のリスクを予測するための総合テータの縦断的変化を評価し、2016年7月5日から2018年1月15日までにFDOOP?と登録された473人、例は175人、女性298人、平野中結596ま101歳)を対象としましたベースラインで最初のアンケートと認知機能の簡単な評価(軽度認知障害スクリーン)を完了し、ベースライン後少なくとしな、「回域に関助のアンケートと認知機能の簡単な評価(軽度認知障害スクリーン)を完了、ベースライン後少なくとない。統計が高速アンケートと認知機能の簡単な評価(軽度認知障害スクリーン)を完了し、ベースライン後少なくとは、統計の音楽が単位との行に設定された。 就学、アンドージョン23人、線形混合効果モデル用にSASのバージョン9.4のMXED手順を使用して実行された。各分析で、統計的音楽が単位との行に設定された。 就要、表現、単位、自然の音楽が出たりでに設定された。 就要、表現、生活の質、認知を含む病歴が認知機能の長期的変化に影響を与えることがわかった。 討論: 認知症の多因子性の病因を考えると、認知機能を維持するためには、1つのライフスタイル要因に焦点を合わせるのではなく、複数のドスインを対象とする予防策が必要である。
Hata K, Nakamoto K, Nunomura A, Sone D, Maikusa N, Ogawa M, Sato N, Matsuda H,	Automated Volumetry of Medial Temporal Lobe Subregions in Mild Cognitive Impairment and Alzheimer Disease	Alzheimer Dis Assoc Disord 33 (3) .206 - 211.09.2019	目的:アルツハイマー病(AD)の診断には、海馬サブフィールド音精測定が海馬全体(WH)音構測定よりも有用である可能性がある。この研究はこれを確認しようとした。 力法: 認知機能正常(CN)参加者と軽度認知障害(MCI)またはアルツハイマー型認知症(AD)患者を高解像度T2Wおよび3次元T1WI MRを用て検査した。内側側頭部亜区域音構測定法を使用して、MCIおよびADがCNの調別力を調査しました。 起者: 2015年4月から2016年10月までに、CN参加者30人、健応性MCI患者30人、AD患者49人を募集した。 経課: ADの過去、海馬台、線内皮質、アンモニス1を合わせた体幕の規則力が帰る部かった(曲線下面積、(AUC) = 0.915: 85.7%/問題、86.7%/結算性、86.1%/補資にあり、WH7V1」ュームより有事態に高かった(AUC = 0.87:90の%・感、75.5%/特異性、86.1%/補資にアあり、WH7V1」ュームよりもわずかに高かった(AUC = 0.730:56.7%/思索と、900 %/持責性、73.3%の精度)。 10.747:80.00%/認定、73.3%/的講性)が、WH7V1 ュームよりもわずかに高かった(AUC = 0.730:56.7%/認定、900 %/特責性、73.3%の精度) 13.1年4日、現内皮質、アンモニス角1を組み合わせて使用??すると、AD患者のWH7V1 ュームまたは単一のサブフィールドと比較して、診断精度が向上する場合がある。
Matsuda H. Yokoyama K. Sato N. Ito K. Nemoto K. Oba H. Hanyu H. Kanetaka H. Mizumura S. Kitamura S. Shinotoh H. Shimada H. Suhara T. Terada H. Nakatsuka T. Kawakatsu S. Hayashi H. Asada T. Ono T. Goto T. Shigemori K	Differentiation Between Dementia With Lewy Bodies And Alzheimer's Disease Using Voxel-Based Morphometry Of Structural MRt: A Multicenter Study	Neuropsychiatric Disease and Treatment 15,2715 - 2722.09,2019	習景: DLB患者はコリンエステラーゼ阻害剤に対してよりよく反応するが、時には肉精神薬に対して感受性を示し、臨 疾状態の悪化を引き起こす可能性があるため、レビール体(DLB)およびアルツハイマー病(AD)による諸知症の匿別 診断は特に重要である。構造MHRを使用した形前ボクセルペースの形態計測(VBM)により、DLB患者の海馬容積は正 等であるが、質明中配積減減の萎縮がるとしたが以前に明らかにされている。 目的: この多施設料関研究の目的は、内側側頭葉構造上加えて脳幹のVBMがADとDLBの鑑別診断を改善するかどうか を判断することである。 力法:磁界強気の異なるさまざまなMHスキャナーを使用して、10の研究所からDLB(23分人の患者)またはAD 力法:磁界強気の異なるさまざまなMHスキャナーを使用して、10の研究所からDLB(23分人の患者)またはAD (385人の患者)と臨床的に診断されて624人の患者を避及的に選択した。すべての場合において、VBMは3D T1強 調画線で実行された。周所参編の建設は、内側側頭葉(MTL)および骨側総幹(DBS)の通常の能やボリューム (VO) のテータペースと比較することにより、2スコアを使用して計算された。 DLBとADの頭側は、ス1632の VOのススコア海を使用して評価された。414人の患者のMHステータをトレーョルデータセットとして使用して対策基 等決定し、身かの10分が悪きのMHステータをトレーョルデータセットとして使用して対策基 等決定し、身かの10分が悪きのMHステートを表のスコアに関して整が拡かった。 Todexスコ を表したしましましましましましましましましましましましましましましましましましまし

著者、発表者等	論文名、演題名等	掲載誌、学会等	成果又は特記事項
Sugiyama A, Sato N, Kimura Y, Fujii H, Malkusa N, Shigemoto Y, Suzuki F, Morimoto E, Koide K, Takahashi Y, Matsuda H, Kuwabara S,	Quantifying iron deposition in the oerobellar subtype of multiple system atrophy and spinocerebellar ataxia type 6 by quantitative susceptibility mapping.	J Neurol Sci 407,116525 - ,10,2019	定量的磁化率マッピング(QSM)を使用して、多系統萎縮症(MSA-C)の小脳サブタイプの28人の患者、背積小脳失 間違6型(SCA6)の9人の患者、および23人の健康なコントロールの総鉄が着を評価した。2人のレビューアが、 熱、淡薄球、尾状株、赤株、黒葉、および70級電鉄核を含む砂場構造の単50%M値を独立して効果でした。QSM制定の診 筋的有用性を評価するために、受信者動作特性(FROC)が折が実行された、黒葉のQSM値は、HCグループと比較して MSA-Cグループで有態に高かった(G=007)・小脳線対核のQSM値は、MSA-Cで58人の名およびHC/D・プレープも 有意に高く(G+001)、HC&と比較してSCA6患者で有意に低かった(G=027)。小脳線対核のQSM値は、MSA- Cの疾患期間と相関していたが、SCA6の疾患期間と34期目でいた。RO分析では、MSA-CをSCA6と区別するための優れ実態では、MSA- CをSCA6と区別するための優れ実態度(曲線下面域入UC)、G-905)。およびMSA-Cと憧憬対照を区別するためた 北に精錬(AUC 0834)を示した。(SSM)、MSA-C書名の農帯はよびりが脳微性核の関加した循紙作業部別すること かできる。これらの結果は、小脳値状核における鉄蓄積の増加がMSA-Cに関連する神経変性に続発する可能性があることを示唆している。
Yokoi Y, Takano H, Sakata M, Maruo K, Nakagome K, Matsuda H	Discrete effect of each mild behavioural impairment category on dementia conversion or cognitive decline in patients with mild cognitive impairment.	Psychogeriatrics 19 (6) 591 - 600,11,2019	バックグラウンド 神経精神症状(NPS)は、軽度認知障害(MCI)患者の認知症への転換の危険因子として認識されている。NPSの早期 発見により、このような患者への介入が可能となる。本研究では、軽度の行動障害を使用して、認知障害のない人から認 知症の人まで、幅広い患者におけるNPSの役割を調査した。 方法 日本のコホート研究で、軽度認知障害のある合計234人の患者が最大3年間追跡された。研究中に認知症を発症した患者 と発症しなかった患者の報節的データを統計的に分析した。 結果 コックス回帰分析により、認知症変換に関しては異常な知覚と思考のみが有意であることが明らかになった。さらに、混 る効果モデルは、ベースラインの軽弦の行動障害症状が、ミニメンタルステート検査やアルツハイマー病評価スケールの 認知 ザブスケールスコアの変化などの認知軌道に影響を与えないことを示した。 結論 異常な知覚と思考内容のみが認知症の危険因子であり、NPSは軽度認知障害の患者の認知機能の低下につながらない可能性がある。
Ueda R. Matsuda H. Sato N. Iwasaki M. Sone D. Takeshita E. Shimizu-Motohashi Y. Ishiyama A. Saito T. Komaki H. Nakagawa E. Sugai K. Sasaki M. Kaga Y. Takeichi H. Inagaki M.	Alteration of the anatomical covariance network after corpus callosotomy in pediatric intractable epilepsy.	PLoS ONE 14 (12) <sub>6</sub> 0222876 -,122019	目的:     この研究は、構造的MRIから派生した解剖学的共分散のグラフ理論分析を使用して、脳楽離断術(CC)後に灰白質の接続パターンがどのように変化するかを明らかにすることを目的とした。     紹知および万法・     COを受けたてんかん患者21人を募集した。登録基準が適用された: (1) 脳MRIで病変が特定されなかった。 (2) 他の脳外科手術の無性なし。 (3) 補前MRI評価時の年齢が3歳以上18歳以下、最も一般的なてんかん症候群は、レノックネ・ガストー症候群(11人の患者)である。ボクセルベースの形態計測では、CC前およびCC後の患者の正規だった灰白質の機能をSPM12で分析しました。(オウセルベースの形態計測では、CC前およびCC後の患者の正規だった灰白質の機能をSPM12で分析しました。(オウセルベルのしき)心師・OOOS (家族との影響・細定)、第二に、両方のグループの画像は、SPM8を備えたで含わり、おつなり、一般であり、一般により、一般であり、一般では、一般であり、一般では、一般であり、一般であり、一般であり、一般であり、一般であり、一般であり、一般であり、一般であり、一般ではなり、一般であり、一般であり、一般であり、一般であり、一般であり、一般であり、一般であり、一般であり、一般であり、一
Sugiyama A, Sato N, Kimura Y, Shigemoto Y, Suzuki F, Morimoto E, Takahashi Y, Matsuda H, Kuwabara S	Exploring the frequency and clinical background of the "zebra sign" in amyotrophic lateral sclerosis and multiple system atrophy.	J Neurol Sci. 401,90 - 94,06,2019	前妻婦性側索硬化症患者の頭部MRで認める運動皮質の"Zebra sign"が、多系統萎縮症においても認めることを初めて報告した。また錐体路症状との関連も示唆された。
Shigemoto Y, Sato N, Kimura Y, Morimoto E, Suzuki F, Ikegaya N, Iwasaki M, Nakagawa E, Matsuda H.	Postoperative changes in the brain: Assessment with serial T2WI/FLAIR MR images in non-neoplastic patients.	Epilepsy Res. 154,149 - 151,08,2019	非腫瘍性てんかん患者の術後において、摘出腔周囲のT2WIやFLAIR高信号域は経時的に増大することがあり、術後のてんかん発作やEEG spikeとの関連が示唆された。
Mori-Yoshimura M, Mizuno Y, Yoshida S, Ishihara N, Minami N, Morimoto E, Maruo K, Nonaka I, Komaki H, Nishino I, Sekiguchi M, Sato N, Takeda S, Takahashi Y.	Psychiatric and neurodevelopmental aspects of Becker muscular dystrophy.	Neuromuscul Disord. 09,2019	ベッカー型筋ジストロフィー患者において、精神症状を高率に合併し、また軽度の脳の萎縮も合併することを明らかにした。 た。
Matsuda H, Yokoyama K, Sato N, Ito K, Nemoto K, Oba H, Hanyu H, Kanetaka H, Mizumura S, Kitamura S, Shinotoh H, Shimada H, Suhara T, Terada H, Nakatsuka T, Kawakatsu S, Hayashi H, Asada T, Ono T, Goto T, Shijsemori K.	Differentiation Between Dementia With Lewy Bodies And Alzheimer's Disease Using Voxel-Bassed Morphometry Of Structural MRI: A Multicenter Study.	Neuropsychiatr Dis Treat. 15,2715 - 2722,09,2019	アルツハイマー型器知底とびまん性レビー小体型器知底の鑑別を、VBMを用いて他施設共同研究を行った。脳幹と側頭葉内側の体積比が鑑別に有用であった。
Sugiyama A, Sato N, Kimura Y, Fujii H, Maikusa N, Shigemoto Y, Suzuki F, Morimoto E, Koide K, Takahashi Y, Matsuda H, Kuwabara S.	Quantifying iron deposition in the cerebellar subtype of multiple system atrophy and spinocerebellar ataxia type 6 by quantitative susceptibility mapping.	J Neurol Sci. 407,116525 - ,10,2019	多系統萎縮症小脳型と脊髄小脳変性症6型の鑑別を、深部灰白質の鉄沈普をQSMにて定量して行ったところ、小脳歯状核に優位な差異を認めた。
Suzuki F, Sato N, Ota M, Sugiyama A, Shigemoto Y, Morimoto E, Kimura Y, Wakasugi N, Takahashi Y, Futamura A, Kawamura M, Ono K, Nakamura M, Sano A, Watanabe M, Matsuda H, Abe O.	Discriminating chorea-acanthocytosis from Huntington's disease with single-case voxel-based morphometry analysis.	J Neurol Sci. 408,116545 - ,10,2019	有棘赤血球網路病5例とハンチントン病11例をVSRADで比較したところ有棘赤血球網路病では全例に対称性の損疾周囲の白質の容積低下を認めたが、ハンチントン病では全例で見られなかった。VBN酸折で有棘赤血球網路病ではハンチントン病と比較して視床周囲の白質の容積低下を認めた。類似した循床所見を呈するこれらの2疾患の鑑別にこの萎縮パターンは有用と思われた。
Murofushi Y, Hosoyama K, Kubota K, Sato N, Takahashi Y, Takanashi JI.	Cerebral white matter lacerations in children caused by repetitive head trauma.	Brain Dev. 09,2019	小児期の繰り返す外傷により、脳の白質が剥離する特異的な所見を示すことを、脳のMRにて報告した。
Uehara K, Furuya S, Kita K, Numazawa H, Sakamoto T, *Hanakawa T	Distinct roles of brain activity and somatotopic representation in pathophysiology of focal dystonia.	Hum Brain Mapp 40,1738 - 1749,04,2019	
Ogawa M. Sone D. Beheshti I, Maikusa N. Okita K, Takano H, Matsuda H.	Association between subfield volumes of the medial temporal lobe and cognitive assessments.	Heliyon 5 (6) ,e01828 - ,06,2019	
Shigemoto Y, Sone D, Ota M, Maikusa N, Ogawa M, Okita K, Takano H, Kato K, Kimura Y, Morimoto E, Suzuki F, Fujii H, Sato N, Matsuda H.	Voxel-based correlation of 18F- THK5351 accumulation and gray matter volume in the brain of cognitively normal older adults.	EJNMMI Res 9 (1) ,81 - ,08,2019	
Daichi Sone, Iman Beheshti,Norihide Maikusa,Kyoji Okita, Hiroshi Matsuda	Association between subfield volumes of the medial temporal lobe and cognitive assessments	Heliyon 5,06,2019	
Miho Ota, Takamasa Noda, Noriko Sato, Shinsuke Hidese, Toshiya Teraishi, Shiori Setoyama, Hiroshi Matsuda, Hiroshi Kunugi.	The use of diffusional kurtosis imaging and neurite orientation dispersion and density imaging of the brain in bipolar disorder.	Journal of Affective Disorders 251,231 - 234,05,2019	新しい。MMは極を使用して下前頭束部、後帯状皮質及び双極性障害において重要な役割を果たす海馬域の疾患関連の変化を観察した。この観察結果はNODDIをDTKは双極性障害における微細組織の変化を検出することに有効であることを示しているこれらの技術はニューロイメージング研究の主流の内法として採用されることが予想される。
Gotoh L. Yamada M. Hattori K. Sasayama D. Noda T. Yoshida S. Kunugi H. Yamada M.	Lysophosphatidic acid levels in cerebrospinal fluid and plasma samples in patients with major depressive disorder	Heliyon 5 (5) ,05,2019	大うつ病性障害(MDD)は、居も一般的な精神障害です。しかし、臨床目的の生化学的マーカーはまだ確立されていません。 この研究では、脳脊髄液(CSF)とMDD患者の血漿サンブルの酵素免疫測定法を使用してLPAレベルを測定しました。 参加者は、CSF研究では52人の患者と49人の正常な健康対照、 血漿研究では47人の患者と44人の対照でした。 うつ症状の野畑には、日本部はHAMP)(全要17項目数)を使用しました。 LPAレベル(CSFまだは血漿)とMDDの診断まだは重症度、または句精神薬との関連性は認められませんでした。 結論として、我々のデータは、LPAレベルがMDDの実用的なパイオマーカーとして機能しない可能性が高いことを示唆 しています。
Tsuchimine S. Hattori K, Ota M. Hidese S. Teraishi T, Sasayama D. Hori H. Noda T, Yoshida S, Yoshida F, Kunugi H	Reduced plasma orexin-A levels in patients with bipolar disorder.	Neuropsychiatric Disease and Treatment 15,2221 - 2230,08,2019	オレキシンは、睡眠、食欲、覚醒の調節に関与する視床下部神経ペプチドであり、オレキシン系の変化は、精神障害の病態生理学に関係している。この研究の目的は、統合失調性、大鬱病性障害(MDD)、双極性障害(BD)の患者の血漿オレキシンAレベルが健常者と比較して異なるかどうかを調査することである。

著者、発表者等	論文名、演題名等	掲載誌、学会等	成果又は特記事項
Kobayashi, Sakamoto, Maruo, Shinmei, Mukai, Takahashi, Horikoshi	A Pilot Study on Efficacy and Tolerability of Cognitive Behavioral Therapy (CBT- FD) for Japanese Patients with Focal Dystonia	Neurology and Clinical Neuroscience 11,2019	
Narimasa Kumagai,Aran Ajika,Akio Hasegawa,Nao Kawanishi,Masaru Horikoshi,Shinji Shimodara,Kenichi Kurata,Bun Chino andToshi A.Furukawa	Predicting recurrence of depression using lifelog data: an explanatory feasibility study with a panel VAR approach	BMC Psychiatry 1 - 12,12,2019	
Kanie A, Kikuchi A, Haga D. Tanaka Y, Ishida A, Yorozuya Y, Matsuda Y, Morimoto T, Fukuoka T, Takazawa S, Hagiya K, Ozawa S, Iwata K, Ikebuchi E, Nemoto T, Roberts DL, Nakagome K	The Feasibility and Efficacy of Social Cognition and Interaction Training for Outpatients With Schizophrenia in Japan: A Multicenter Randomized Clinical Trial.	frontires in psychiatry 10 (589) ,08,2019	
Satomi Doi, Masaya Ito, Yoshitake Takebayashi, Kumiko Muramatsuand Masaru Horikoshi	Factorial Validity and Invariance of the 7- Item Generalized Anxiety Disorder Scale (GAD-7) Among Populations With and Without Self-Reported Psychiatric Diagnostic Status	FRONTIERS IN PSYCHOLOGY 9,09,2019	
Ghesquiere A, Bagaajav A, Ito M, Sakaguchi Y, Miyashita M	Investigating associations between pain and complicated grief symptoms in bereaved Japanese older adults	Aging & mental health 1 - 7,04,2019	
Ito M. Kim Y	Somatoform disorder and negative emotion: Clinical implication for psychotherapy	Psychiatry and clinical neurosciences 73 (9) ,09,2019	
Ito M. Miyamae M. Yokoyama C, Yamashita Y, Ueno O, Maruo K, Komazawa A, Niwa M. Honda M, Horikoshi M	Augmentation of Positive Valence System?Focused Cognitive Behavioral Therapy by Inaudible High-Frequency Sounds for Anhedonia	JAMA network open 2 (11) ,11,2019	
Glim S, Okazaki YO, NakagawaY, Mizuno Y, Hanakawa T, Kitajo K	Phase-amplitude coupling of neural oscillations can be effectively probed with concurrent TMS-EEG	Neural Plast 6263907, 2019	EEG-TMSを用いて、TMSによるEEGのphase-amplitude couplingの変化が捉えられることを示した
Tsuchimoto S. Shindo K, Hotta F, Hanakawa T, Liu M, Ushiba J	Sensorimotor connectivity after motor exercise with neurofeedback in post-stroke	Neuroscience 416: 109-125, 2019	脳波BMI訓練の前後で運動野一体性感覚野の機能結合が可塑的に変化することを示した
Bando K, Honda T, Takahashi Y, Ishikawa K, Mizusawa H, Hanakawa T	Impaired adaptive motor learning is correlated with cerebellar gray matter atrophy in spinocerebellar ataxia patients: A voxel-based morphometry study	Front Neurol 10: 1183, 2019	<b>常髄小脳変性症のプリズム適応機能の低下が小脳の特定部位の萎縮と相関することを示した</b>
Honda T. Mitoma H. Yoshida H. Bando K. Terashi H. Taguchi T. Miyata Y. S. Hanakawa T. Aizawa H. Kondo T. Mizusawa H. Manto M. Kakel S	Assessment and rating of motor cerebellar ataxias with Kinect v2 depth sensor: Extending our appraisal	Front Neurol 11:179, 2020	動作センサーで背髄小脳変性症の重症度評価を行った
Chenyang Zhang, Ben J. E. Raveney, Hirohiko Hohjoh, Chiharu Tomi, Shinji Oki, and Takashi Yamamura	Extrapituitary prolactin promotes generation of Eomes-positive helper T cells mediating neuroinflammation	PNAS	
Hoshino H. Shirai Y, Konishi H. Yamamura T, Shimizu N	Efficacy of tocilizumab for fulminant multiple sclerosis with a tumefactive cervical lesion: A 12-year-old boy.	Mult Scler Relat Disord	
Takashi Yamamura, Ingo Kleiter, Kazuo Fujihara, Jaccueline Palace, Benjamin Greenberg, Beata Zakrzewska-Pniewska, Francesco Patti, Ching-Piao Tsai, Albert Saiz, Hayato Yamazaki, Yuichi Kawata, Padraig Wright, and Jerome De Seze	Trial of Satralizumab in Neuromyelitis Optica Spectrum Disorder	The New England Journal of Medicine	
追加 Kadowaki A, Saga R, Lin Y, Sato W, Yamamura T:	Gut microbiota-dependent CCR9+CD4+ T cells are altered in secondary progressive multiple sclerosis	Brain	
Takashi Y, Kesako H, Sawatsubashi S, Kinoshita Y, Ito N, Tsoumpra MK, Nangaku M, Abe M, Matsuhisa M, Kato S, Matsumoto T, Fukumoto S.	Activation of unliganded FGF receptor by extracellular phosphate potentiates proteolytic protection of FGF23 by its O-glycosylation.	Proc Natl Acad Sci U S A. 16 (11418-11427), 2019	締胞外リン酸による非リガンド結合FGF受容体の活性化は、FGF23のOグリコシル化によるFGF23のタンパク質分解 保護を増強する。
Motohashi N, Uezumi A, Asakura A, Ikemoto-Uezumi M, Mori S, Mizunoe Y, Takashima R, Miyagoe-Suzuki Y, Takeda S, Shigemoto K.	Tbx1 regulates inherited metabolic and myogenic abilities of progenitor cells derived from slow- and fast-type muscle.	Cell Death Differ. 26(6):1024-1036, 2019	Tbx1は、遅肉と速筋に由来する前駆細胞の遺伝的な代謝能力と筋形成能を調節する。
Kuhn J, Klein PM, Danaf N Al, Nordin JZ, Reinhard S, Loy DM, Höhn M, Andaloussi S El, Lamb DC, Wagner E, Aoki Y, Lehto T, L ä chelt U.	Supramolecular Assembly of Aminoethylene-Lipopeoticle PMO Conjugates into RNA Splice-Switching Nanomicelles.	Advanced Functional Materials, 2019	アミノエチレン-リボベブチド付加モルフォリノ核酸コンジュゲートの超分子集合体によるナノミセル化RNAスプライス・スイッチ核酸を開発した。
Sato M. Shiba N. Miyazaki D. Shiba Y. Echigoya Y. Yokota T. Takizawa H. Aoki Y. Takeda S. Nakamura A	Amelioration of intracellular Ca2+ regulation by exon-45 skipping in Duchenne muscular dystrophy-induced pluripotent stem cell-derived cardiomyocytes.	Biochem Biophys Res Commun. 26:520(1):179- 185, Nov, 2019	デュシェンヌ型筋ジストロフィー由来PS心筋細胞を対象にしたエクソン45スキップにより細胞内Ca 2+調節機構は改善する。
Echigoya Y, Lim KRQ, Melo D, Bao B, Trieu N, Mizobe Y, Maruyama R, Mamchaoui K, Tanihata J, Aoki Y, Takeda S, Mouly V, Duddy W, Yokota T,	Exons 45-55 Skipping Using Mutation- Tailored Cocktails of Antisense Morpholinos in the DMD Gene.	Mol Ther. 6:27:2005-2017, 2019	ヒトDMD遺伝子変異の違いに応じたアンチセンスモルフォリノ・カクテルの設計にによりエクソン45-55スキップを誘導した。
Tsoumpra MK, Sawatsubashi S, Imamura M, Fukumoto S, Takeda S, Matsumoto T, Aoki Y.	Dystrobrevin alpha gene is a direct target of the vitamin D receptor in muscle.	J Mol Endocrinol. 64(3):195-208, Apr., 2020	ジストロブレビンアルファ遺伝子は、筋肉のビタミンD受容体の直接的な標的である。
Sakai-Takemura F. Nogami K. Elhussieny A. Kawabata K. Maruyama Y. Hashimoto N. Takeda S. Miyagoe-Suzuki Y.	Prostaglandin EP2 receptor downstream of NOTCH signaling inhibits differentiation of human skeletal muscle progenitors in differentiation conditions,	Commun Biol, 3(1):182, 2020	NOTCHシグナル伝達の下流にあるプロスタグランシンEP2受容体は、分化条件下でのヒト骨格筋前駆網胞の分化を阻害する。
Takeuchi E, Yamada D, Suzuki S, Saitoh A, Itoh M. Hayashi T, Yamada M, Wada K, Sekiguchi M.	Participation of the nucleus accumbens dopaminergic system in the antidepressant-like actions of a diet rich in omega-3 polyunsaturated fatty acids.	PLoS ONE 15 (3): e0230647	この論文は、omega 3 脂肪酸の抗うつ様作用における側坐核のドーパミン神経の関与を報告したものです。
Takeuchi E, Yamada D, Suzuki S, Saitoh A, Itoh M, Hayashi T, Yamada M, Wada K, Sekiguchi M	Participation of the nucleus accumbens dopaminergic system in the anticlepressant-like actions of a diet rich in omega-3 polyunsaturated fatty acids	.PLOS ONE, (2020) 15 (3):e0230647	
Taniguchi K, Yamamoto F, Arai T, Yang J, Sakai Y, Itoh M, Mamada M, Sekiguchi M, Yamada D, Saitoh A, Kametani F, Tamaoka A, Yumiko M, Araki YM, Wada K, Mizusawa H, Araki W	Tyrosol reduces A ß oligomer neurotoxicity and alleviates synaptic, oxidative, and cognitive disturbances in Alzheimer's model mice	J Alzheimers Dis (2019) 70(3):937- 952.2019	

著者、発表者等	論文名、演題名等	掲載誌、学会等	成果又は特記事項
Mori-Yoshimura M. Mizuno Y, Yoshida S, Ishihara N, Minami N. Morimoto E, Maruo K, Nonaka I, Komaki H, Nishino I, Sekiguchi M, Sato N. Takeda S, Takahashi Y	sychiatric and neurodevelopmental aspects of Becker muscular dystrophy	P. Neuromuscul Disord (2019) 29(12):930- 939.201912	
Sakai R. Suzuki M. Ueyama M. Takeuchi T. Minakawa EN. Hayakawa H. Baba K. Mochizuki H. Nagai Y	E46iK mutant α~synuclein is more degradation resistant and exhibits greater toxic effects than wild-type α~synuclein in Drosophila models of Parkinson's disease	PLoS ONE. 2019 Jun 26:14(6):e021826 1.	
Iwama K, Mizuguchi T, Takeshita E, Nakagawa E, Okazaki T, Nomura Y, Iijima Y, Kajiura I, Sigai K, Saito T, Sasaki M, Yuge K, Saikusa T, Okamoto N Takahashi S, Amamoto M, Tonita I, Kumada S, Anzai Y, Hoshino K, Fattal-Valevski A, Sijroma N, Ohfu M, Moroto M, Tanda K, Nakagawa T, Sakakibara T, Nabatame S, Matsuo M, Yamamoto A, Yukishita S, Inoue K, Waga C, Nakamura Y, Watanabe S, Ohba C, Sengoku T, Fujita A, Mitsahi S, Miyatake S, Tanaka A, Miyake N, Ogata K, Ito S, Saitsu H, Matsuishi Y, Goto Y, Matsumoto N.	Genetic landscape of Rett syndrome-like phenotypes revealed by whole exome sewuencing.	J Med Genet 56(6): 396-407	MECP2変異を持たないレット症候群77例についてエクソーム解析を行い、39例に病因と考えられるパリアントを同定した。さらに、あたらに4つの遺伝子変異がレット症候群類似の臨床症状を惹起させうることを見いだした。
Nomura E. Ohta Y. Tadokoro K. Sato K. Sasaki R. Takahashi Y. Yamashita T, Takemoto M. Hishikawa N. Goto Y. Abe K.	A unique Japanese CPEO family with a novel homozygous m.14819T/G (p.S25A) substitution.	J Neurol Sci 400(5):145-147, 2019	慢性進行性外眼筋麻痺を示す患者で、新たなミトコンドリアDNA変異(m.14819TXG)を見いだした。
Nagao T, Shintani Y, Hayashi T, Kolka H, Kato H, Nishida Y, Yamazaki S, Tsukamoto O, Yashirogi S, Yazawa I, Asano Y, Shinzawa-Itoh K, Imamura H, Suzuki T, Suzuki T, Goto Y, Takashima S.	Higd1a improves respiratory function in the modes of mitochondrial disorder.	FASEB J 34: 1859-1871, 2020	COX活性を調節する機能をもつ分子としてHigd1を見いだし、COX活性が低下している患者細胞の機能回復を確認し、 新たな治療薬の可能性を示した。
Sasaki R. Ohta Y, Hatanaka N, Tadokoro K, Nomura E, Shang J, Takemoto M, Hishikawa N, Yamashita T, Omote Y, Morimoto E, Teshigawara S, Wada J, Goto Y, Abe K,	A novel homoplasmic mitochondrial DNA mutation (m.13376T>C, p.1347T) of MELAS presenting characteristic medial temporal lobe atrophy.	J Neurol Sci 408: 116460, 2020	典型的なMELASの臨床症状を有する患者に、新しくミトコンドリアDNA点変異(m.13376TXC)変異を見いだし、その病因性を検討した。
Suzuki W. Seno T, Yamashita W. Ichinohe N, Takeichi H, Palmisano S	Vection induced by low-level motion extracted from complex animation films	Exp Brain Res. 237(12): 3321- 3332, Dec, 2019.	
Ikegaya N. Nakagawa E. Sugai K. Sasaki M. Saito T. Sumitomo N. Iijima K. Kimura Y. Kaneko Y. Iwasaki M.	lctal deafness in drug-resistant MRI- negative epilepsy.	Epileptic Disord. 2019 Apr 1:21 (2):215-20. doi: 10.1684/epd.201 9.1042.	
Enokizono M. Sato N. Ota M. Shigemoto Y. Morimoto E. Oba M. Sone D. Kimura Y. Sugai K. Sasaki M. Ikegaya N. Iwasaki M. Matsuda H.	Disrupted cortico-ponto-cerebellar pathway in patients with hernimegalencephaly.	Brain Dev. 2019 Jun:41(6):507-15. doï 10.1016/j.brainde v.2019.01.002.	
kwama K, Mizuguchi T, Takeshita E, Nakagawa E, Okazaki T, Nomura Y, Iiima Y, Kailura I, Sugai K, Saito T, Sasaki M, Yuge K, Saikusa T, Okamoto N, Takehashi S, Amamoto M, Tonita I, Kumada S, Arazai Y, Hoshino K, Fattal-Valevski A, Shiroma N, Ohfu M, Moroto M, Tanda K, Nakagawa T, Sakakhara T, Nabatame S, Matsuo M, Yamamoto A, Yukishita S, Inoue K, Waga C, Nakamura Y, Watanabe S, Ohba C, Sengoku T, Futifa A, Mitsahita S, Myake N, Ogata K, Ito S, Saitsu H, Matsuishi T, Goto YI, Matsumoto N	Genetic landscape of Rett syndrome-like phenotypes revealed by whole exome sequencing.	J Med Genet. 2019 Jun;56(6):396- 407. doi: 10.1136/jmedgen et-2018-105775.	
Takata A. Nakashima M. Saitsu H. Mizuguchi T. Mitsuhashi S. Takahashi Y. Okamoto N. Osaka H. Nakamura K. Tohyama J. Haginoya K. Takeshita S. Kuki I. Okanishi T. Goto T. Sasaki M. Sakai Y. Miyaka N. Hiyatake S. Tsuchida N. Wama K. Minase G. Sekiguchi F. Fuita A. Imagawa E. Koshimizu E. Uchyama H. Hamanaka K. Ohba C. Itali T. Aoi H. Saida K. Sakaguchi T. Den K. Takahashi R. Ikeda T. Yamaguchi T. Tsukamoto K. Yoshitomi S. Oboshi T. Ima K. Kimizu T. Kobayashi Y. Kuboto M. Kashi H. Baba S. ki M. Kira R. Hara M. Okochi K. Shimono M. Amamoto M. Takayama R. Hirabayashi S. Aba K. Matsumoto H. Nabatame S. Shilhara T. Kato M. Miyata Y. Astsumoto H. Nabatame S. Shilhara T. Kato M. Matsumoto N.	Comprehensive analysis of coding variants highlights genetic complexity in developmental and epileptic encephalopathy.	Nat Commun. 2019-Jun. 7:10(1):2506. doi: 10.1038/s41467- 019-10482-9.	
Kimura Y, Shioya A, Saito Y, Oitani Y, Shigemoto Y, Morimoto E, Suzuki F, Ikegaya N, Kimura Y, Ijima K, Takayama Y, Iwasaki M, Sasaki M, Sato N,	Radiologic and pathologic features of the transmentle sign in focal cortical dysolasia: the T1 signal is useful for differentiating subtypes.	AJNR Am J Neuroradiol, 2019 Jun;40(6):1060-6. doi: 10,3174/ajnr.A60 67	
Ono H, Shimizu-Motohashi Y, Maruo K, Takeshita E, Ishiyama A, Saito T, Komaki H, Nakagawa E, Sasaki M.	Childhood-onset cerebellar ataxia in Japan: A questionnaire-based survey.	Brain Behav. 2019 Oct:9(10):e01392. doi: 10.1002/brb3.13 92.	
akeshita E. lida A. Abe-Hatano C. Nakagawa E. Sasaki M. Inoue K. Goto YI.	Ten novel insertion/deletion variants in MECP2 identified in Japanese patients with Rett syndrome.	Hum Genome Var. 2019 Oct 18:6:48. doi: 10.1038/s41439- 019-0078-2.	
Aoki Y, Hanai S, Sukigara S, Otsuki T, Saito T, Nakagawa E, Kaido T, Kaneko Y, Takahashi A, Ikegaya N, Iwasaki M. Sugai K, Sasaki M, Goto Y, Oka A, Itoh M.	Altered expression of astrocyte-related receptors and channels correlates with epileptogenesis in hippocampal sclerosis.	Pediatr Dev Pathol. 2019 Nov- Dec:22(6):532-9. doi: 10.1177/109352 6619855488.	
Hirasawa-Inoue A. Ishiyama A. Takeshita E. Shimizu- Motohashi Y. Saito T. Komaki H. Nakagawa E. Yuasa S. Saitsu H. Hamanaka K. Miyatake S. Matsumoto N. Sasaki M.	Single-fiber electromyography-based diagnosis of CACNA1A mutation in children: A potential role of the electrodiagnosis in the era of whole exome sequencing.	Brain Dev. 2019 Nov:41(10):905-9. doi: 10.1016/j.brainde v.2019.06.006.	
Hirasawa-Inoue A, Takeshita E, Shimizu-Motohashi Y, Ishiyama A, Saito T, Komaki H, Nakagawa E, Sugai K, Inoue K, Goto Yi, Sasaki M.	Static leukoencephalopathy associated with 17p13.3 microdeletion syndrome: A case report.	Neuropediatrics, 2019 Dec:50(6):387-90, doi:10.1055/s- 0039-1693972.	

著者、発表者等	論文名、演題名等	掲載誌、学会等	成果又は特記事項
Ueda R. Matsuda H. Sato N. Iwasaki M. Sone D. Takeshita E. Shimizu-Motohashi Y. Ishiyama A. Saito T. Komaki H. Nakagawa E. Sugai K. Sasaki M. Kaga Y. Takeichi H. Inagaki M.	Alteration of the anatomical covariance network after corpus callosotomy in pediatric intractable epilepsy.	PLoS One. 2019 Dec 5:14(12):e022287 6. doi: 10.1371/journal.p one.0222876.	
Ogasawara M. Saito T, Koshimizu E, Akasaka N, Sasaki M.	A p.Arg499His mutation in SPAST is associated with infantile onset ascending spastic paralysis complicated with dysarthria and anarthria.	Neuropediatrics. 2019 Dec:50(6):391-4. doi: 10,1055/s- 0039-1694973.	
Segawa K, Sugawara N, Maruo K, Kimura K, Komaki H, Takahashi Y, Sasaki M.	Left ventricular end-diastolic diameter and cardiac mortality in Duchenne muscular dystrophy.	Neuropsychiatr Dis Treat. 2020 Jan 16:16:171-8.	
Fuji H, Sato N, Takanashi JI, Kimura Y, Morimoto E, Shigemoto Y, Suzuki F, Sasaki M. Sugimoto H.	Altered MR imaging findings in a Japanese female child with PRUNE1- related disorder.	Brain Dev. 2020 Mar:42(3):302-6. doi: 10.1016/j.brainde v.2019.12.001.	
Nakashima M. Tohyama J. Nakagawa E. Watanabe Y, Siew CG. Kwong CS. Yamoto K. Hiraide T. Fukuda T, Kaname T. Nakabayashi K, Hata K, Ogata T, Saitsu H, Matsumoto N.	Identification of de novo CSNK2A1 and CSNK2B variants in cases of global developmental delay with seizures.	J Hum Genet. 2019 Apr:64(4):313-22.	
Yasumura A, Omori M, Fukuda A, Takahashi J. Yasumura Y, Nakagawa E, Koike T, Yamashita Y, Miyajima T, Koeda T, Aihara M, Inagaki M.	Age-related differences in frontal lobe function in children with ADHD.	Brain Dev. 2019 Aug:41 (7):577-86.	
Saito Y, Kaga Y, Nakagawa E, Okubo M, Kohashi K, Omori M, Fukuda A, Inagaki M.	Association of inattention with slow- spindle density in sleep EEG of children with attention deficit-hyperactivity disorder.	Brain Dev. 2019:41(9):751- 9.	
Shigemoto Y, Sato N, Kimura Y, Morimoto E, Suzuki F, Ikegaya N, Iwasaki M, Nakagawa E, Matsuda H.	Postoperative changes in the brain: Assessment with serial T2W//FLAIR MR images in non-neoplastic patients.	Epilepsy Res. 2019.08:154:149 -51.	
Ueda R. Takeichi H. Kaga Y, Oguri M, Saito Y, Nakagawa E, Maegaki Y, Inagaki M.	Atypical gamma functional connectivity pattern during light sleep in children with attention deficit hyperactivity disorder.	Brain Dev. 2020:42(2):129- 39.	
lida A, Takano K, Takeshita E, Abe-Hatano C, Hirabayashi S, Inaba Y, Kosugi S, Kamatani Y, Momozawa Y, Kubo M, Nakagawa E, Inoue K, Goto Y.	A novel PAK3 pathogenic variant identified in two siblings from a Japanese family with X-linked intellectual disability case report and review of the literature.	2019 Cold Spring Harb Mol Case Stud 5 (6), 2019 Dec 13 DOI: 10,1101/mcs.a 003988	
Fujii T. Takeshita E. Iwata Y, Yajima H. Nozaki F, Mori M, Kumada T.	Cumulative jerk as an outcome measure in nonambulatory Duchenne muscular dystrophy.	Brain Dev. 2019:41(9):796- 802.	
Verma M. Shimizu-Motohashi Y, Asakura Y, Ennen JP, Bosco J, Zhou Z, Fong GH, Josiah S, Keefe D, Asakura A.	Inhibition of FLT1 ameliorates muscular dystrophy phenotype by increased vasculature in a mouse model of Duchenne muscular dystrophy.	PLoS Genet. 2019 Dec 26:15(12):e10084 68. doi: 10.1371/journal.p gen.1008468.	
Motoki T, Shimizu-Motohashi Y, Saito I, Komaki H, Ishiyama A, Albara K, Jogamoto T, Tezuka Y, Kawabe M, Makino A, Nagatani K, Tatara K, Kuwabara K, Kikuchi C, Fukuda M, Ishii E, Eguchi M.	Renal dysfunction can occur in advanced-stage Duchenne muscular dystrophy.	Muscle Nerve. 2020 Feb:61 (2):192-7. doi: 10.1002/mus.267 57.	
Nakayama T, Ishiyama A, Murakami T, Kimura E, Kuru S.	Automatic calculation of Mercuri grades from CT and MR muscle images.	Brain Dev. 2019 Nov:41 (10):870-7.	
原 賢寿、宮田 元、西野一三	MYH7遺伝子変異によるLaing型遺位型ミオパ チーの1例	臨床神経学	症例は67 歳男性、父親に類症が疑われた。53 歳時に下肢遺位の節力低下を自覚。56 歳時に両側前脛骨折の筋力低下 と抗差縁をみとめ。58 歳道から両側上肢近位節の筋力低下と抗差線も加わった。CK は持縁的に軽度上昇していた。 紡 組織では光鏡でする人体構造が助筋線維維的あれた。在第10条で、電質で7番とサルコンス中臓炎の排験をみとめ。一見。 前原線維性ミオバチー様の変化であった。遺伝子解析でMYHT 遺伝子にヘテロ接合性の変異(c.5566G)入。 DE1856K)をみとめ、上町中型遠位型ミオバチー(Laing type distal myopathy:LDM)と診断した。本例は日本人 としては最初のLDM の報告である。
中村崇志,上野達哉,新井陽,鈴木千恵子,西野一三,富山誠 彦	誹腹筋の筋肥大をきたさず持続性高CK血症を 呈したS1神経根症の1例	臨床神経学	虚例は間欠性跛行を主訴にした72歳男性。下腿三頭筋の筋肥大は全経過で明らかではなかった。Creatine kinase (CK) 1.525 U/I以外は自己抗体等含め異常はなく、左腓腹筋の針筋電図検査で活動性神経原性変化を認めた。MPIでは肾柱管狭窄と左14、両側S1神経程圧迫があり、両側腓腹筋に72 強調画像で高信号を認めた。右腓 腹筋の筋病理ではは肾柱管狭窄と左14、両側S1神経程度を近があり。高CK 血症を下5-51神経視度、腿部脊柱管架度と 診断した。HP経程度に伴う高CK血症では腓腹筋の筋肥大を伴った報告が多いが、間欠性跛行を伴う高CK 血症では下腿の筋肥大がなくてもS1神経視症の可能性を考える必要がある。
矢田知大,三輪隆志,荒木克哉。木田 亨,豊岡圭子,西野一 三,巽 千賀夫	筋生検から診断に至った全身性ALアミロイドーシスの1例	臨床神経学	症例は69歳男性、1年前から緩徐に進行する易疲労性があり、初診時に下肢優位の四肢近位筋の筋力低下と嗄声、軽度 の底下障害を認めた、三角筋の筋生検でring fiber 様の構造を有する筋線維と血管壁におけるアミロイド沈音があり、ア ミロイドミオパチーと診断した。血中、尿中で κ 型Bence-Jones 蛋白を検出し、骨髄検査で異形形質細胞の増加を認 め、多発性骨髄腫によるAL アミロイドンラスと診断した、止砂下脱消化管でも生検でアシロイド対害を形形で 法を行ったが、筋力低下が進行し損感性肺炎で死亡した。筋生検を契機に全身性AL アミロイドーシスの診断と治療を経 験した1例だった。
松本俊彦,高野歩,熊倉陽介,宇佐美貴士,伴惠理子,窪田和巳	保護観察の対象となった薬物依存症者のコホート調査システムの開発:「Voice Bridges Project」	更生保護学研究 14,3 - 18,06,2019	われわれは、保護観察対象となった薬物事犯者を精神保健福祉センターにおいて追跡して転帰を調査するとともに、保護 観察から地域支援へのシームレスなつながりを高めるシステムを構築するというアクション・リサーチを実施している。 本プロシェクトは、2017年3月より当初4つの地域で開始され、漸次、対象地域が拡大して、2018年12月時点で11 の地域で実施されているが、本論文では、その方法の持線、ならびに、2018年12月末時点での中間的な程果の表を報告するとともに、薬物依存症地域支援の課題について若干の考察を行った。本研究の中間的な起果からは、保護観察対象者は 保護 観察開始から時間能温に伴って再使用者率が高まるにもかかわらず、薬物依存症に対する支援ニーズを失い、回復プログラムから遠さかり、そして新たに社会資源につながることもない、という実態が明らかにされた。その一方で、本研究 では、精神保健衛祉センターは情報収集をかねて直接支援を提供することで、数少ないつながりを作る社会資源として機能し、保護観察対象者の転帰に好ましい影響を与える可能性が示唆された。
高井美智子,川本静善,山内貴史,川野健治,小高真美,福永能繁,松本俊彦,竹島正	自殺発生から間もない遺族に求められる支援の 授業的検討・心理学的創検研究における自死遺 族の思りから・	自殺予防と危機介入 39 (1) .124 - 131,06.2019	本研究は、自殺発生から間もない遺族に求められる支援のあり方を明らかにすることを目的として、東京都監察医務院が 連携して実施した心理学的的接供学の面接において情報収集した。自死遺族のサポートニーズに関して探索的に検討を 行ったものである、対象者は平成26年5月から平成27年10月までに、監察医が検案にあたった事例のうう、形図が自 設であった25名(男性14名: 平均年齢46.6±11.3歳)の遺族である。自殺発生から調査面接実施までの 期間は603-446.3日であった。自死遺族は身体的、社会的問題を指定されるが、直面している問題が収金を支援の種類 が性別 により異なっていることが明らかとなった。遺族の性別や故人との関係性等に考慮しつつ、遺族に寄り添いながら、メン タルヘルスについての専門的な知識のみならず社会資源に関する幅広い情報をきちんと有する対人援助調による支援の必 要性が示唆された。

著者、発表者等	論文名、演題名等	掲載誌、学会等	成果又は特記事項
大澤5ひろ, 伊藤絵美, 三浦文華, 風岡公美子, 伴恵理子, 小畑 輝海, 松本俊彦	更生保護施設における女性覚せい剤乱用者の心 理社会的特徴	日本アルコール・薬 物医学会雑誌 54 (3),136 - 155,06,2019	
大宮宗一郎、谷渕由布子、石田曹美、柳友里、山口朽洋、藤井 実、吉永宏太郎、林備明、関谷希望、田畑聡、白川雄一郎、堀口 忠利、森田殿彰、斎藤環、奥村太一、近藤あゆみ、松本俊彦	精神保健福祉センターにおいて薬物再乱用防止 プログラムを提供するすることの意義-プログ ラム参加時点の参加者の特徴を踏まえた考察-	日本アルコール・薬 物医学会雑誌 54 (3),120- 135,06,2019	
高木のり子、太田晴久、池田明広、高塩理、松本俊彦	多職様チームによる個別介入とワークブックを 用いた認知行動療法をワンパッケージ化したプ ログラムの実践ーラン麻とアルコール問題を併 せ持つ者への介入法の検討から-	精神科治療学 34 (11),1323 - 1330,11,2019	本研究では、アルコール問題とうつ病を併せ持つ者に対し、多職種チームによる介入を中心とした個別プログラム(アル コールプライマリーケアバッグ)の実践を拡みた。その結果、この治療バッグによって、チームにおける各職権が、個別 こその専門的が環から介入を行うことができた。また、ワークブックを活用した個別パへか導入とアルコールプライマ リーケアバック入院プログラムの業務定着化によって、アルコール専門治療機能のない精神料ー船開放無様においても、 高者への早期介入が可能であることが確認された。治療過程において、早期の物質使用の問題へのアセスメントと早期の 教育的介入が必要かつ可能であると考えられた。
総根卓也、高橋 哲、竹下賢子、小林美智子、高岸百合子、大宮 宗一郎、近議あゆみ、高野洋一、山本麻由子、松本俊彦	覚せい剤事犯者における薬物依存の重症度と再 犯との関連性:刑事施設への入所回数から見た 再犯	日本アルコール・薬 物医学会雑誌 54 (5),12,2019	
嶋根卓也、邱冬梅,和田淸	日本における大麻使用の現状:薬物使用に関する全国住民調査2017より	YAKUGAKU ZASSHI 140 (2) ,173 - 178,01,2020	
山田理沙。嶋根卓也,舩田正彦	レクリエーショナル・セッティングにおける危 険ドラッグ使用パターンの男女別検討	日本アルコール・薬 物医学会雑誌 54 (6),01,2020	
谷貴如、高野洋一、高宮英輔、嶋根奉也	党はい剤取締法違反により刑事施設に入所した 刑の一部執行猶予者の心理・社会的特徴	Jap.J.Crim.Psychol 57 (2) ,1 - 15.01.2020	本研究で一部猶予者と全部実刑者の心理・社会的特徴の差異及び一部執行猶予の適用と強く関連する特徴を分析した限り において、初入者・累入者のいずれも、一部猶予者となりやすい心理・社会的特徴を有する者は、そうでない者に比べ薬 物依存の重症度が高く、処遇の必要性がより高いと考えられる者が多かった。また、初入者では処遇の必要性、最入者に は相当性を特に意識して、個々の心理・社会的特徴の差異を十分反象した一部執行猶予の周升がなされていることが明ら かになった。以上から一部執行猶予の適用の判断は、規制薬物等に対する依存に関する医学・心理学的な観点に照らして もおおむね妥当なものであると考えられ、再知防止を自的とする周制度の遺旨にかなう連用となっていることが示唆され た。
松島 公望, 林 明明, 荒川 歩	キリスト教信者におけるキリスト教的宗教意識 と主戦的幸福感との関連・ローマ・カトリック 教会とホーリネス系A教団を対象にして	社会心理学研究 35 (2),39 - 49,11,2019	キリスト教的宗教意識尺度を作成し、ローマ・カトリック教会、ホーリネス系A教団の指導者、信者を対象に、主観的幸福感との関連を検討した。
小原干鄉	摂食障害患者と家族への支援	金子書房 80-88, 08,2019	
河西ひとみ、関ロ敦、霊田吉敬、船場美佐子、本田輝、樋上57半、藤 井靖、安藤哲也	贈管ガスに関連する症状を主訴とする患者への 認知行動療法の無効例から考える今後の臨床研 究の方向性	心身医学 60 (1),50 - 57,01,2020	
高格信、芳賀清惠、三浦直樹、青山久枝、狩川大輔、関口敦、川 島隆太	管制官の空間情報処理の神経基盤:機能的MPI を用いた研究	ビューマンインタ フェース学会論文誌 22(2), 35-42, 01,2020	
坂井有里枝, 川崎聡, 森口勲, 河村葵, 栗山健一	医学生の睡眠と学業成績の実態調査 医学生に も眠りは重要	心と社会 50(1): 38- 43, 2019	
松野悟之, 吉池卓也, 吉村篤, 森田幸代, 籐井勇佑, 栗山健一	バランスバッドを用いた立位足底知覚トレーニング施行中の頭頂連合野の脳活動と足圧中心動 揺指標との関連性の検討 高齢者2例での試み	大阪行岡医療大学紀 要 6: 17-22, 2019	
北 洋輔,芦沢文子,稲垣真澄	発達性読み書き障害の早期発見に向けた行動観察項目の開発	小児保健研究 78 (3),191 - 198,05,2019	
奧村安寿子,北 洋輔,加賀佳美	日本語によるコミュニケーションが不十分な子 ともの学習困難を評価する:スウェーテン語母 語児に対する学習・知能検査の事例より	コミュニケーション 障害学 36 (3) ,99 - 112,12,2019	
北村柚葵、北 洋輔、奥村安寿子、稲垣真澄、奥住芳之、石川裕 司	小児期における音高弁別能力の発達的変化	音楽知覚認知研究 25 (1),3- 12,08,2019	
山口智史, 西田明日香, 小川佐代子, 小塩鋳崇, 東郷史治, 佐々木司	学校教員を対象としたメンタルヘルスリテラ シー教育プログラムの効果検証バイロットスタ ディ	学校保健研究 61 (1),7- 13,04,2019	学校教員のメンタルヘルスリテラシーは、生徒への授業実施や日々対応のために必要である。本研究では学校教員向け に、映像教材を用いたメンタルヘルスリテラシー教育プログラムを実施し、その効果を検証した。プログラムを受講した 教員では、受護後の精神疾患に関する知識の上と態度の次番が観察された。簡易なツールを用いた教育プログラムは、学 校教員のメンタルヘルスリテラシー向上に有効かもしれない
塩澤托克、松長麻美、佐藤さやか、藤井千代	統合失調症をもつ人の家族が求める情報と精神 科訪問着護スタッフが提供する情報の比較・インターネットを用いたアンケート調査-	臨床精神医学 48 (7),887 - 898,07,2019	統合失調症をもつ患者の家族が医療従事者から通常の支援の中で受けている情報提供と、訪問看護スタッフが日常の臨床 活動で実施している情報提供の所容の相違について検討すべくインターネット調査を実施した。結果、精神保健・障害福 ゼサービスに関する情報提供は精整的には行われておらず、患者家族の二、ズへの対応は十分でないことが明らかとなった。 訪問看護スタッフの回答から、説明ツール等の存在の有用性が示唆された。
小池转子,常阿俊昭,池田朋広、黑田冶、針間博彦,小池冶、稲本亭子	描置入院患者と医療観察法対象者の比較に基づく現状と支援に関する検討	精神医学 61 (5) ,583 - 593,05,2019	指置入院患者と医療観察法対象者の特性の比較を行った。その結果、指置群、観察法群ともに生活保護受給者が多く、家 族の支援に乏しい生活上の困難を抱えていた。観察法群では思考の順意、不定期受診者、過去の触法経歴と指置入院経歴 を有する者の割合が高かった、指置入院は、その後の再他書行為、重大な他書行為を未然に防ぐ可能性があり、他書行為 の予防支援を図る制度への転換が望まれる
小池絲子, 小池治, 佐藤裕大, 小嶋草吾	重大な他害行為を行った精神障害者の入院中の 回復プロセスの解明と智護支援-M-GTAを用い た前向きさを取り戻した経験に基づく分析-	日本精神保健看護学 28 (1),1 - 11,06,2019	入院中の重大な他害行為を行った精神障害者の前向きさを取り戻したプロセスを、M-GTAを用いて分析した。10個の 概念と3つのカテゴリーが生成され、リカパリーの構成要素をプロセスとしてだとっていることが明らかになった。この ようなプロセスの経験は、用他害行為の予防の一動になると考えられ、入院中に経験できることが望まれた
小池絲子,池田明広,稲本淳子,森田哲平,常阿俊昭,佐藤裕大,宫城純子,長谷川惠子,岩波明,中台屬二	他書行為を要件に指置入院をした統合失調患者 の家族への支援体制の検討・他書行為を受けた 家族へのインタビュー調査から-	精神科 35 (2),229 - 236,08,2019	指置入院患者家族へのインタビュー調査を質的に分析したところ、指置入院患者家族には、効果的な対処を見出せないま ま度重なる襲力を受け続け、医療や支援者とつながりたくてもつながれない苦悩があった。家族の現状は、精神保健医療 福祉支援の不十分さを浮き彫りにしており、他書行為を生まない支援体制の構築、整備を図ることが喫緊の課題であった
森田展彰,波邊敦子,新井清美,小池純子,望月明見,大宮宗一郎,受田恵建,山田理惠	更生保護施設における薬物事犯への支援に関する研究	更生保護学研究 15.4 - 18.12.2019	

****		.=	
著者、発表者等	論文名、演題名等	掲載誌、学会等	成果又は特記事項
山口創生,水野雅之、種田綾乃、相田早織、澤田宇多子、小川 売、小塩靖崇、御蘭恵将、濱田由紀、藤井千代、相川最子	障害福祉サービス事業所におけるビアサポーターの有無とアウトカムとの関連:前向き縦断研究	臨床精神医学 49(2): 277-288	本研究は、日本の障害福祉事業所(就労継続B型と地域活動支援センター)におけるピアサポートと利用者のアウトカム (サービス満定度など)の関連を検証した縦断研究であった。研究の結果、障害福祉事業所におけるピアサポーターの配 菌は、利用者のアウトカムと全く関連がなかった。本稿は、日本におけるピアサポートの位置づけについて、再考を促す 考察を加えている
小塩餚崇,住吉太幹, 藤井干代, 水野獲文	学校・地域におけるメンタルヘルス教育のあり 方	予防精神医学4(1)	2022 年度から精神疾患に関する内容が学校教育で扱われることになったことを踏まえ、国内外の先行研究の知見から、精神疾患の教え方、精神医療の専門家の関わり方を検討した。また、心の健康問題の援助吊求や援助行動を促すための介入の計画に必要な理論的枠組みを者祭した。
小塩GG崇、佐藤さやか、市川健、下平美智代、種田綾乃、山口創生、高井歌子、藤井千代・	隔書者就業・生活支援センターにおける精神障害者の就労支援に関する実態調査	日本社会精神医学会 雑誌 28(3) 246 - 254	博書者就業・生活支援センターにおける精神障害者の就労支援実態を明らかにするため、また良好な就労転帰を示す機関の特徴を定量的に示すことを目的に、全国316機関を対象に質問紙調査を行った。168機関が勢桁攻象となった。良好な就労転帰との関連は、新規登録者のケースロード、ソーシャルプーカーの人数、スタップの平均年齢であることを示した
堀井清香、酒井佳永、田川杏那、ビーター・バーニック、随恵理 子、秋山劇、立春久照	復職準備性評価スケール(Psychiatric Rework Readiness Scale)によるリワークブ ログラム参加者の就労継続の予測妥当性 ?就 労総続に影響する要因-	精神神経学雑誌 121 (6),445 - 456,06,2019	レジリアンスの改善を目的とするリワークブログラム参加者においてもPRRSが就労継続を予測できるか、また、就労継続に影響する社会人口的要因、臨床的要因について検討を行った。
這同 健一(国際医療福祉大学 大学院),立森 久熙,并上 智貴	講座 ビッグデータ 医療ビッグデータで地域 を動かす-理学療法士が果たせる役割(解説)	理学療法ジャーナル 53 (6),603 - 613,06,2019	本稿では主に影容中分野のリハビリテーション領域を素材にして、その現状と将来を考察していきたい2018年度から動いている都語前解集7次医療計画や2015年からスタートレビ地域医療構想の策定も、地域を作べれの環境を同定したうえでそれを解決する体制がよなっている本語では、赤着がビッグデータの活用によって診療報酬に医療計画を地域においての名き地域の特性を指すえた将来像を譲渡することができることをからす。人ひどのが単年施士など医療課件者がどの地域で働くべきがミッションやキャリアを考えるときにも有益な情報となる本稿では主に脳卒中分野のリハビリテーション情報を代きがミッションやキャリアを考えるときにも有益な情報となる本稿では主に脳卒中分野のリハビリテーション情報を表表としてにピッチーターの表示といる。
照并 唐太旧本小児外科学会)、平原 憲道,立吞 久熙,加藤 直広, 居代 準, 岌辺 栄一郎、富田 航史、岡本 電泳, 藤雄木 亨真, 岡本 晋 张, 米倉 竹夫, 宮田 裕章, 日井 規則, 日本小児外科学会NCD連絡 要員会	NCD・学会データを用いた臨床研究ワーク ショップ 小児外科手術の医療品質評価 リス クモデル作成の進捗報告(続報)(会議録)	日本小児外科学会雑誌 55(3),484-,05,2019	
立森久照	これからの論文を書く人のための統計の使い方 と報告の仕方 第28回「ポストP<0.05時 代」のための統計学・ペイズ統計を理解する- (その13 時系列解析3)	日本社会精神医学会 雑誌 28 (3),323 - 323,08,2019	
小池絲子,河野給明、大町佳永、村田雄一,久保正恵、黒木規臣、藤 井干代、平林直次	医療観察法指定入院医療機関テータベースの活用と課題・多額権スタッフに対するグループインタビュー調査から-	精神医学 61 (11),1343 - 1352,11,2019	医療観察法テータベース (DB) の現状と課題を明らかにするために、医療観察法多職種スタッフを対象にインタビュー 調査を行った。その結果、DB活用への精験的姿勢の要因と消磨的姿勢の要因が由出され、前者には、比療標準化の共有 の必要性 ) と (外部球状共有の必要性) があり、後者には、(情報リブラシーの強化) (運用や設計の影響にの必要性) が含まれた。DBは、歴史的資料を考慮が、定義におかつ制御、信用していればならない項目で構成されているが、臨床 のニースにも対応し、医療観察法医療の水準の向上に寄与していく必要がある。
高まどか、山下隣、鈴木直維、勝野雅央、村田顕也、野寺裕 之、手島梨恵、稲村連海、西野-三、青木正志	封入体筋炎患者を対象とするBYM338の後期 第1相/第11相試験(RESILIENT):日本人部 分集団データ	臨床神経学 59 (12),806 - 813,11,2019	
岩崎真樹、販島圭哉、高山裕太郎、木村唯子、金子裕	てんかん外科の課題とみらい	脳神経外科ジャーナ ル 28 (6) ,326 - 333,06,2019	
岩﨑真樹、佐藤志帆、池谷直樹、木村唯子、金子裕、曾根大地、 佐藤典子	側頭葉てんかんの外科治療戦略における海馬の 画像解析	CI研究 41 (1),17 - 22,06,2019	
住友典子, 石山昭彦, 竹下絵里, 本橋裕子, 齊藤祐子, 小牧宏文, 佐々木征行	小児慢性炎症性脱髄性多発ニューロパチーの多様性	脳と発達 51 (5),303 - 308,09,2019	
立石貴之。渡部琢也,線田瑞木、藍原由紀,勝田若奈小林庸子	パーキンソン病患者に対する集団的要素を取り 入れた外来理学療法プログラムの試み	理学療法科学 34 (2),227 - 232,04,2019	
近藤 夕駒. 板東 杏太. 有明 陽佐. 勝田 若奈. 小林 庸子, 早乙女 貴子. 高橋 花二	歩行可能な背髄小脳変性症患者に対する短期集 中バランストレーニングが身体機能に及ぼす効 果-Balance Evaluation Systems Test (BESTest) を用いて-	神経治療学 35 (5),628 - 632,05,2019	
立石貴之, 波部琢也, 脇田瑞木, 藍原由紀, 勝田若奈, 早乙女貴子, 小林庸子, 望月 久, 村田美徳	パーキンソン病患者に対する集団的要素を取り 入れた外来理学療法プログラムの試み	理学療法科学 34 (2),227 - 232,04,2019	(目的) 外来のパーキンソン病 (PD) 患者への固別的理学療法を数組同時に行うことで集団的要素を取り入れたプログラムの実施結果について検討した。(対象と方法) 外来PD接着さらるに、集団的要素をきむらり始回プログラムと習り、12回間実施し、実施前後のPD患者の運動機能およびQOLの変化を呼加し、オフログラム実施後の運動管情機等が、及を調査した。(結果) 10 mが行の歩気、6分間歩行距離、PDQ-38の2頃目に有意な改善を認めた。運動管情は実施後6ヵ月時点でも維持されていた。(結婚) 今回実施したプログラムはPD患者の身体機能およびQOLの改善、運動管情の獲得に寄与する可能性がある。
大久保智紗、寺島總、山田圭介、伊里綾子、藤里紘子、宮前光宏	感情調整が困難な青年に対する「感情予測と問題解決のためのシステムストレーニング(STEPPSI)短縮版の予備的検討	臨床心理学 19 (4),471 - 476,07,2019	感情調整が困難な大学生を対象に、STEPPS12回短縮版の実施可能性を検討した結果、おおよそ問題なく実施することができ、BPD症状を改善する可能性を示した。
北 洋輔,白川由佳,鈴木浩太、江頭優佳,加賀佳美、北村柚 葵、西村悠貴,山下裕史郎、稲垣真澄	注意欠如多動症児の協調運動機能が行為選択に 及ぼす影響	脳と発達, 52(1):5-10, 2019.12.25	
野村照幸, 森田展彰, 村杉謙次, 大谷保和, 斎藤環, 平林直次	医療観察法病棟におけるクライシス・ブランの 作成と活用に関する実態調査	臨床精神医学49(3), 415-421,03, 2020	
柏木 宏子, 山下 真吾, 平林 直次	責任能力が争点となった死刑求刑事件(大量殺人のケース)の判決文明査一重大事件における 精神鑑定と責任能力判断の変遷一	精神神経学雑誌	判決文調査の結果、動機には精神障害が影響したが、犯行自体は正常心理、とするなど、「動機」と「犯行自体」を切り 難して者察した死刑判決が続いている。背景には可知験への変化(1984〜)や7つの音眼点の音及(2006〜)、被害者 参加制度(2008)、裁判負数料(2009)の開始、数割化の派化、精神障害者のノーマライビーション化等から考えられた。 記後に、診断を超えて、ケースフォーミュレーションにより視覚的に病気の部分やその他の要因の犯行への影響を 分かりやすく図示することや、ライフチャートにより護定の科学性と透明性を高めることを提案した。
ジル・エレンリッチ-メイ、サラ・M・ケネディ、ジェイミー・A・シェアマン、エミリー・L・ピレック、ディビッド・H・パーロウ (著)、藤里妹子・堀越勝 (監訳)、伊藤正哉・加藤典子 (翻訳)	つらい感情とうまくつきあう認知行動療法の統 ープロトコル 子どものための感情探偵プログ ラム ワークブック	福村出版	Unified protocol for transdiagnostic treatment for emotional disorders in children:Workbookの日本版
ジル・エレンリッチ-メイ, サラ・M・ケネディ、ジェイミー・A・シェアマン、エミリー・L・ビレック, ブライアン・A・パゼッラ, シャノン・M・ベネット、ディビッド・H・バーロウ(著)、顔里株子・短越勝(鑑款), 伊藤正哉・加藤典子 (翻訳)	つらい感情とうまくつきあう認知行動療法の終 ープロトコル 子どものだめの感情保負プログ ラム セラビストガイド	福村出版	Unified protocol for transdiagnostic treatment for emotional disorders in children and adolescents : Therapist guideの日本版
住发典子、石山昭彦、竹下絵里、本橋裕子、齊藤祐子、小牧宏 文、佐々木正行。	小児慢性炎症性脱髄性多発ニューロバチーの多様性.	脳と発達。 2019:51:303-8.	